

# 射水市内遺跡発掘調査報告Ⅱ

— 高島A遺跡・松木遺跡・千田遺跡本発掘調査他 —

2010年

富山県射水市教育委員会



上 高島 A 遺跡遠景（北から） 下 高島 A 遺跡 1 地区 2 号溝出土 鳥形木製品（弥生時代）



卷首図版 2



高島 A 遺跡 1 地区 2 号溝出土遺物（弥生時代）

# **射水市内遺跡発掘調査報告Ⅱ**

— 高島A遺跡・松木遺跡・干田遺跡本発掘調査他 —

2010年

富山県射水市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は、富山県射水市内において射水市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 試掘調査・本発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、国庫補助金・県費補助金を受けて実施した。
- 3 対象となった埋蔵文化財、並びに調査に関する位置・原因・面積・期間等は各章第1節に記した。
- 4 本書の執筆・編集は、射水市教育委員会文化・スポーツ課主任 田中 明・主任 金三津英剛が担当した。また、第5章第3節第4項では日宮城について中世城館研究者高岡 徹氏より玉稿を頂いた。深く感謝の意を表したい。
- 5 第5章第2節・第3節に掲載した現況測量図は、株式会社エイ・テックに業務委託した成果品を使用した。
- 6 発掘調査及び遺物整理の従事者は次のとおりである。（五十音順）  
【現地調査】 綱谷敷二・石野勝憲・岩本勝國・上田一夫・魚 三男・木原そとえ・佐賀理敏  
　　菅谷誠吉・鈴木澄子・善光久幸・戸田庄一・端 充弘・八田 弘・松林教子  
　　湊 敏之 (以上射水市シルバー人材センター)
- 【整理作業】 高瀬直子・間 一美・堀埜実津子・吉沢泰子
- 7 発掘調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて射水市教育委員会で一括保管している。

## 凡　　例

- 1 本書で用いた座標は世界測地系第VII系に準拠した。方位は真北、水平基準は海拔高である。
- 2 遺構の分類記号は次の呼称を踏襲した。  
S B : 掘立柱建物 S D : 溝 S E : 井戸 S K : 土坑 S R : 谷 S X : 不明遺構  
3 遺構実測図の縮尺は各々のスケールとともにその縮尺を表記した。遺物実測図の縮尺は土器の  
1/3・1/4を基本とするが、縮尺の異なるものはスケールとともにその縮尺を表記した。
- 4 出土遺物の番号は、遺物実測図・遺物観察表・写真図版の遺物番号にそれぞれ対応している。
- 5 本書で用いた土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』に準拠している。
- 6 第5章第1節における発掘地区図版の試掘トレンチ脇の記号は、遺物の出土位置を示し種類は  
次のとおりとした。  
● : 繩文土器 □ : 弥生土器 ▽ : 土師器 ▲ : 須恵器 ■ : 珠洲 ▧ : 中世土師器  
○ : 中世陶磁器 ⊗ : 近世陶磁器 ○ : 木製品 ◆ : 石製品 ★ : 金属製品 ◇ : 鉄滓  
☆ : その他（近代以降） T : トレンチ  
7 遺物実測図中の土器断面の表現は次のとおりとした。  
■ : 須恵器・珠洲 ■ : 赤彩処理 ■ : 煤・炭化物

# 目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	1
第2章 高島A遺跡本発掘調査 .....	3
第1節 調査に至る経緯 .....	3
第2節 調査の概要 .....	4
第3節 遺構と遺物 .....	4
第1項 本発掘調査1地区 .....	4
第2項 木発掘調査2地区 .....	17
第4節 総 括 .....	17
第3章 松木遺跡本発掘調査 .....	26
第1節 調査に至る経緯 .....	26
第2節 調査の概要 .....	26
第3節 遺構と遺物 .....	27
第4節 総 括 .....	27
第4章 干田遺跡本発掘調査 .....	31
第1節 調査に至る経緯 .....	31
第2節 調査の概要 .....	31
第3節 遺構と遺物 .....	32
第4節 総 括 .....	32
第5章 その他の遺跡調査 .....	36
第1節 平成20年度試掘調査概要 .....	38
鳥取遺跡(1)・赤井西遺跡(2)・鶯塚村中遺跡(3)・愛宕遺跡(4・7・12) 本江畠田I遺跡(5・8・9・13)・本江畠田遺跡(6)・小杉焼高畠窯跡(10) 黒河尺目遺跡(11)・円池遺跡(14)・針原西遺跡(15)・小林遺跡(16)・古宮遺跡(17)	
第2節 五歩一古墳群現況測量調査 .....	55
第1項 調査に至る経緯 .....	55
第2項 調査の方法 .....	55
第3項 調査の結果 .....	56
第3節 日宮城址現況測量調査 .....	58
第1項 調査に至る経緯 .....	58
第2項 調査の方法 .....	58
第3項 調査の結果 .....	59
第4項 神保氏と日宮城 .....	59

# 卷首図版目次

卷首図版1 高島A遺跡遠景 1地区 2号溝出土 烏形木製品（弥生時代）

卷首図版2 高島A遺跡1地区 2号溝出土遺物（弥生時代）

# 挿図目次

第1図 射水市の位置	1
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第3図 発掘区位置図〔高島A遺跡〕	3
第4図 遺構実測図〔高島A遺跡1地区〕	5
第5図 遺物実測図〔高島A遺跡1地区〕 S D02	6
第6図 遺物実測図〔高島A遺跡1地区〕 S D02	7
第7図 遺物実測図〔高島A遺跡1地区〕 S D02	8
第8図 遺物実測図〔高島A遺跡1地区〕 S D02	9
第9図 遺物実測図〔高島A遺跡1地区〕 S D02	10
第10図 遺物実測図〔高島A遺跡1地区〕 S D02	11
第11図 遺物実測図〔高島A遺跡1地区〕 S D02	12
第12図 遺物実測図〔高島A遺跡1地区〕 S D02	13
第13図 遺物実測図〔高島A遺跡1地区〕 S D02	14
第14図 遺物実測図〔高島A遺跡1地区〕 S D02	15
第15図 遺物実測図〔高島A遺跡1地区〕 S D02 S K01 S K03 S K04	16
第16図 弥生の自然路・中世の区画溝位置図〔高島A遺跡〕	18
第17図 遺構実測図〔高島A遺跡2地区〕	19
第18図 遺物実測図〔高島A遺跡2地区〕 S D01 S D02 S R04 S K05	20
第19図 遺物実測図〔高島A遺跡2地区〕 S D01 S D02	21
第20図 発掘区位置図〔松木遺跡〕	26
第21図 掘立柱建物復元図〔松木遺跡〕	27
第22図 遺構実測図〔松木遺跡〕	28
第23図 遺物実測図〔松木遺跡〕 S D01 S D02 SD14 SK03 包含層	29
第24図 発掘区位置図〔干田遺跡〕	31
第25図 遺構実測図〔干田遺跡〕	33
第26図 遺物実測図〔干田遺跡〕 S D01 S D02 SK03 試掘調査	34
第27図 試掘調査等位置図	37
第28図 遺物実測図〔鳥取遺跡・慈塚村中遺跡・愛宕遺跡・本江宮田遺跡・針原西遺跡〕	48
第29図 遺物実測図〔小杉焼高窯窓跡〕	49
第30図 遺物実測図〔小杉焼高窯窓跡〕	50
第31図 遺物実測図〔小杉焼斧輪窓跡〕	51
第32図 五歩一古墳群及び周辺古墳分布図	55
第33図 現況測量図〔五歩一古墳群〕	57
第34図 「日宮新村見取絵図」及び周辺凹地形図	58
第35図 口宮城跡縄張図	63
第36図 現況測量図〔日宮城址〕	64

## 表 目 次

第1表 出土遺物観察表〔高島A遺跡〕( 1~ 54)	22
第2表 出土遺物観察表〔高島A遺跡〕( 55~108)	23
第3表 出土遺物観察表〔高島A遺跡〕(109~155)	24
第4表 出土遺物観察表〔高島A遺跡〕(156~171)	25
第5表 出土遺物観察表〔松木遺跡〕	30
第6表 出土遺物観察表〔千田遺跡〕	35
第7表 平成20年度埋蔵文化財発掘調査一覧表	36
第8表 出土遺物観察表〔試掘調査〕( 1~ 54)	52
第9表 出土遺物観察表〔試掘調査〕( 55~108)	53
第10表 出土遺物観察表 (109~133)	54

## 図版目次

図版1 遺構全景・溝・土坑・遺物出土状況〔高島A遺跡1地区〕	S D02 S K01 S K03
図版2 出土遺物 土器	〔高島A遺跡1地区〕 S D02
図版3 出土遺物 土器	〔高島A遺跡1地区〕 S D02
図版4 出土遺物 土器	〔高島A遺跡1地区〕 S D02
図版5 出土遺物 土器	〔高島A遺跡1地区〕 S D02
図版6 出土遺物 土器	〔高島A遺跡1地区〕 S D02
図版7 遺構全景・溝・土坑・遺物出土状況〔高島A遺跡2地区〕	S D01 S D02 S K05 S R04
図版8 出土遺物 土器・石製品	〔高島A遺跡2地区〕 S D01 S D02 S K05 S R04
図版9 遺構全景	〔松木遺跡〕
図版10 溝・土坑・遺物出土状況	〔松木遺跡〕 S D01 S D02 S D14 S K03 S K04 S K07 S K08 S K16
図版11 出土遺物 土器	〔松木遺跡〕 S D01 S D02 S D14 S K03 包含層
図版12 遺構全景・溝・土坑・遺物出土状況	〔千田遺跡〕 S D01 S D02 S K03 S K17
図版13 出土遺物 土器	〔千田遺跡〕 S D01 S D02 S K03 試掘調査
図版14 試掘／出土遺物 土器・陶磁器	〔鳥取遺跡〕
図版15 試掘／出土遺物 土器	〔鷺塚村中遺跡〕
図版16 試掘／出土遺物 土器・石製品・銅錢	〔小杉焼高畠窯跡〕
図版17 出土遺物 施釉陶器・窯道具	〔小杉焼高畠窯跡〕
図版18 試掘／出土遺物 土器・石製品・銅錢	〔針原西遺跡〕
図版19 五歩一古墳群遠景・1~4号墳	〔五歩一古墳群〕
図版20 口宮城址遠景・近景	〔口宮城址〕

# 第1章 遺跡の位置と歴史的環境

射水市は富山県のほぼ中央に位置し、市域は東西約11km、南北約15kmで総面積109.18㎢である。北部に富山湾、中央に射水平野、南部に射水丘陵を配し、標高0~140mを測る。富山市・高岡市と隣接し、交通の便に恵まれていることから、住宅団地造成が頻繁に行われ、ベットタウン化が進んでいる。現在の人口は約9万5千人余りである。

射水平野は、東の神通川と西の庄川に挟まれた東西約11km、南北約7kmの範囲の低湿地帯である。およそ1万~8千年前に形成された複合扇状地性三角洲沖積平野で、河川

によって運ばれた土砂や粘土・礫が堆積している。この沖積層が堆積した時代は海岸線が沖へ後退して平野部は現在より広かったとみられ、その後は繩文海進とよばれる気候変化と海面上昇により、海岸線が陸へ進行して平野部が狭まり、現地形で標高約5m以下は海面下に没することになる。やがて気候の寒冷化による海面後退、河川の土砂が堆積することでかつての海は小さく放生津潟（現：富山新港）としてのみ形を残し、周辺に湿原が現れる。この湿原は放生津潟の水面と標高差が殆どないため、河川の流れが濁み沼沢地を形成、湿原の植物が枯れて泥炭が堆積し、平野部が開けていくことになる。また、射水丘陵は新生代第三紀の青井谷泥岩層を基盤とし、上層に礫と砂泥からなる日ノ宮互層と太閤山火碎岩層が堆積している。鍛冶川・下条川・和田川やその支流によって河岸段丘や樹枝状の谷間が形成されている。このような自然環境で、先人達は集落を形成していたと考えられる。現在、市内には461箇所の遺跡が密集し、平野部に集落遺跡、丘陵部に生産遺跡の立地が多く確認されている。

丘陵部では国指定史跡の小杉丸山遺跡、小杉流通業務団地内遺跡、上野南遺跡、赤坂A~D遺跡などの生産遺跡が集中している。これらの遺跡は須恵器窯跡約39遺跡、製鉄遺跡約147遺跡を数えており県内最大規模を有する。須恵器生産窯跡や鉄生産製鉄炉と炭窯、工人の住居や作業場が見つかり、窯や炉を築くのに適した地形、粘土や薪・水の供給源が豊富にあることが好条件であったと考えられている。平野部では河川に近い地域に高島A遺跡、北高木遺跡、二口油免遺跡、小杉伊勢領遺跡などの集落遺跡が分布し、堅穴住居や掘立柱建物、溝や井戸などが確認されている。生産地である丘陵部と消費地である平野部を河川が結んで、交通路として機能していたために集落が営られてきたと考えられている。

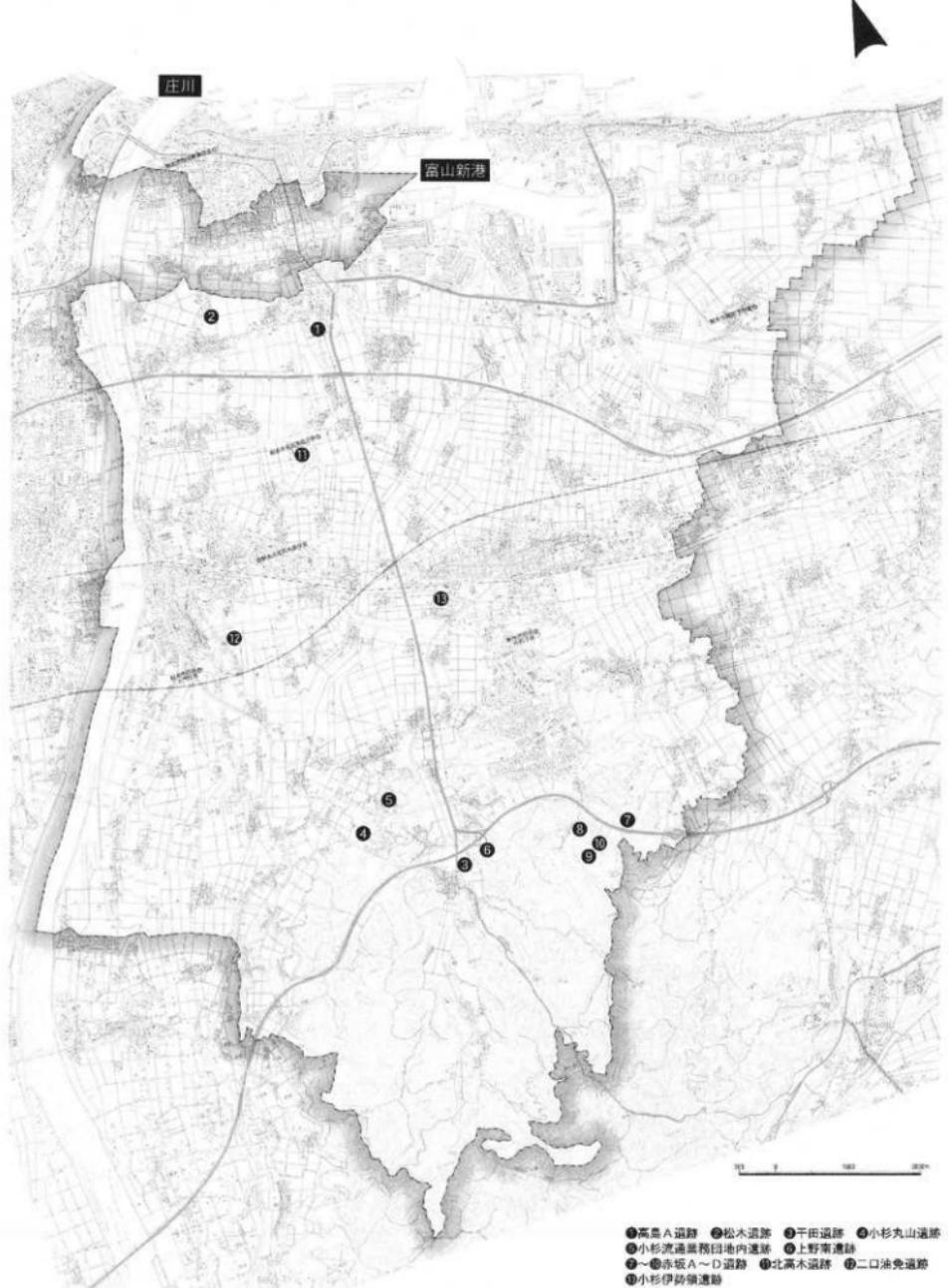
高島A遺跡は、庄川右岸に形成された標高約1.5m前後の沖積低地に立地し、弥生・古墳時代を主体とする遺跡である。平成9年度本発掘調査では弥生時代中期の周溝をもつ平地式建物2棟と方形周溝墓1基が確認されている。また平成14年度試掘調査では、遺跡北半分の遺構分布範囲を確定している。平成17年度には、土地区画整理事業に伴う本発掘調査が行われ、弥生時代後期~古墳時代前期、鎌倉時代~室町時代の遺構・遺物が確認され、全国初となる装飾性に富んだ石製品も出土している。

松木遺跡は、標高約1.5m前後の微高地に立地する弥生時代中期~後期の集落跡である。平成8・12年度、過去2回の調査が実施されている。今回の調査では弥生時代中期の建物跡を初めて確認しており、住居形態を検討するうえで大きな成果を得ている。

干田遺跡は、射水平野を流れる下条川の沖積台地縁辺部に立地し、標高約11mを測る。丘陵から開けた幅約60mの谷間にあり、平野部から約100m川上に向かって狭い平坦地に展開している。繩文時代~中世まで各時代の遺物が散発的に出土するが、主体は弥生時代後期と鎌倉・室町時代の2時期と考えられる。



第1図 射水市の位置

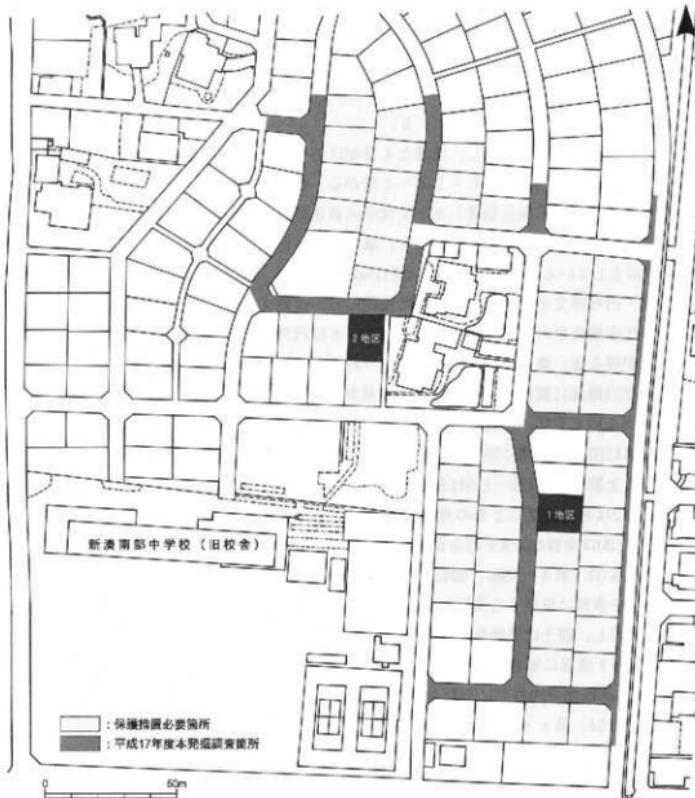


第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

## 第2章 高島A遺跡本発掘調査

### 第1節 調査に至る経緯

平成13年度、新潟市（現射水市）鏡宮地区における土地区画整理事業計画の照会を受けた。平成14年度、事業計画地が埋蔵文化財包蔵地（高島A遺跡）に含まれることから、遺跡保護と工事計画の調整を図る目的で試掘調査を実施した。その結果、計画地南側半分の約25,000m<sup>2</sup>を中心に弥生時代中期から古墳時代前期の遺構・遺物を確認した。このため、遺構に影響が及ぶ工事等を実施する場合は、本発掘調査による記録保存が必要との判断を示した。平成17年度、造成工事に先立ち計画道路部分の3,212m<sup>2</sup>において本発掘調査を実施した。平成19年度、分譲が開始され、宅地49区画で遺跡の保護措置が必要となり、工事が地下遺構に与える影響を判断しながらの対応となった。平成19年度1区画、平成20年度も1区画で本発掘調査を実施し、残り47区画は平成21年度以降の対応となった。



第3図 発掘区位置図【高島A遺跡】

## 第2節 調査の概要

調査区は造成工事により山砂の盛上がなされていたため、まず重機で盛土と旧水田耕作土を除去し、その後に作業員を投入して包含層掘削、遺構検出、遺構掘削、遺物取り上げを順次人力で行った。作業の進捗状況に応じて写真撮影（35mm・6×7中判・デジタル）や遺構概略図（1/100）、遺構断面図、遺構平面図（1/20）作成等の記録図化作業を実施した。調査終了後は、埋め戻しを行い現状復帰を図っている。その際に住宅基礎工事の改良掘削深度より深い遺構が検出された地区では、不動沈下防止のため新たに山砂を充填し重機で踏み固めている。

調査区の基本層序は1～3層に分層される。上から1層は山砂の造成盛土、2層は山砂の下の旧水田耕作土、3層は灰黄色（25Y7/2）粘質シルトの地山である。遺構は全て3層から掘り込まれている。

## 第3節 遺構と遺物

### 第1項 本発掘調査1地区

#### 1号土坑（SK01、第4・15図、図版1）

調査区の北東隅に位置する不整形な土坑である。覆土は黒褐色粘質シルトが堆積し、最深で37cmを測る。遺物は弥生土器が出土している。第15図127は口径12.4cmを測る有段口縁の壺である。内外面に煤が付着している。時期は弥生時代後期のもの。128は口縁部に擬凹線を施す壺である。

#### 2号溝（SD02、第4～16図、図版1～6）

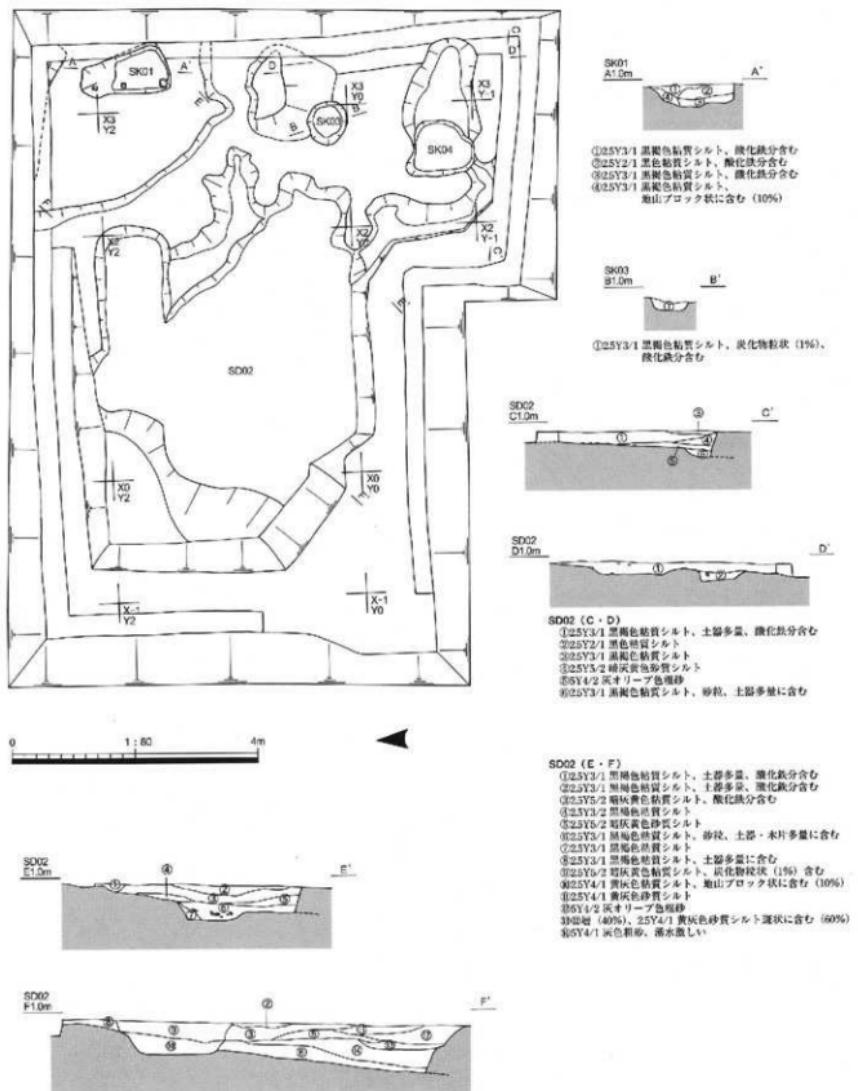
調査区を北西～南東方向に縱断し、両端とも発掘区外へのびる自然流路である。北東側で東岸が確認され、北端は平成17年度調査のE-2区へと繋がる。西岸はE-3区で確認されており、その川幅は約16mを測る。覆土は黒褐色粘質シルト又は暗灰黄色粘質シルトが堆積し、弥生土器や木片が大量に包含されている。深さは最深で78cmを測り、溝底からは湧水が確認できる。遺物は弥生土器・木製品・石製品が出土している。第5図1～第14図115は弥生上器。3は口縁下端部に櫛状具で刻みを入れ、内面に羽状文・円形浮文を施し、5は外面に波状口縁・直線文・波状文、内面に羽状文を施す。時期は共に弥生時代中期後半のものである。第6図6～8は内外面に赤彩を施す長頸壺。第7図30は体部外面に籠目痕が残る壺。第8図37は頭部に2孔一对一の穿孔があり、外面全面に煤が付着している壺。第9図44～48は口縁部に擬凹線を施す弥生時代後期の壺である。第11図73は口径31.2cmを測り、内面に刺突文・赤彩を施す高壺。第12図90は底径21.8cmを測る器台であり、脚根部外面に沈線文・透孔4箇所を施す。第13図92は底部に穿孔を施す鉢。第14図105～108はミニチュア土器。109・110は土器片中央を穿孔する土製円盤。112～115は福島県白河市天王山遺跡を標式として設定された上器形式の天王山式土器。112は磨消繩文に2条の連弧文・交互刺突文を施し、口縁部に小突起をもつ。116～119は珠洲片口鉢。120は全長44.4cmを測る板作り型の鳥形木製品、樹種はスギである。

#### 3号土坑（SK03、第4・15図、図版1）

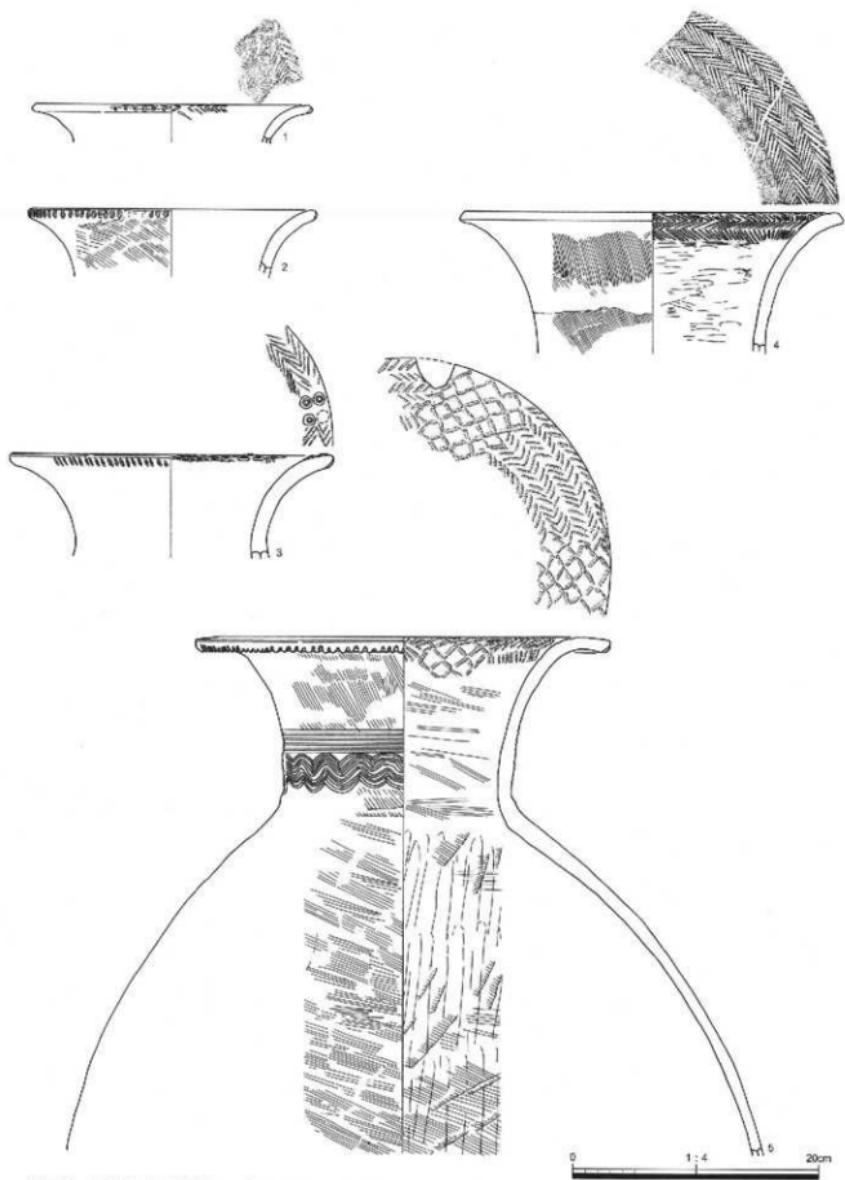
調査区中央やや東側に位置する楕円形土坑である。規模は長軸71cm、短軸62cm、深さは16cmを測る。断面は逆台形を呈し、覆土は黒褐色粘質シルトに炭化物が混在する。遺物は弥生土器が出土している。第15図133は口縁下端部に櫛状具で刻みを入れ、内面には羽状文を施す壺。時期は弥生時代中期後半のもの。134は口縁端部の内外面に赤彩が施された弥生時代後期の壺である。

#### 4号土坑（SK04、第4・15図、図版1）

調査区の南東側で2号溝中の溝肩から一段低い位置にある不整形土坑。弥生土器片が大量に出土しており、土器捨場と考えられる。第15図136は口縁端部外面に刻みを施す口径16.7cmの弥生土器壺である。時期は弥生時代中期後半のもの。



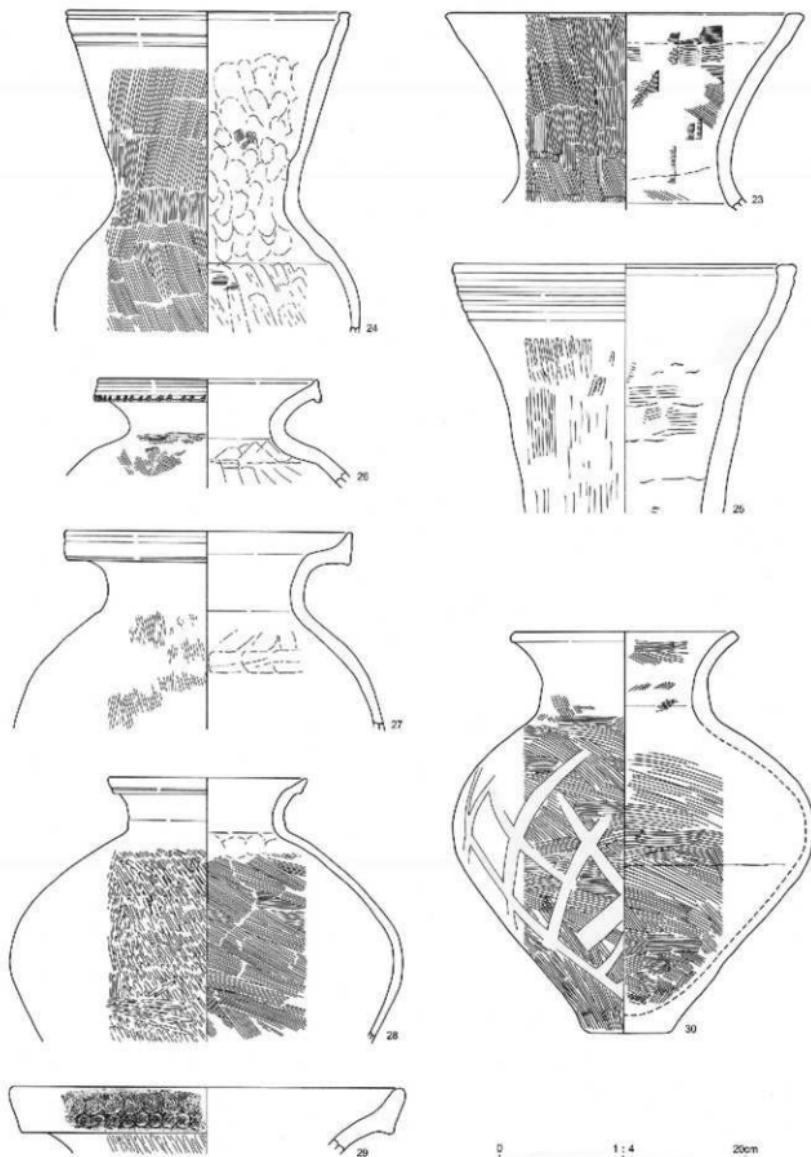
第4図 遺構実測図 [高島A遺跡1地区] (1/80)



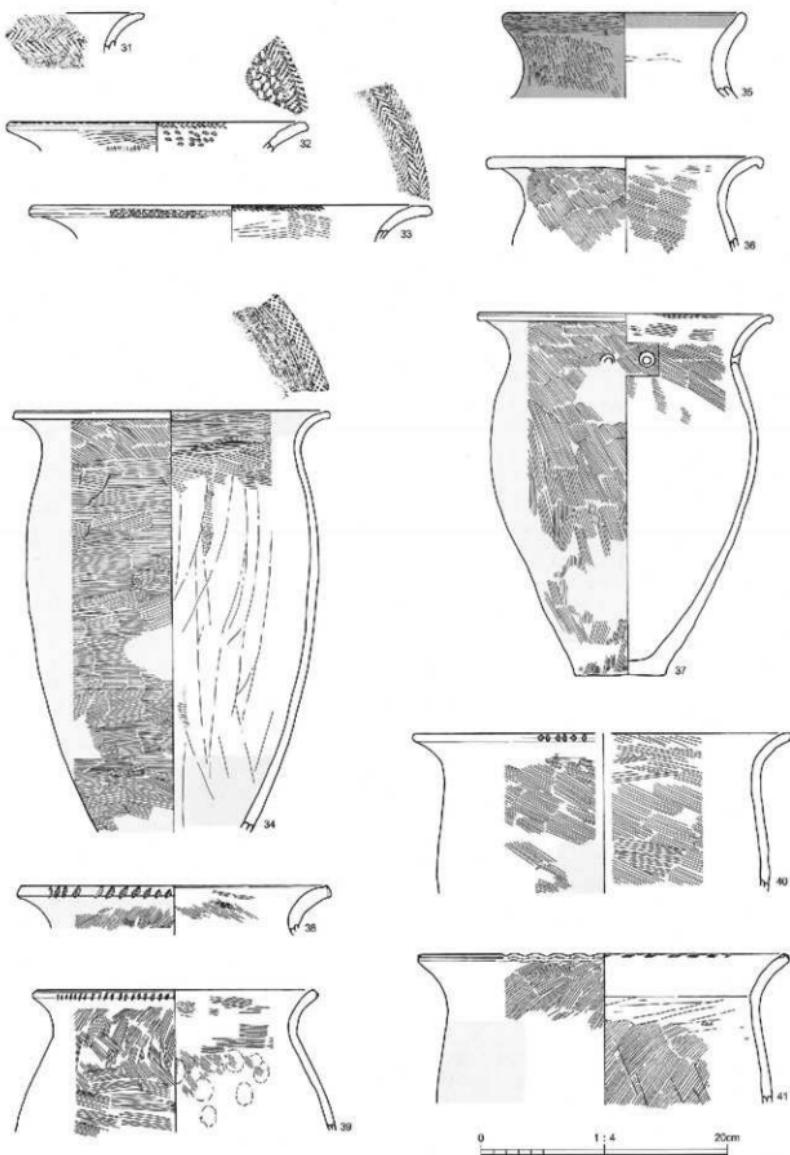
第5図 遺物実測図【高島A遺跡1地区】(1/4)  
SD02 (1-5)



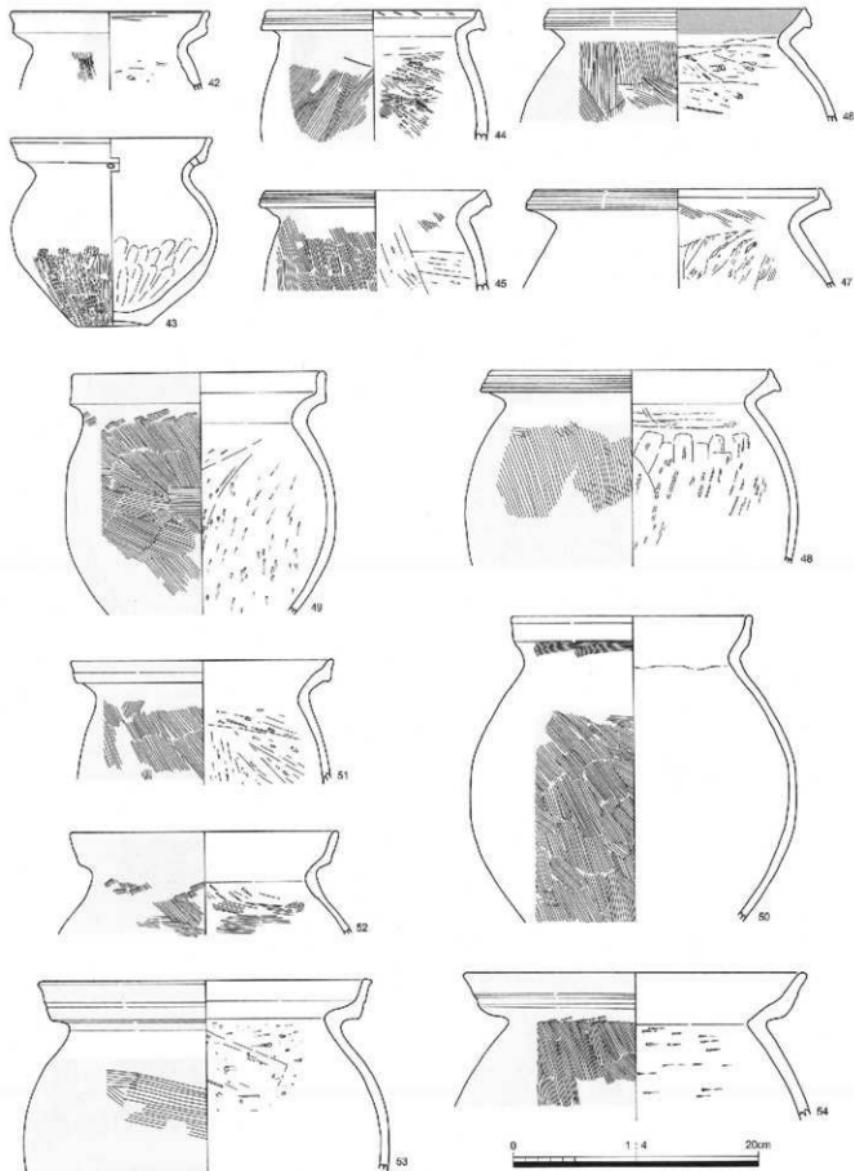
第6図 遺物実測図 [高島A遺跡1地区] (1/4)  
SD02 (6~22)



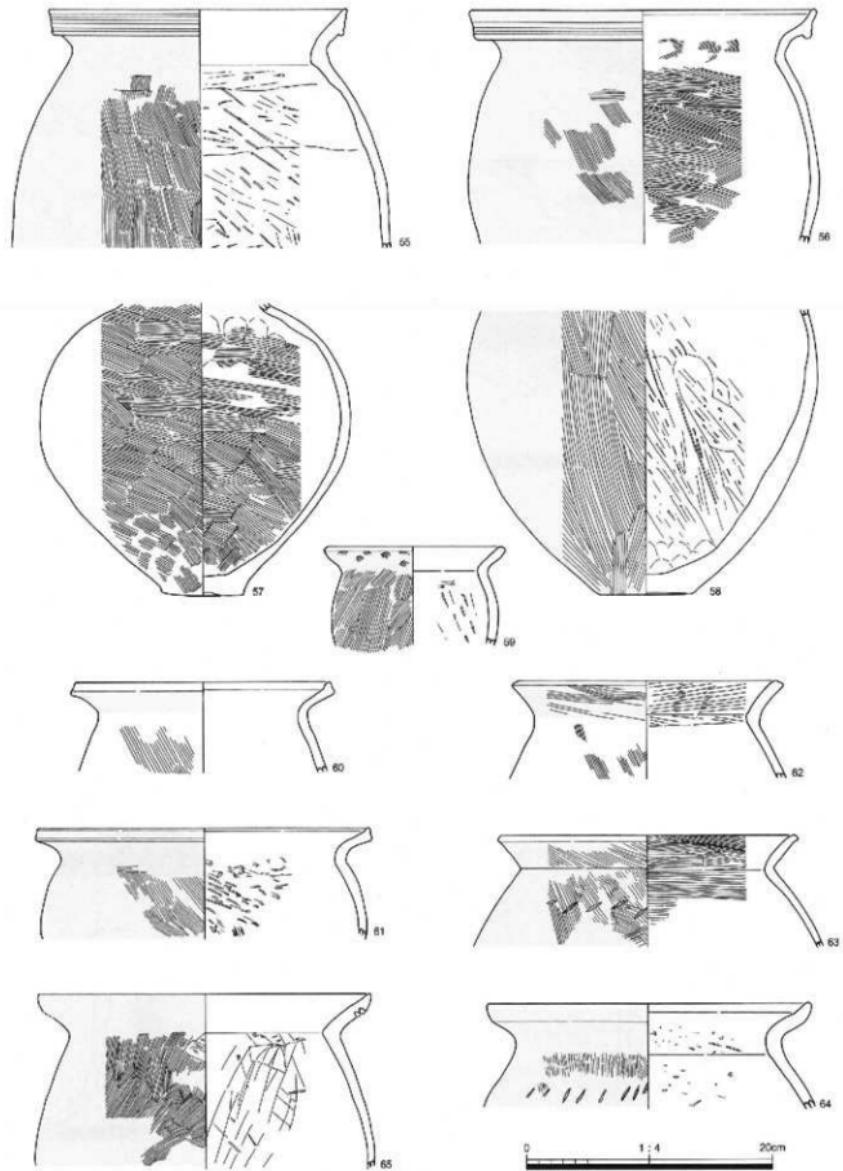
第7図 遺物実測図 [高島A遺跡1地区] (1/4)  
SD02 (23~30)



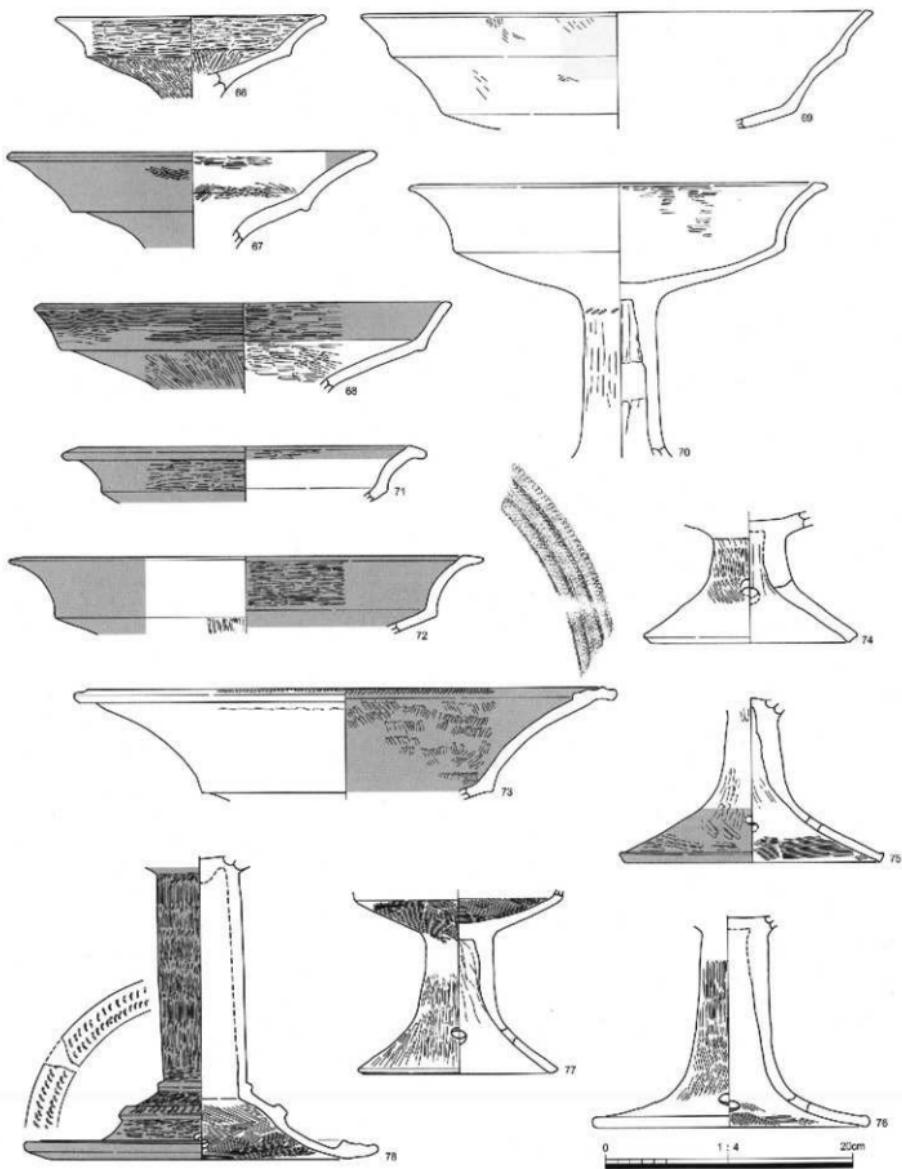
第8図 遺物実測図【高島A遺跡1地区】(1/4)  
SD02 (31~41)



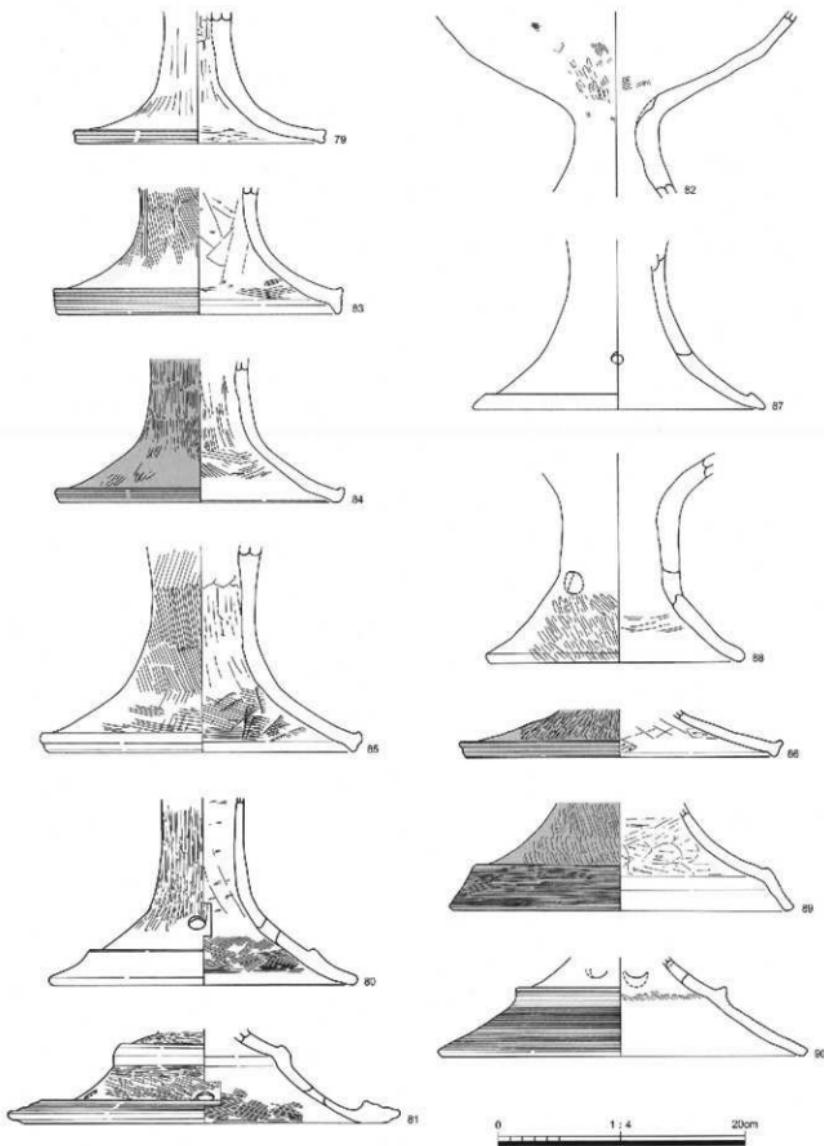
第9図 遺物実測図 [高島A遺跡1地区] (1/4)  
SD02 (42~54)



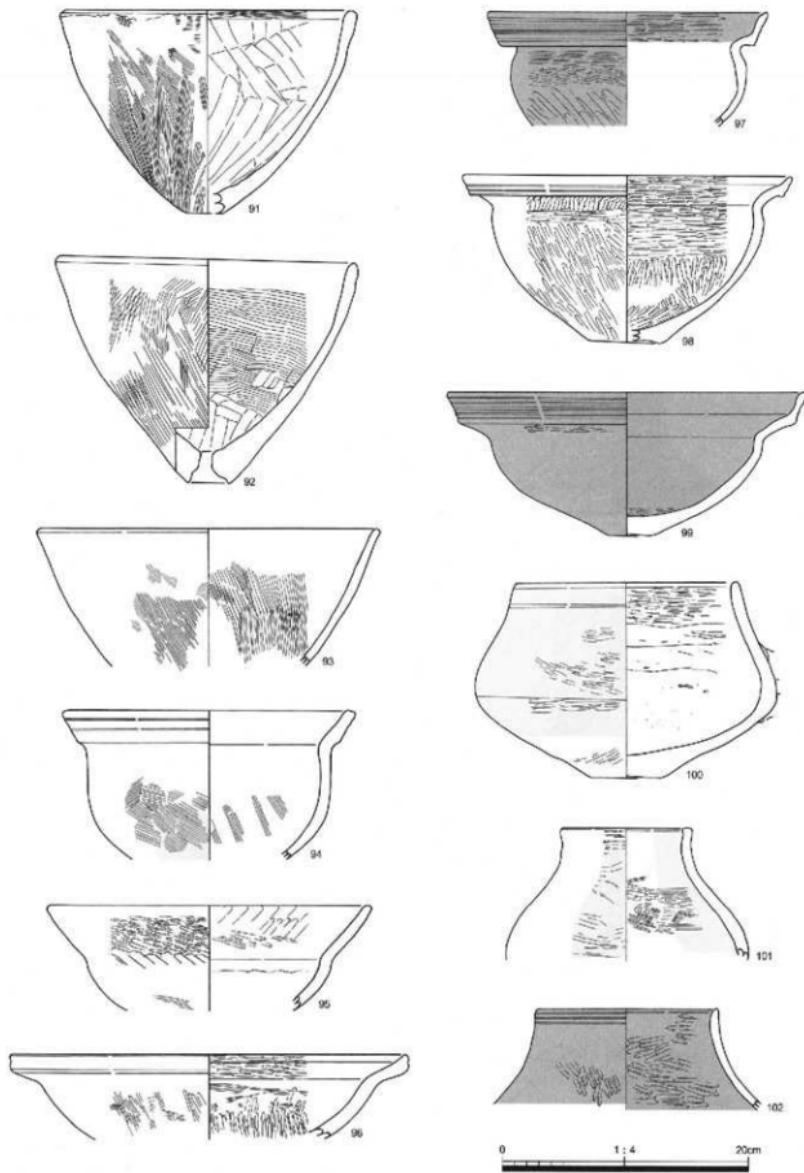
第10図 遺物実測図 [高島A遺跡1地区] (1/4)  
SD02 (55~65)



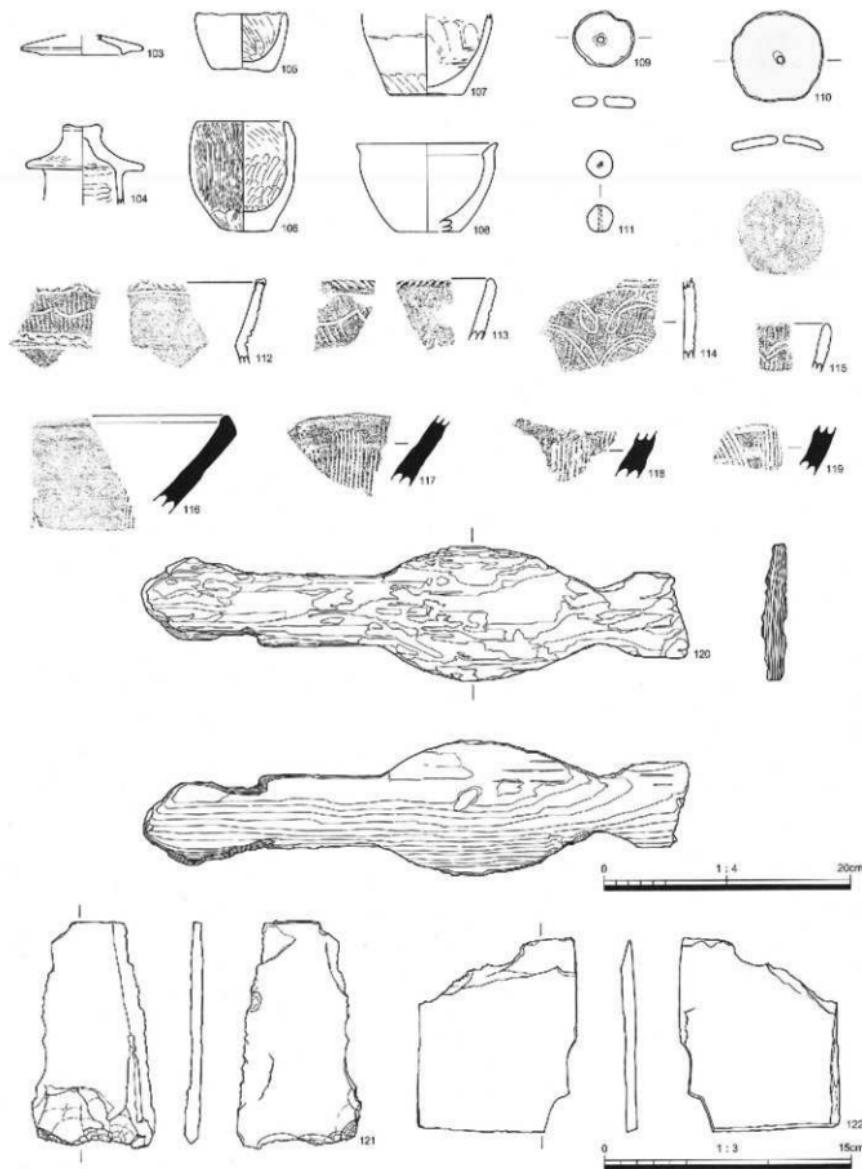
第11図 遺物実測図 [高島A遺跡1地区] (1/4)  
SD02 (66-78)



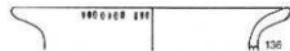
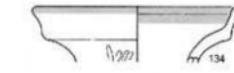
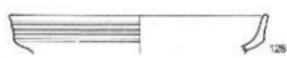
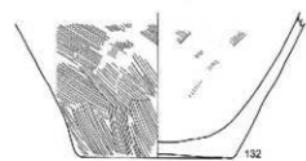
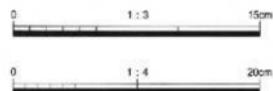
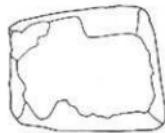
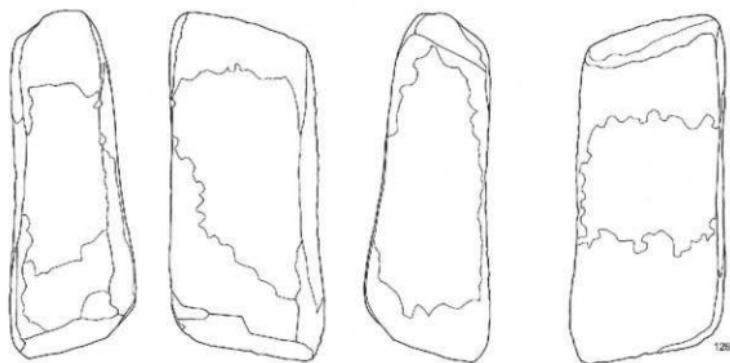
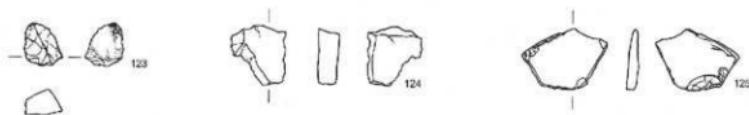
第12図 遺物実測図 [高島A遺跡1地区] (1/4)  
SD02 (79~90)



第13図 遺物実測図 [高島A遺跡1地区] (1/4)  
SD02 (91-102)



第14図 遺物実測図 [高島A遺跡1地区] (1/4, 121・122:1/3)  
SD02 (103~122)



第15図 遺物実測図 [高島A遺跡1地区] (1/3, 126:1/4)  
SD02 (123~126) SK01 (127~132) SK03 (133~135) SK04 (136)

## 第2項 本発掘調査2地区

### 1号溝（S D01、第17～19図、図版7・8）

調査区の東端に位置する南北方向の溝である。全長7.1mを検出し、両端とも発掘区外へのびる。北側は平成17年度調査のD-2区へと繋がる溝の続きと考える。西岸の溝肩しか確認できなかったが最大幅2.7mを測る。断面は逆台形を呈し、覆土は上層に黄灰色粘質シルト、下層に黒褐色粘質シルトが堆積する。深さは最深で75cmを測り、溝底からは湧水が確認できる。遺物は弥生土器・珠洲・青磁・砥石が出土している。第19図159～163は珠洲片口鉢。159は2.5cm幅の原体に鉗目12条を施す、13世紀後半～14世紀前半のものである。164は口径15.3cmを測り、体部外面に二重の箇蓮弁文を施す青磁碗である。時期は13世紀代、南宋龍泉窯のもの。

### 2号溝（S D02、第17～19図、図版7・8）

1号溝の西側に並行する南北方向の溝である。全長7.0m、幅1.4m前後、深さは最深で25cmを測る。北端は調査区北壁手前で二股に分かれ徐々に浅くなり消滅するが、南端は調査区外へのびる。1号溝と同時期の遺構と考えられる。覆土は黒褐色粘質シルトに炭化物が混在する。遺物は弥生土器・珠洲が出土している。第18図145は口径21.3cmを測り、口縁部に擬円線を施す弥生土器壺である。時期は弥生時代後期のもの。第19図171は珠洲片口鉢の注口部分である。

### 4号谷（S R04、第17・18図、図版7・8）

調査区の北西から南西へ向かって流れる自然流路の落ち込みである。北側は平成17年度調査のD-2区、南側はE-2・3区をへて1地区の2号溝へと繋がる流れと考えられる。もとは調査区東端部まで流れていたと考えられるが、古墳時代前期頃に埋没し、約1,000年後に1号溝が掘り込まれている。覆土は黒色粘質シルトに炭化物が混在する。遺物は北側を中心に完形品を含む弥生土器がまとまって出土している。第18図149は口径21.6cmを測る弥生土器鉢であり、底部に穿孔を施している。時期は弥生時代後期のものである。154は台付鉢の完形品である。

### 5号土坑（S K05、第17・18図、図版7）

調査区の北西部に位置する円形土坑である。規模は直径54cm、深さは43cmを測る。断面は逆台形を呈し、覆土は黒褐色粘質シルトと黄灰色粘質シルトが交互に堆積する。遺物は土師器が出土している。第18図155は口縁部が「く」の字状の土師器壺である。時期は古墳時代前期のもの。

### 1号掘立柱建物（S B01、第17図、図版7）

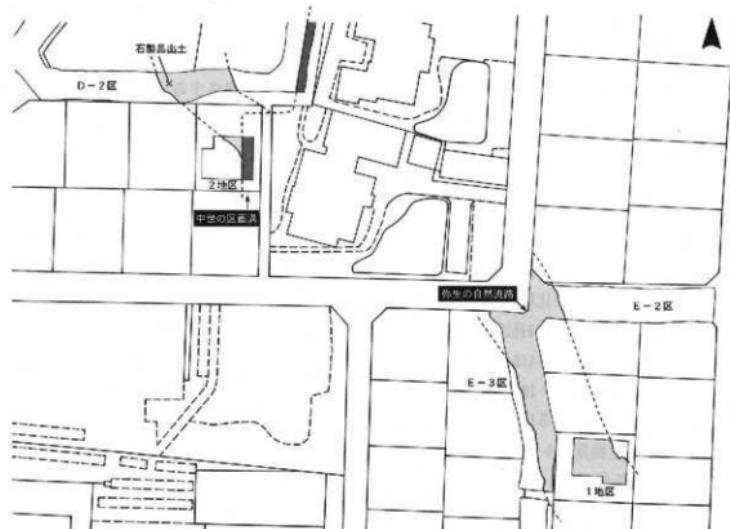
調査区の南西部に位置する縦柱建物跡。調査区内では2間×2間分を確認しているが、さらに南・西側へ広がる可能性がある。柱穴は直径20～32cmの円形・楕円形を呈し、深さ16～26cmを測る。覆土は黒褐色粘質シルトが堆積する。1・2号溝に沿うように建てられ、また中央の6号土坑から珠洲が出土していることから、1・2号溝と同時期（13世紀後半～14世紀前半）の建物と考えられる。

## 第4節 総 括

高島A遺跡は、平成14年度から土地区画整理事業に伴う発掘調査が継続的に実施されており、過去の調査によって新渋南部中学校（旧校舎）の北側から東側一帯にかけて弥生～古墳時代、鎌倉～室町時代の2時期の集落跡が確認されている。今回の調査では、平成17年度の計画道路調査の際に検出された遺構へ繋がるものを見出している。まずは1地区2号溝から2地区4号谷へと繋がる弥生時代の自然流路である。北西～南東方向に流れ、幅約16m、途中家屋で途切れるものの全長約120mを確認することができる。遺物は弥生時代後期の上器が殆どであり、中期後半の上器も少量混在する。これは約260m南側の新校舎造成地での発掘調査で、弥生時代中期の集落跡が確認されていることに起

因していると考えられる。平成17年度D-2区の自然流路西岸部からは、蛇紋岩を削り貫いて彫刻を施した全国的にも類例のない石製品も出土している。次は、平成17年度D-2区東端部の南北方向へのびる1号溝である。この溝は、規模や存続時期が2地区の1号溝と一致しており、途中で東側・北側へクランクして続く一連の遺構と考えられる。覆土からは珠洲や中国産青磁が出土しており、溝によって区画された在地領主等の屋敷地の存在が想定できる。

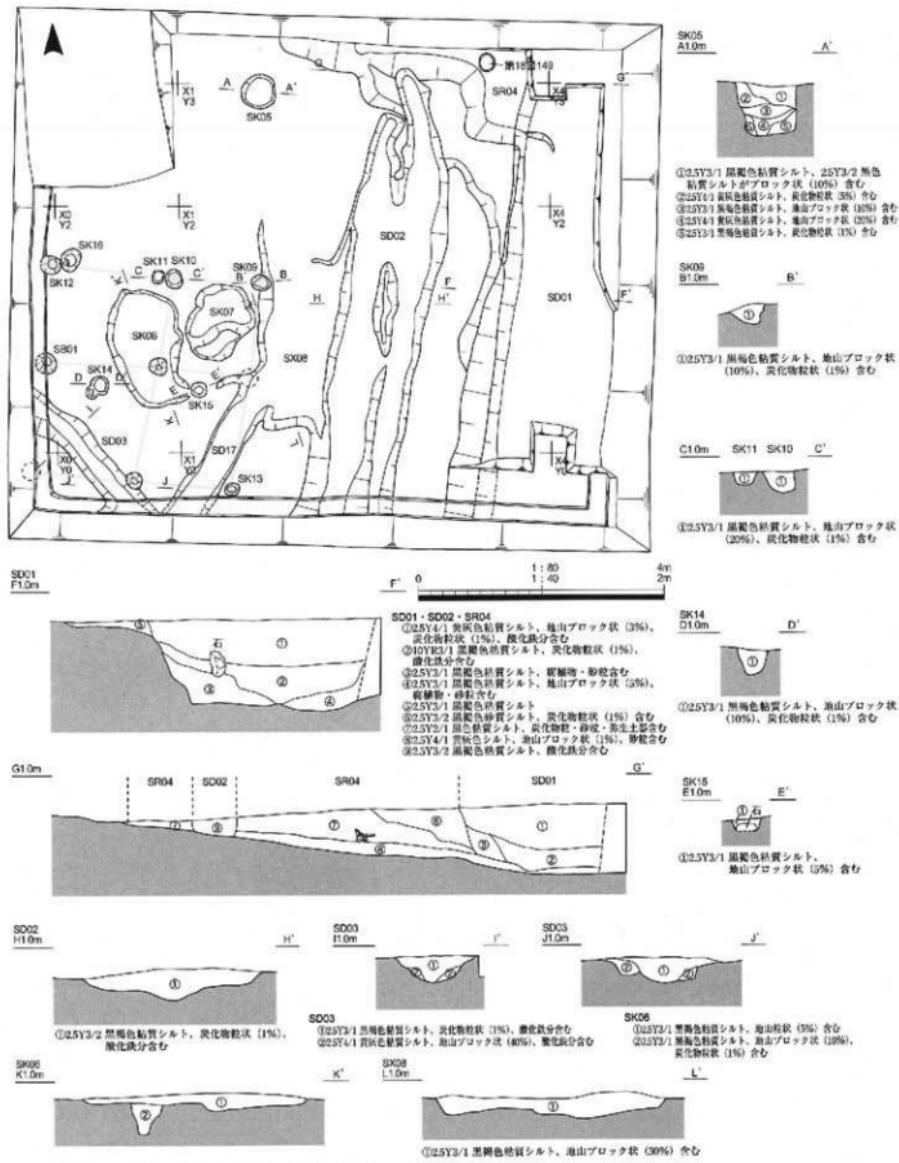
今回の調査区周辺では、弥生時代後期～古墳時代前期にかけて集落が営まれ、古墳時代前期に一旦集落が移転又は廃絶する。その後、鎌倉時代に入り再び集落が形成されると考えられる。これら2時期の集落跡が、今後の発掘調査の増加により少しづつ明らかになることを期待したい。



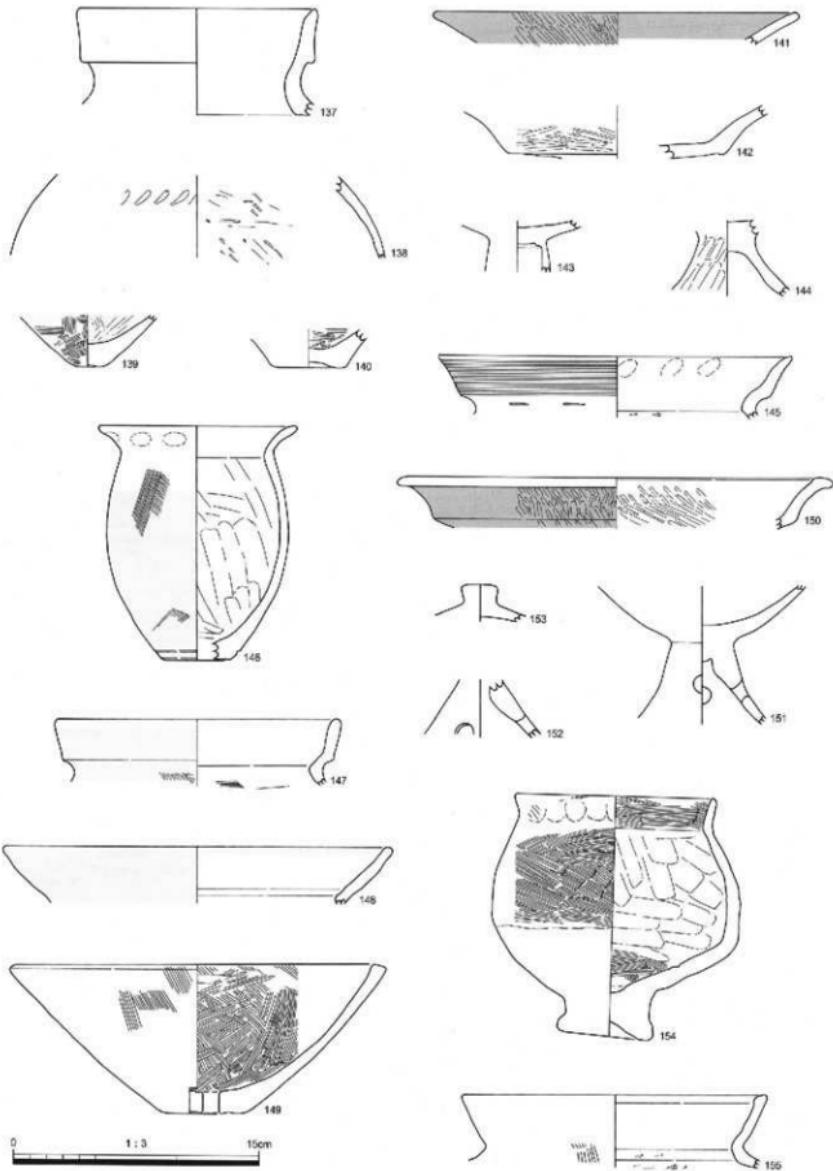
第16図 弥生の自然流路・中世の区画溝位置図【高島A遺跡】

#### 参考文献

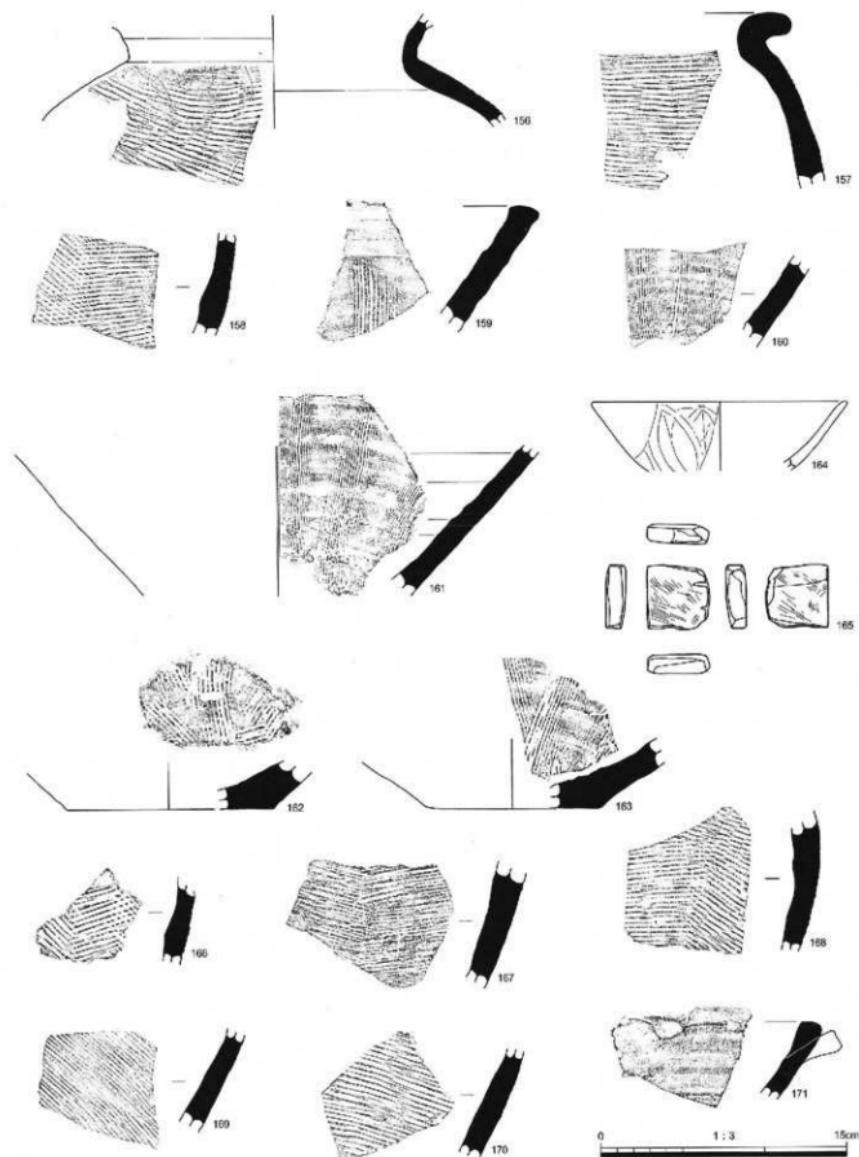
- 荒井 隆他 2001年「石塚遺跡・東木津遺跡調査報告」高岡市教育委員会
- 金三津英則他 2006年「高島A遺跡発掘調査報告書-鏡宮高島A地区面修理事業に伴う発掘調査-」射水市教育委員会
- 金三津英則他 2006年「作道遺跡発掘調査報告-市道松木作道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査-」射水市教育委員会
- 金三津英則他 2007年「高島A遺跡発掘調査報告-射水市立斯波南部中学校用地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査-」射水市教育委員会
- 宗 融子 2000年「高島A遺跡発掘調査概要-民間ドライブイン造成に伴う発掘調査-」新湊市教育委員会
- 根津明義他 2005年「中曾根西遺跡調査報告-県道船野佐町維改良工事にともなう発掘調査-」高岡市教育委員会
- 宮田進一他 2006年「下老子篠川遺跡調査報告-能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告V-」
- 財团法人富山県文化振興財團 埋蔵文化財調査事務所  
吉岡廉暢他 1989年「珠洲の名陶」珠洲焼資料館



第17図 造構実測図【高島A遺跡2地区】 (1/80, 断面図 1/40)



第18図 遺物実測図【高島A遺跡2地区】(1/3)  
SD01 (137~144) SD02 (145) SR04 (146~154) SK05 (155)



第19図 遺物実測図 [高島 A 遺跡 2 地区] (1/3)  
SD01 (156~165) SD02 (166~171)

第1表 出土遺物観察表（高島A遺跡）

回	版	No.	遺構・出土地区	種類	器種	口径(cm)	鉢高(cm)	底深(cm)	備考	残存量
第5回	1	S D02	1地区	弥生土器	壺	16.6			羽状文 口縁端部刻み	
	2	S D02	1地区	弥生土器	壺	17.0			口縁端部刻み	□1/4
	3	S D02	1地区	弥生土器	壺	19.0			羽状文 円形浮文 口縁端部刻み	□1/5
	4	S D02	1地区	弥生土器	壺	22.6			羽状文	□1/4
	5	S D02	1地区	弥生土器	壺	25.1			波状口縁 直線文 波状文	□1/2
第6回	6	S D02	1地区	弥生土器	壺	8.8			内外面赤彩	□3/8
	7	S D02	1地区	弥生土器	壺	7.9			内外面赤彩	□1/2
	8	S D02	1地区	弥生土器	壺	6.8			内外面赤彩	□1/3 体1/2
	9	S D02	1地区	弥生土器	壺				波状文 直線文	
	10	S D02	1地区	弥生土器	壺	9.4				□3/8
	11	S D02	1地区	弥生土器	壺				突帯上刻み	
	12	S D02	1地区	弥生土器	壺	12.3				□3/8
	13	S D02	1地区	弥生土器	壺	12.5				□3/4
	14	S D02	1地区	弥生土器	壺	12.5				□2/3
	15	S D02	1地区	弥生土器	壺	10.6			外面縫付着	□1/2
	16	S D02	1地区	弥生土器	壺	16.8				□1/6
	17	S D02	1地区	弥生土器	壺	17.0				□1/2
	18	S D02	1地区	弥生土器	壺	11.2			口縁端部刻み	□1/4
	19	S D02	1地区	弥生土器	壺	14.0			擬凹線文	□1/4
	20	S D02	1地区	弥生土器	壺	17.0			擬凹線文	□2/5
	21	S D02	1地区	弥生土器	壺	14.7			円形刺突文	
	22	S D02	1地区	弥生土器	壺	14.4				□1/3
第7回	23	S D02	1地区	弥生土器	壺	20.7				□1/2
	24	S D02	1地区	弥生土器	壺	16.8			擬凹線文	□3/5
	25	S D02	1地区	弥生土器	壺	20.2			擬凹線文 内面縫付着	□1/6
	26	S D02	1地区	弥生土器	壺	13.1			擬凹線文 口縁端部刻み	□3/8
	27	S D02	1地区	弥生土器	壺	17.3			外面縫付着	□完存 体4/5
	28	S D02	1地区	弥生土器	壺	11.9				□5/6
	29	S D02	1地区	弥生土器	壺	23.5			スタンプ文	□1/8
	30	S D02	1地区	弥生土器	壺	13.1	24.5	4.5	籠目痕	ほぼ完形
第8回	31	S D02	1地区	弥生土器	壺				羽状文	破片
	32	S D02	1地区	弥生土器	壺	17.8			羽状文 斜行短線文	□1/12
	33	S D02	1地区	弥生土器	壺	24.0			羽状文 口縁端部刻み	□1/10
	34	S D02	1地区	弥生土器	壺	18.6			直線文 内外面縫付着	□1/4 体1/4
	35	S D02	1地区	弥生土器	壺	14.2			内外面赤彩 外面縫付着	□1/3
	36	S D02	1地区	弥生土器	壺	16.0			外面縫付着	□1/4
	37	S D02	1地区	弥生土器	壺	17.6	22.1	5.5	2孔一对の穿孔 外面縫付着	□3/4 底完存
	38	S D02	1地区	弥生土器	壺	18.5			口縁端部刻み 外面縫付着	□1/4
	39	S D02	1地区	弥生土器	壺	16.7			口縁端部刻み 指頭圧痕	□2/5
	40	S D02	1地区	弥生土器	壺	22.6			口縁端部刻み 外面縫付着	
	41	S D02	1地区	弥生土器	壺	21.9			波状口縁 外面縫付着	□1/8
第9回	42	S D02	1地区	弥生土器	壺	11.8			外面縫付着	□1/5
	43	S D02	1地区	弥生土器	壺	12.0	11.4	4.1	透孔 1箇所	□2/5 底完存
	44	S D02	1地区	弥生土器	壺	12.8			擬凹線文 外面縫付着	□1/8
	45	S D02	1地区	弥生土器	壺	13.3			擬凹線文 外面縫付着	□1/4
	46	S D02	1地区	弥生土器	壺	15.4			擬凹線文 内面赤彩 外面縫付着	□1/2
	47	S D02	1地区	弥生土器	壺	17.2			擬凹線文	□1/6
	48	S D02	1地区	弥生土器	壺	16.7			擬凹線文 外面縫付着	□1/4
	49	S D02	1地区	弥生土器	壺	15.1			外面縫付着	□完存 体3/8
	50	S D02	1地区	弥生土器	壺	14.3			外面縫付着	□1/2 体1/4
	51	S D02	1地区	弥生土器	壺	15.6			外面縫付着	□1/4
	52	S D02	1地区	弥生土器	壺	16.0			外面縫付着	□1/4
	53	S D02	1地区	弥生土器	壺	19.2			外面縫付着	□1/4
	54	S D02	1地区	弥生土器	壺	20.3			外面縫付着	□7/8

口：口縁部 痕：底部 体：体部 壁：環部 脚：脚部

第2表 出土遺物観察表（高島A遺跡）

回版	No.	遺構・出土地区	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考	残存量
第10回	55	S D02 1地区	弥生土器	甕	17.8			擬凹線文 外面煤付着	口完存
	56	S D02 1地区	弥生土器	甕	20.6			擬凹線文 外面煤付着	口3/8
	57	S D02 1地区	弥生土器	甕			5.0		体1/2底完存
	58	S D02 1地区	弥生土器	甕			5.5	外面煤付着	体5/6底1/2
	59	S D02 1地区	弥生土器	甕	10.3			外面煤付着	口1/8
	60	S D02 1地区	弥生土器	甕	15.1			外面煤付着	口1/6
	61	S D02 1地区	弥生土器	甕	20.0			外面煤付着	口1/8
	62	S D02 1地区	弥生土器	甕	15.4			外面煤付着	口1/4
	63	S D02 1地区	弥生土器	甕	17.7			腹部外面刻み 外面煤付着	口1/2
	64	S D02 1地区	弥生土器	甕	19.4			腹部外面刻み 外面煤付着	口1/2
	65	S D02 1地区	弥生土器	甕	19.8			外面煤付着	口1/6
第11回	66	S D02 1地区	弥生土器	高环	15.9				口1/4环3/4
	67	S D02 1地区	弥生土器	高环	21.6			内外面赤彩	口5/8
	68	S D02 1地区	弥生土器	高环	24.5			内外面赤彩 外面煤付着	口3/4
	69	S D02 1地区	弥生土器	高环	30.0			外面煤付着	口1/4
	70	S D02 1地区	弥生土器	高环	23.6				口1/4脚基完存
	71	S D02 1地区	弥生土器	高环	20.0			内外面赤彩	口1/6
	72	S D02 1地区	弥生土器	高环	26.4			内外面赤彩	口1/2
	73	S D02 1地区	弥生土器	高环			31.2	内面赤彩 刺突文	口1/8
	74	S D02 1地区	弥生土器	高环			11.8	透孔 1箇所	脚1/8脚基完存
	75	S D02 1地区	弥生土器	高环			15.2	内外面赤彩 透孔 4箇所	脚6/8脚基完存
	76	S D02 1地区	弥生土器	高环			16.2	透孔 2箇所	脚1/2
	77	S D02 1地区	弥生土器	高环			11.3	透孔 1箇所	脚1/12脚基完存
	78	S D02 1地区	弥生土器	高环			18.1	内外面赤彩 爪形刺突文	脚3/4脚基完存
第12回	79	S D02 1地区	弥生土器	高环			14.7		脚1/2
	80	S D02 1地区	弥生土器	高环			18.0	透孔 2箇所	脚1/2脚基3/4
	81	S D02 1地区	弥生土器	高环			21.9	透孔 3箇所	脚3/4
	82	S D02 1地区	弥生土器	高环					
	83	S D02 1地区	弥生土器	器台			16.8	擬凹線文 内外面煤付着	脚1/8
	84	S D02 1地区	弥生土器	器台			17.0	擬凹線文 外面赤彩	脚1/4
	85	S D02 1地区	弥生土器	器台			18.4		脚2/3
	86	S D02 1地区	弥生土器	器台			18.5	擬凹線文 外面赤彩	脚1/8
	87	S D02 1地区	弥生土器	器台			17.2	透孔 1箇所	脚3/5
	88	S D02 1地区	弥生土器	器台			15.1	透孔 1箇所	脚3/4
	89	S D02 1地区	弥生土器	器台			20.0	擬凹線文 外面赤彩	脚5/8
	90	S D02 1地区	弥生土器	器台			21.8	擬凹線文 透孔 4箇所	脚1/2
第13回	91	S D02 1地区	弥生土器	鉢	17.0	12.4	2.0		口1/4体1/2
	92	S D02 1地区	弥生土器	鉢	17.8	13.7	2.6	底部穿孔	口・体1/2底完存
	93	S D02 1地区	弥生土器	鉢	20.2				口・体1/4
	94	S D02 1地区	弥生土器	鉢	16.9			外面煤付着	口1/3
	95	S D02 1地区	弥生土器	鉢	19.2				口1/8
	96	S D02 1地区	弥生土器	鉢	23.9				口1/8
	97	S D02 1地区	弥生土器	鉢	16.7			擬凹線文 内外面赤彩	口1/4
	98	S D02 1地区	弥生土器	鉢	19.6	10.2	4.3	擬凹線文	口・体3/4
	99	S D02 1地区	弥生土器	鉢	21.5	8.7	2.9	擬凹線文 内外面赤彩	口1/2
	100	S D02 1地区	弥生土器	鉢	13.2	11.8	4.2	外面煤付着 手把痕	口2/3底完存
	101	S D02 1地区	弥生土器	鉢	7.6			内外面煤付着	口1/8
	102	S D02 1地区	弥生土器	鉢	10.8			擬凹線文 内外面赤彩	口1/8
第14回	103	S D02 1地区	弥生土器	蓋	7.4				口1/4
	104	S D02 1地区	弥生土器	蓋	7.0			返し付蓋	口完存
	105	S D02 1地区	弥生土器	ミニチュア	5.3	3.4	3.5		完形
	106	S D02 1地区	弥生土器	ミニチュア	5.1	6.7	3.2	外面煤付着	完形
	107	S D02 1地区	弥生土器	ミニチュア			4.5		底完存
	108	S D02 1地区	弥生土器	ミニチュア	8.6	5.4	4.0		口1/12

口：口縁部 底：底部 体：体部 壁：環部 脚：脚部

第3表 出土遺物観察表(高島A遺跡)

図版	No.	遺構・出土地区	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考	残存率			
第14図	109	S D02 1地区	弥生土器	土製円盤	3.7	3.2	0.4	重量8g	完形			
	110	S D02 1地区	弥生土器	土製円盤	5.5	5.4	0.4	重量15g 内外面煤付着	完形			
	111	S D02 1地区	弥生土器	土鐘(土玉)	径1.6	0.1	重量3g 片側穿孔	天王山式 連弧文 交互刺突文 天王山式 連弧文 連刺突文 天王山式 山形文 天王山式 山形文	完形 破片 破片 破片 破片 破片 破片 破片 破片 破片 破片 破片 破片 破片 破片 破片			
	112	S D02 1地区	弥生土器	甕(蓋)								
	113	S D02 1地区	弥生土器	甕(蓋)								
	114	S D02 1地区	弥生土器	甕(蓋)								
	115	S D02 1地区	弥生土器	甕(蓋)								
	116	S D02 1地区	珠潤	片口鉢								
	117	S D02 1地区	珠潤	片口鉢								
	118	S D02 1地区	珠潤	片口鉢								
	119	S D02 1地区	珠潤	片口鉢								
	120	S D02 1地区	木製品	鳥形	44.4	10.9	2.0	板作り型	完形			
	121	S D02 1地区	石製品	石包丁?								
	122	S D02 1地区	石製品	石包丁?								
第15図	123	S D02 1地区	石製品	玉作開連	27.0	12.0	10.2	鉄石類 荒削工程 重量7g ひすい 荒削工程 重量22g 重量14g 重量5.5kg	口1/6			
	124	S D02 1地区	石製品	玉作開連								
	125	S D02 1地区	石製品	玉作開連								
	126	S D02 1地区	石製品	砥石								
	127	S K01 1地区	弥生土器	甕	12.4	4.7	内外面煤付着 擬凹線文 内面赤彩 外面煤付着 底1/4 脚継1/4 底完存	口1/6 口1/8 口1/6 底1/4 口1/5 口1/10 破片 口1/12				
	128	S K01 1地区	弥生土器	甕	15.4							
	129	S K01 1地区	弥生土器	甕	16.8							
	130	S K01 1地区	弥生土器	甕	11.3							
	131	S K01 1地区	弥生土器	高環(器台)	9.6	脚継部削み 外面煤付着 内外面赤彩	口1/5 口1/10 底1/4 口1/12					
	132	S K01 1地区	弥生土器	甕(蓋)								
	133	S K03 1地区	弥生土器	甕				12.7				
	134	S K03 1地区	弥生土器	甕				12.2				
	135	S K03 1地区	弥生土器	高環	16.7	4.1	内外面赤彩	口1/16				
	136	S K04 1地区	弥生土器	甕								
第18図	137	S D01 2地区	弥生土器	甕	14.2	1.4	脚部外面削み 内外面煤付着	破片 底完存				
	138	S D01 2地区	弥生土器	甕								
	139	S D01 2地区	弥生土器	甕	21.7							
	140	S D01 2地区	弥生土器	甕(蓋)								
	141	S D01 2地区	弥生土器	高環(器台)	4.1	内外面赤彩	底1/2 口1/16					
	142	S D01 2地区	弥生土器	高環								
	143	S D01 2地区	弥生土器	高環								
	144	S D01 2地区	弥生土器	高環								
	145	S D02 2地区	弥生土器	甕	21.3	3.8	擬凹線文 指頭圧痕 外面煤付着 指頭圧痕	口1/8 口1/4				
	146	S R04 2地区	弥生土器	甕	11.8							
	147	S R04 2地区	弥生土器	甕	16.9							
	148	S R04 2地区	弥生土器	甕	23.2							
	149	S R04 2地区	弥生土器	鉢	21.6	4.6	底部穿孔 外面赤彩	完形 口1/8				
	150	S R04 2地区	弥生土器	高環	25.0							
	151	S R04 2地区	弥生土器	高環	11.9	5.0	透孔4箇所 透孔3箇所 つまみ紐21	環底1/4 つまみ完存 完形				
	152	S R04 2地区	弥生土器	器台								
	153	S R04 2地区	弥生土器	蓋								
	154	S R04 2地区	弥生土器	台付鉢								
	155	S K05 2地区	弥生土器	甕	18.3							

口：口縁部 底：底部 体：体部 壁：环部 脚：脚部

第4表 出土遺物観察表（高島A遺跡）

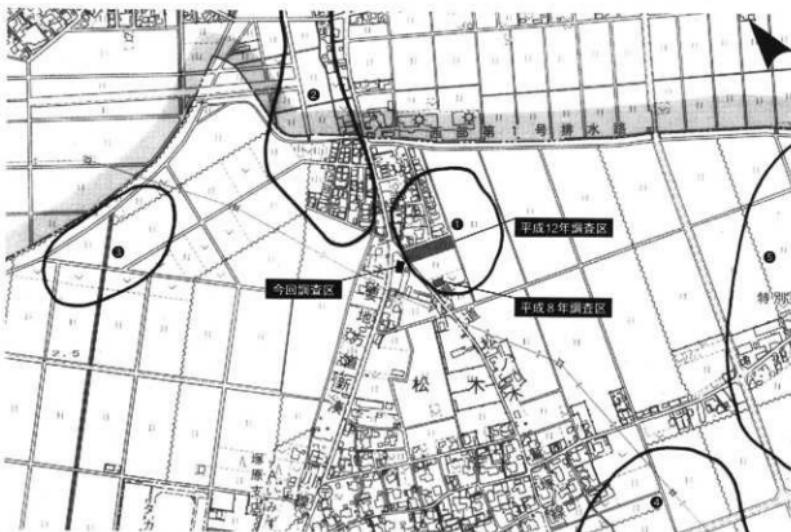
回数	No.	遺構・出土地区	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考	残存部
第19回	156	S D01 2地区	珠洲	壺					破片
	157	S D01 2地区	珠洲	壺					破片
	158	S D01 2地区	珠洲	壺(蓋)					破片
	159	S D01 2地区	珠洲	片口鉢				鉢目12条	破片
	160	S D01 2地区	珠洲	片口鉢				鉢目19条	破片
	161	S D01 2地区	珠洲	片口鉢				鉢目13条	破片
	162	S D01 2地区	珠洲	片口鉢		12.4		鉢目 9 条	底1/4
	163	S D01 2地区	珠洲	片口鉢		9.5		鉢目12条	底1/4
	164	S D01 2地区	青磁	碗	15.3			輪廓文 龍泉窯	口11/12
	165	S D01 2地区	石製品	砥石	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
	166	S D02 2地区	珠洲	壺(蓋)	3.7	3.7	1.2		
	167	S D02 2地区	珠洲	壺(蓋)					破片
	168	S D02 2地区	珠洲	壺(蓋)					破片
	169	S D02 2地区	珠洲	壺(蓋)					破片
	170	S D02 2地区	珠洲	壺(蓋)					破片
	171	S D02 2地区	珠洲	片口鉢					破片

口：口縁部 底：底部 体：体部 壊：坏部 腿：脚部

## 第3章 松木遺跡本発掘調査

### 第1節 調査に至る経緯

平成20年2月、新添地区松木地内において、個人住宅の建築計画が教育委員会に提出され、埋蔵文化財包蔵地の有無、その取り扱いについて照会を受けた。雑種地(429m<sup>2</sup>)を宅地造成する計画であった。事業計画地が埋蔵文化財包蔵地(松木遺跡)に隣接していることから、遺跡範囲を確認し、保護と工事計画の調整を図る目的で試掘調査を同年2月7日に実施した。その結果、計画地内南側一部を除いて、弥生時代中期の土器が遺構(溝・土坑)から出土した。このため遺構に影響が及ぶ工事を実施する場合は、本発掘調査による記録保存が必要であると判断した。同年3月、建築設計プラン確定の連絡を受け、住宅によって遺構に影響が及ぶ範囲のみの本発掘調査を実施する準備を進めた。本発掘調査は同年4月17日から5月8日(実働10日間)まで、発掘面積は98m<sup>2</sup>である。



第20図 発掘区位置図【松木遺跡】

●松木遺跡 ●中曾根遺跡 ●松木七口遺跡 ●松木中庭遺跡 ●朴木C遺跡

### 第2節 調査の概要

調査区の現況は雑種地であったため、まず重機で造成盛土と旧水田耕作土を除去した。その後に、作業員を投入して包含層掘削、遺構検出、遺構掘削、遺物取り上げを順次人力で行った。作業の進捗状況に応じて写真撮影(35mm・6×7中判・デジタル)や遺構概略図(1/100)、遺構断面図・遺構平面図(1/20)作成等の記録固化作業を実施した。調査終了後は、埋め戻しを行い現状復帰を図る。

調査区の基本層序は1~4層に分層される。上から1層は造成盛土、2層は旧水田耕作土、3層は黒褐色(2.5Y3/2)粘質シルトの遺物包含層、4層は浅黄色(5Y7/3)粘質シルトの地山である。遺構は全て4層から掘り込まれている。4層は東へ傾斜し、東西端部で約40cmの比高差がある。3層は4層の傾斜に添うように堆積しているため、4層の標高が高い西端部では削平を受け消滅している。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1号溝 (S D01、第22・23図、図版9~11)

調査区東端に位置する南北方向の溝である。幅58cm~86cm、全長7.3m検出し、両端とも発掘区外へのびる。断面は皿状を呈し、覆土は暗灰黄色砂質シルトが堆積する。遺物は弥生土器が出土している。第22図1は口径19.5cmを測る弥生土器壺で、口端部内面に櫛描羽状文が1条廻る。時期は弥生時代中期後半のものである。

#### 2号溝 (S D02、第22・23図、図版9~11)

1号溝の西側に並行する南北方向の溝。全長8.4mを検出し、両端とも発掘区外へのびる。西向きに湾曲しており、調査区北端と南側の一部で深く落ち込むが、大部分は深さ5cm程度と非常に浅く、黒褐色粘質シルトが堆積する。14号溝と共に掘立柱建物の周溝と考えられる。遺物は弥生土器が出土。第22図4は口縁部に穿孔を施す鉢で、弥生時代中期後半のものである。

#### 14号溝 (S D14、第22・23図、図版9~11)

試掘調査時にも確認した、調査区北西部に位置する東西方向の溝である。全長4.2mを検出し、西端は発掘区外へのびる。西端部が最も深く20cm、東端部は4cmと非常に浅く、覆土は黒褐色粘質シルトが堆積する。2号溝と共に掘立柱建物の周溝となり、14号溝と2号溝の間の空白地が開口部になるものと考える。遺物は弥生土器が出土している。第22図10は口縁下端部に櫛状具で刻みを入れ、内面には羽状文が廻る壺である。時期は弥生時代中期後半のもの。11~13は口縁部を波状に施す壺である。

#### 3号土坑 (S K03、第22・23図、図版9~11)

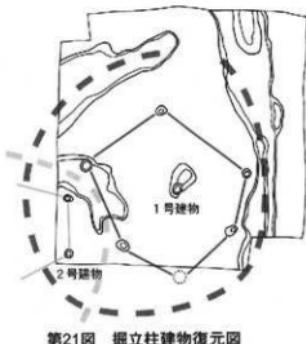
調査区の中央部に位置する不整形な土坑である。覆土は黒褐色粘質シルトが主体的に堆積し、最深で22cmを測る。4号土坑が埋まった後に、重なるように3号土坑が掘り込まれているため、新旧関係は4号土坑より新しい。遺物は弥生土器が出土している。第22図18は口径16cmを測り、口縁部に擬凹線を施す壺である。時期は弥生時代後期のもの。19は口縁部を波状に施す鉢である。

#### 16号土坑 (S K16、第22図、図版9・10)

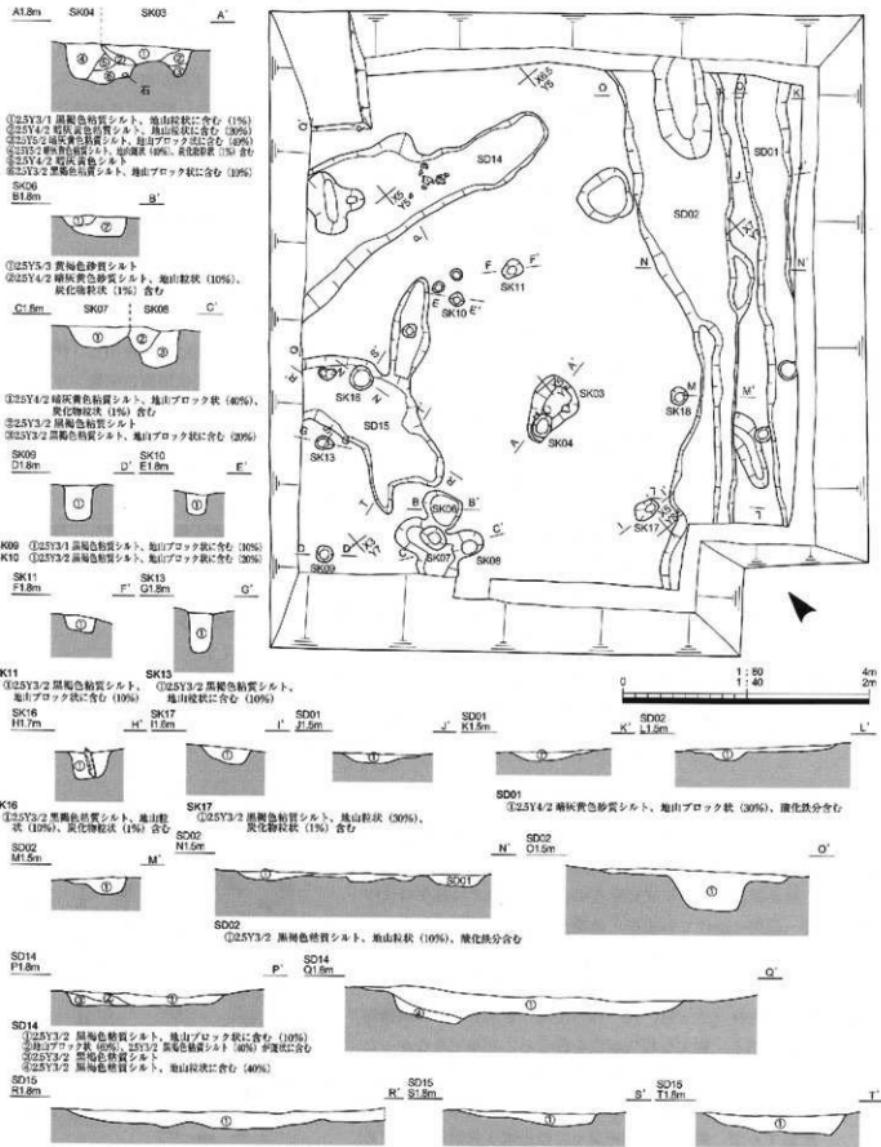
調査区中央やや西側に位置する円形土坑である。規模は直径38cm、深さは21cmを測る。断面は逆台形を呈し、覆土は黒褐色粘質シルトに炭化物が混在する。木杭が出土したため、掘立柱建物の柱穴の一つと考える。遺物は弥生時代中期と考えられる土器片が出土している。

### 第4節 総括

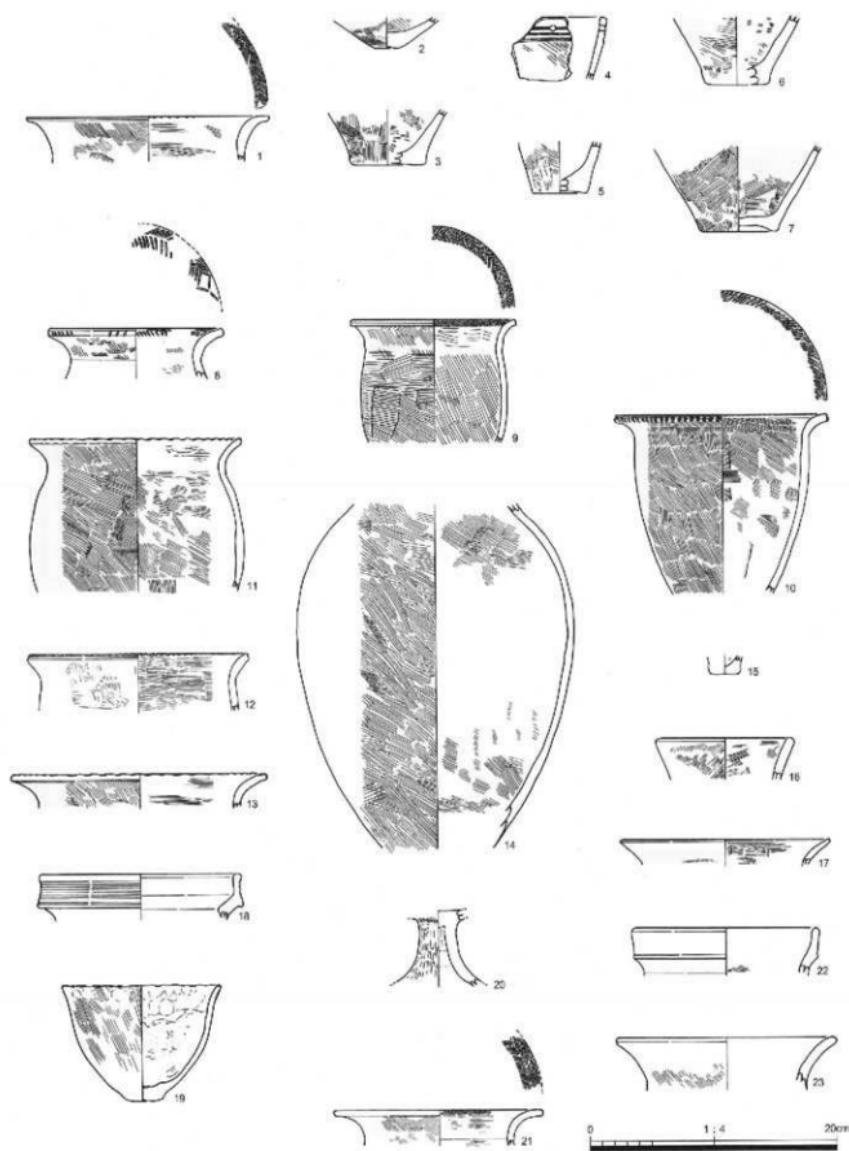
松木遺跡は、今回の調査区付近で二度の発掘調査が実施されている。平成8年度の調査区では弥生時代後期の溝や土坑が確認され、平成12年度の試掘調査地では弥生時代中期～後期にかけての遺構・遺物が確認されている。今回の調査では、松木遺跡としては初めての建物跡を2棟確認している。1号建物は、周溝（2号溝・14号溝）を廻らせ、5本の主柱（7・11・16～18号土坑）を配置し、床面積約15m<sup>2</sup>を測る。確実な柱穴配置を捉えることができなかつたが、規模や時期からみて6本主柱と推測する。2号建物は、周溝（15号溝）を廻らせ、2本の主柱（9・13号土坑）を配置するが、調査区外へのびるために正確な規模は不明である。この2棟は、周溝を持ち、壁周溝を持たない平地式建



第21図 掘立柱建物復元図



第22図 遺構実測図【松木遺跡】(1/80, 断面図 1/40)



第23図 遺物実測図【松木遺跡】(1/4)  
SD01 (1) SD02 (2~4) SD14 (5~17) SK03 (18~20) 包含層 (21~23)

物と考えられる。同時期に存在したものではなく、1棟が廃絶した後に場所を移して建てられたものであろう。帰属時期は1号建物が弥生時代中期後半、2号建物が弥生時代後期のものか。弥生時代中期の周溝を伴う平地式建物は、市内全域で高島A遺跡の4棟に加え計5棟となる。この平地式建物は、河川や潟湖の周辺部等の低湿地に多く立地し、北陸の弥生時代中期集落において、環境に適応した住居形態として盛行するものと考えられている。

これまでの調査地が遺跡包蔵地の西側に偏ってはいるものの、弥生時代中期の集落の一角が付近に広がる可能性が高いといえる。松木遺跡の西側には中曾根西遺跡が隣接し、さらにその西側に松木七口遺跡がある。東側には中曾根遺跡・松木中鹿遺跡・朴木C遺跡等がある。いずれも弥生時代～古墳時代の遺跡であり、松木遺跡周辺には複数の集落が存在していたと考えられる。中曾根西遺跡・松木七口遺跡の西側には、かつて庄川が流れ込んでいたと考えられ、周辺にはその支流が運んできた土砂が堆積し、僅かに標高の高い微高地を形成していたであろう。松木遺跡・中曾根西遺跡・松木七口遺跡は、この微高地上に位置し、比較的安定した場所に集落を営んでいたものと考えられる。なお、中曾根西遺跡は松木遺跡と隣接、遺跡時期も重複していることから、同一集落遺跡となる可能性がある。

第5表 出土遺物観察表（松木遺跡）

図版	No.	遺構	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考	残存量
	1	S D01	弥生土器	甕	19.5			羽状文 外面煤付着	口1/8
	2	S D02	弥生土器	甕(底)		1.8		内外面煤付着	底完存
	3	S D02	弥生土器	甕(底)		5.8		外面煤付着	底5/16
	4	S D02	弥生土器	鉢				透孔1箇所 沈線文	破片
	5	S D14	弥生土器	甕(底)		4.4			底1/2
	6	S D14	弥生土器	甕(底)		5.2		外面煤付着	底1/4
	7	S D14	弥生土器	甕(底)		6.2		内外面煤付着	底3/4
	8	S D14	弥生土器	甕	13.7			羽状文 口縁下端部刻み	口1/8
	9	S D14	弥生土器	甕	13.1			羽状文 外面煤付着	口3/8
	10	S D14	弥生土器	甕	16.9			羽状文 口縁下端部刻み	口・体1/4
	11	S D14	弥生土器	甕	17.1			波状口縁 外面煤付着	口3/8
第23図	12	S D14	弥生土器	甕	17.5			波状口縁	口1/8
	13	S D14	弥生土器	甕	20.0			波状口縁 外面煤付着	口1/4
	14	S D14	弥生土器	甕					体2/5
	15	S D14	弥生土器	甕(底)		2.3			底完存
	16	S D14	弥生土器	甕	11.1				口1/6
	17	S D14	弥生土器	甕	16.2			外面煤付着	口1/8
	18	S K03	弥生土器	甕	16.0			擬円錐文	口1/16
	19	S K03	弥生土器	鉢	12.8	9.5	3.1	波状口縁	口1/5 底完存
	20	S K03	弥生土器	高環				外面ミガキ	脚基完存
	21	包含層	弥生土器	甕	16.3			羽状文 外面煤付着	口1/8
	22	包含層	弥生土器	甕	14.4				口1/12
	23	包含層	弥生土器	甕	17.3				口1/8

口：口縁部 底：底部 体：体部 壁：環部 脚：脚部

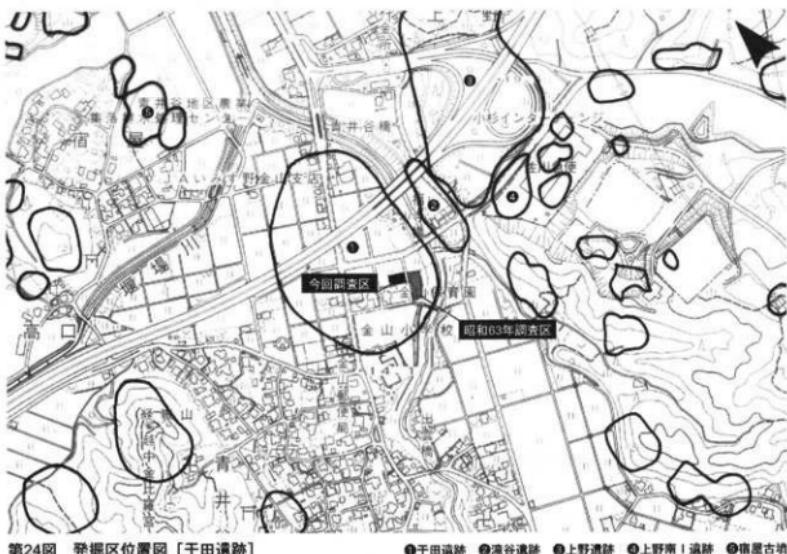
#### 参考文献

- 金三津英則他 2006年「高島A遺跡発掘調査報告書－鏡宮高島土地区画整理事業に伴う発掘調査－」射水市教育委員会  
 金三津英則他 2007年「高島A遺跡発掘調査報告－射水市立新湊南都中学校造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－」射水市教育委員会  
 宗 融子他 1997年「松木遺跡発掘調査報告」新湊市教育委員会  
 宗 融子 2000年「高島A遺跡発掘調査概要－民間ドライイン造成工事に伴う発掘調査－」新湊市教育委員会  
 根津明義他 2005年「中曾根西遺跡調査報告－県道新野町線改良工事にともなう発掘調査－」高岡市教育委員会

## 第4章 千田遺跡本発掘調査

### 第1節 調査に至る経緯

平成19年7月、小杉地区青井谷地内において、個人住宅の宅地造成計画が教育委員会に提出され、埋蔵文化財包蔵地の有無、その取り扱いについて照会を受けた。事業計画地1,902m<sup>2</sup>を宅地4区画に造成する計画であった。事業計画地が埋蔵文化財包蔵地（千田遺跡）に含まれることから、遺跡範囲を確認し、保護と工事計画の調整を図る目的で試掘調査を同年10月に実施した。その結果、南側一反において13世紀代の鎌倉時代を中心とする遺物が、遺構（溝・土坑）から出土した。このため遺構に影響が及ぶ工事を実施する場合は、本発掘調査による記録保存（953m<sup>2</sup>）が必要であると判断した。平成20年10月、本発掘調査対象地内において住宅建築計画が具体化したため、本発掘調査を実施する準備を進めた。本発掘調査は同年10月27日から11月13日（実働11日間）まで、発掘面積は146m<sup>2</sup>である。



第24図 発掘区位置図〔千田遺跡〕

●千田遺跡 ●瀧谷遺跡 ●上野遺跡 ●上野西遺跡 ●信重古墳

### 第2節 調査の概要

調査区は造成工事により土砂の盛土がなされていたため、まず重機で盛土と旧水田耕作土を除去し、その後に作業員を投入して包含層掘削、遺構検出、遺構掘削、遺物取り上げを順次人力で行った。作業の進捗状況に応じて写真撮影（35mm・6×7中判・デジタル）や遺構概略図（1/100）、遺構断面図・遺構平面図（1/20）作成の記録図化作業を実施した。調査終了後は、埋め戻しを行い現状復帰を図る。

調査区の基本層序は1～4層に分層される。上から1層は土砂で厚さ約60cmの造成盛土、2層は土砂の下に約5～10cmの旧水田耕作土である。造成時のすきとりのため一部でのみ遺存していた。3層は約5cmの遺物包含層、黒褐色（10YR3/2）または灰黄褐色（10YR4/2）シルトである。4層にはぶい黄橙色（10YR6/4）粘質シルトの地山である。遺構は全てこの4層から掘り込まれている。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1号溝（S D01、第25・26図、図版12・13）

調査区中央部に位置し、東西方向にやや蛇行しながら両端とも発掘区外へのびる溝である。幅70cm～280cm、深さ8cm～16cm、全長約11.5mを検出。断面は概ね皿状を呈し、覆土は炭化物を含む黒褐色シルトが堆積する。遺物は弥生土器・須恵器・珠洲・八尾・瀬戸美濃が出土している。第25図2は口径27.8cmの珠洲片口鉢である。2cm幅の原体に御目8条を施し、13世紀中葉～13世紀後半のものである。10は八尾片口鉢の口縁部である。色調は断面が灰色系、外面が茶褐色系を呈する。

#### 2号溝（S D02、第25・26図、図版12・13）

S D01の南側に並行する全長約8.3mの東西溝である。断面は概ね皿状を呈し、覆土は炭化物を含む灰黄褐色シルトが堆積する。遺物は弥生土器・須恵器・珠洲・瀬戸美濃・越中瀬戸が出土している。第25図11は珠洲片口鉢。口縁部が外傾し方頭を呈するものであり、時期は13世紀中葉～13世紀後半である。12は全面に鏽釉が施された越中瀬戸すり鉢。口縁の縁帯を外方につまみ出すものである。

#### 3号土坑（S K03、第25・26図、図版12・13）

調査区西側に位置する楕円形土坑である。規模は長軸105cm、短軸84cm、深さは最深で15cmを測る。断面は逆台形を呈し、覆土は灰黄褐色シルトが堆積する。弥生土器が出土している4号溝を切って掘り込まれているため、時期は4号溝より新しい。遺物は第25図13の珠洲が1点出土している。

#### 5号土坑（S K05、第25図、図版12）

調査区中央部に位置する不整形土坑である。覆土は上層に灰黄褐色シルト、下層に黒褐色シルトが堆積する。深さは最深で56cmを測り、底部では湧水が見られる。遺物は弥生土器片が出土している。

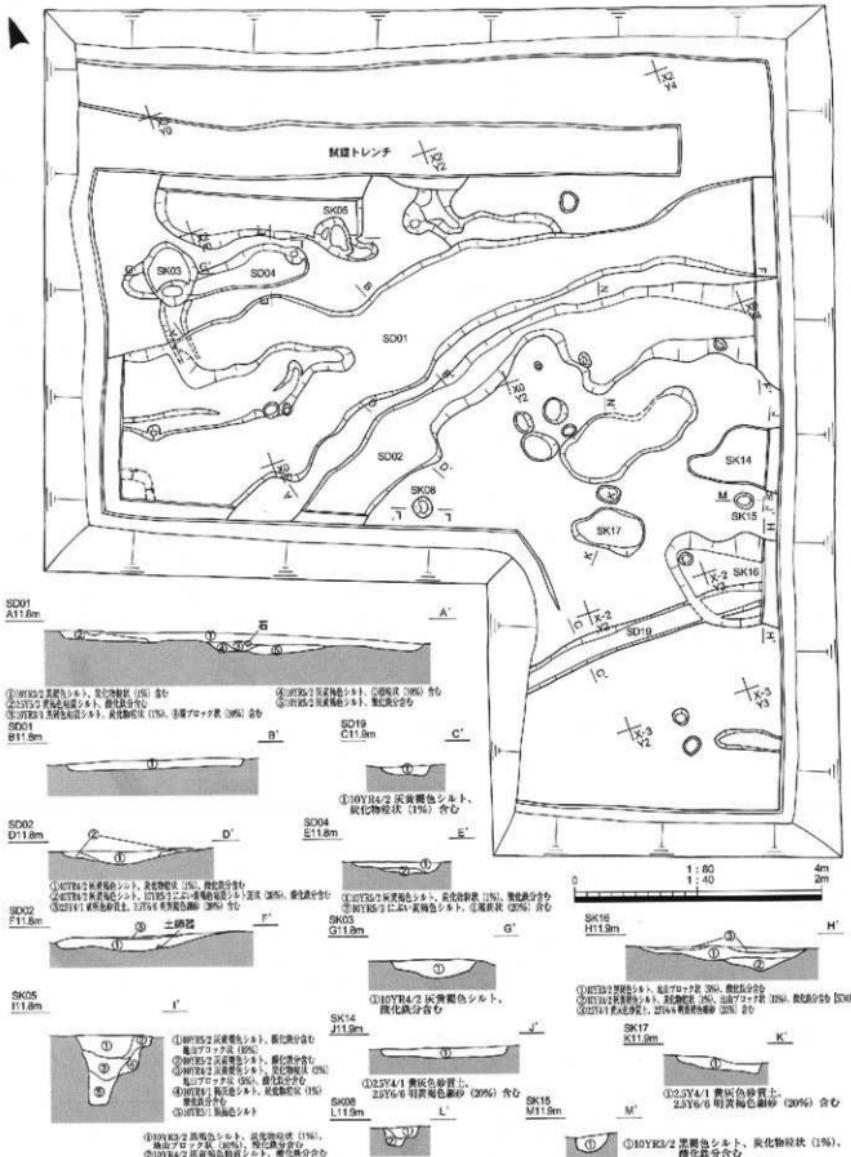
#### 17号土坑（S K17、第25図、図版12）

調査区中央やや東側に位置する不整形土坑である。規模は長軸120cm、短軸66cm、深さは最深で10cmを測る。覆土は黄灰色砂質土が堆積し、近世以降の搅乱と考える。遺物は唐津が出土している。

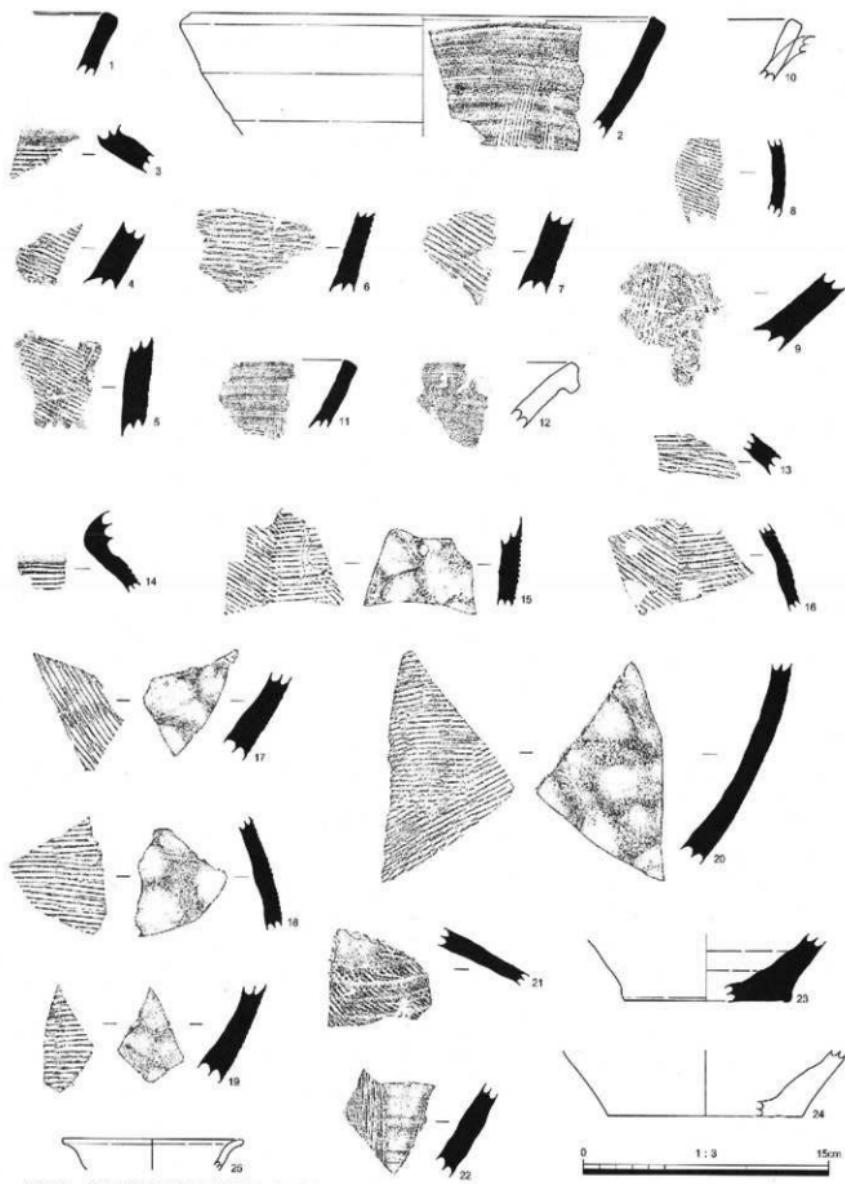
### 第4節 総括

干田遺跡は、今回の調査区（146m<sup>2</sup>）と市道を挟む東側隣接地（950m<sup>2</sup>）で昭和63年度に本発掘調査が実施されている。前回の調査では、弥生時代後期の溝や土坑、鎌倉時代の素掘り井戸が確認されている。今回の調査では、弥生時代の溝・土坑、鎌倉時代の溝・土坑、江戸時代以降の土坑を確認している。この二度の発掘調査が遺跡包蔵地全体からみると南東域に偏っているためなのか、集落本体の様相をなす住居跡遺構が検出されないことから、縁辺部に位置するものと考えられる。この遺跡は、出土遺物の帰属時期から2時期が考えられる。まず弥生時代後期に集落が築かれ、古墳時代前期に一旦移転又は廃絶を迎える。その後、鎌倉時代に新たな集落が形成されるというものである。今調査区において、弥生時代の遺構を壊して鎌倉時代の遺構が遺存していることより、確実であると考える。

干田遺跡を含む周辺は旧金山村域である。この「金山」の地名は、貞治5年（1366）の「足利義詮袖刊下文」に金山保地頭職が下野国御家人の佐野秀綱に与えられたというのが初見と考えられる。この史料によって、14世紀後半には莊園開発が既に及んでいた地域であったことが伺える。それ以前の史料はなく実態不明であったが、発掘調査により13世紀中葉以降の遺物が出土したことで、鎌倉時代中期から周辺に人々が集落を営んでいたことが明らかになる。文献史料では分からなかった空白時代を1世紀遡る成果である。金山保は応永19年（1412）に第4代將軍足利義持の寄進により京都石清水八幡宮領となり、姫野保（現高岡市）・蟹谷保（現南砺市）とともに天文年間（1532～1555）まで存続している。その後、「法内庄」と称された江戸期も継続的に存続し、集落は現代まで途絶えなかつたと考えられる。



第25図 造構実測図 [干田遺跡] (1/80, 断面図 1/40)



第26図 遺物実測図【干田遺跡】(1/3)  
SD01 (1~10) SD02 (11~12) SK03 (13) 試掘調査 (14~25)

第6表 出土遺物観察表（干田遺跡）

回数	No.	遺構	種類	断面	口径(cm)	底高(cm)	底径(cm)	備考	残存量
第26回	1	S D01	珠洲	片口鉢	27.8			卸目 8 条	破片
	2	S D01	珠洲	片口鉢					口1/8
	3	S D01	珠洲	甕(蓋)					破片
	4	S D01	珠洲	甕(蓋)					破片
	5	S D01	珠洲	甕(蓋)					破片
	6	S D01	珠洲	甕(蓋)					破片
	7	S D01	珠洲	甕(蓋)					破片
	8	S D01	珠洲	甕(蓋)					破片
	9	S D01	珠洲	片口鉢	卸目 9 条			卸目 9 条	破片
	10	S D01	八尾	片口鉢					破片
	11	S D02	珠洲	片口鉢					破片
	12	S D02	越中漁戸	すり鉢					鉛輪
	13	S K03	珠洲	甕(蓋)				同安窯 軸渦 天文オリーブ色	破片
	14	試掘 1 T	珠洲	甕(蓋)					破片
	15	試掘 1 T	珠洲	甕(蓋)					破片
	16	試掘 1 T	珠洲	甕(蓋)					破片
	17	試掘 1 T	珠洲	甕(蓋)					破片
	18	試掘 1 T	珠洲	甕(蓋)					破片
	19	試掘 1 T	珠洲	甕(蓋)					破片
	20	試掘 1 T	珠洲	甕(蓋)					破片
	21	試掘 1 T	珠洲	甕					破片
	22	試掘 1 T	珠洲	片口鉢	10.0	11.8	同安窯 軸渦 天文オリーブ色	口1/8 底1/12 口1/10	破片
	23	試掘 1 T	珠洲	甕(蓋)					底1/8
	24	試掘 1 T	八尾	甕(蓋)					底1/12
	25	試掘 1 T	青磁	碗	10.8				口1/10

口：口縁部 底：底部 体：体部 壁：坏部 脚：脚部

## 参考文献

- 池野正男他 1990年『干田遺跡発掘調査概要』小杉町教育委員会
- 楠瀬 勝他 1997年『小杉町史 通史編』小杉町
- 田中 明 2009年『射水市内遺跡発掘調査一覧 -平成19年度-』射水市教育委員会
- 吉岡康暢他 1989年『珠洲の名陶』珠洲焼資料館

## 第5章 その他の遺跡調査

平成20年度に射水市教育委員会が実施した埋蔵文化財の調査件数は、分布調査3件・試掘調査17件・本発掘調査3件・工事立会9件・現況測量調査2件であった。傾向としては、試掘調査件数が昨年度比較で4割減少、調査原因が北陸新幹線建設に伴うものがその4割を占める結果となった。

### 分布調査

%	所在地	面積	調査期間	対象面積	種別	現況	出土遺物	調査への対応
1	土合1357-1 共用住宅建設	H20.5.24	860m <sup>2</sup>	本耕作地	標高65m:水田			支障なし
2	土合1017-1 個人宅用住宅建築	H20.10.28	605m <sup>2</sup>	未耕作地	標高7m:水田			支障なし
3	吉井谷字東坂 疊野地内 事業用林木造成工事	H20.12.2	21,100m <sup>2</sup>	未耕作地	標高35~60m の山地			支障なし
計	3件		対象面積 22,572m <sup>2</sup>					

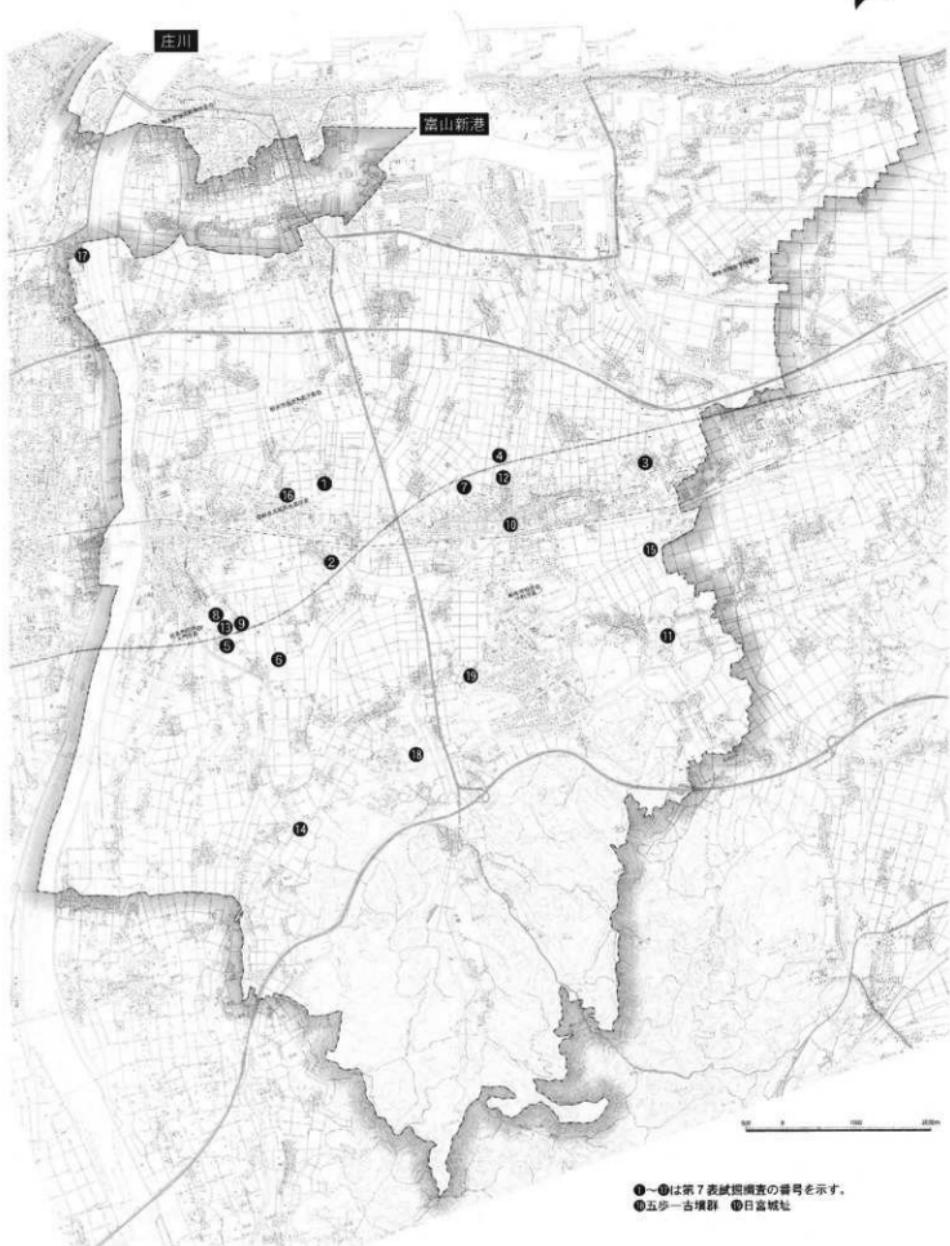
### 試掘調査

%	調査名	所在地	深度	調査期間	対象面積	発掘面積	性質	出土遺物	調査への対応
1	鳥取 21143	鳥取郡1-1号 店舗設置	H20.6.24~25	911m <sup>2</sup>	10m <sup>2</sup>	集落	土坑・溝	弥生土器・牛枝頭彫器 五角形彫器・鉄石斧鋸片	支障なし
2	赤井西 211456	赤井字夷原6017-1 仮設移設工事	H20.3.7	360m <sup>2</sup>	30.9m <sup>2</sup>	敷地	溝		支障なし
3	鷹見村中 21100	個人用住宅建築	H20.7.28	708m <sup>2</sup>	71m <sup>2</sup>	集落	溝・土坑	弥生土器・古代土器類・中世土器類 五角形彫器・鉄石斧鋸片	工事によっては本格調査が必要
4	愛宕 211063	三ヶ450 鳥取県立 厚生年金会館	H20.7.30	991m <sup>2</sup>	68m <sup>2</sup>	散在地	溝・土坑	弥生土器・牛枝頭彫器・近世短削	工事立会必要
5	木江町役場1 211413	木村218 個人用住宅建築	H20.8.18	851m <sup>2</sup>	117m <sup>2</sup>	集落	溝		支障なし
6	木江町役場 211410	木門木江字宮田 店舗及び 農地造成工事	H20.8.18~30	2,475.7m <sup>2</sup>	175m <sup>2</sup>	散在地	溝	古代土器群・古代漁獵器・中世茶碗	支障なし
7	愛宕 211063	三ヶ637-3 個人用住宅建築	H20.9.24	673m <sup>2</sup>	50m <sup>2</sup>	散在地		古代灰陶器	支障なし
8	木江駅前1 211413	木村207 個人用住宅建築	H20.9.29	307m <sup>2</sup>	30m <sup>2</sup>	集落	土坑	中世灰陶器	支障なし
9	木江駅前1 211413	木村66-1号 個人用住宅建築	H20.11.25	792m <sup>2</sup>	31m <sup>2</sup>	集落	溝		支障なし
10	小野地区深川 211083	川原41-6-2 店舗設置	H20.11.25~26	382m <sup>2</sup>	23.4m <sup>2</sup>	溝	溝・土坑	东大土器・古代漁獵器・中世土器群 中世灰陶器・近世鐵鋤・明治小鉢碗 明治烟燭具	支障なし
11	鶴来八日 211049	中畠町新字早丸 506-1号 個人用住宅建築	H20.11.26	892m <sup>2</sup>	20m <sup>2</sup>	散在地・集落			支障なし
12	重宝 211063	三ヶ478-1号 個人用住宅建築	H20.12.1	1,040m <sup>2</sup>	108m <sup>2</sup>	散在地	溝		支障なし
13	木江駅前1 211413	木村173 個人用住宅建築	H20.12.2	996m <sup>2</sup>	81m <sup>2</sup>	集落	溝		支障なし
14	円池 211063	鬼海121-1 個人用住宅建築	H20.12.2	498m <sup>2</sup>	26m <sup>2</sup>	散在地			支障なし
15	計画区域 211063	鬼海21-1号 駅前市場建設	H20.12.10~11	5,546m <sup>2</sup>	353m <sup>2</sup>	散在地・集落・溝・土坑		弥生土器・古代灰陶器・古代土器群 中世灰陶器・近世鐵鋤・左近横口鑿・ 鉄石斧鋸片	工事立会必要
16	小林 211440	小林232-4 概存宅地の 分譲販売	H21.3.3	200m <sup>2</sup>	14m <sup>2</sup>	集落			支障なし
17	吉宮 211021	川口宿営舎会員字 吉井213-1号 旅館付替工事	H21.3.3	200m <sup>2</sup>	13m <sup>2</sup>	散在地			支障なし
計	13地跡17件		対象面積 45,811.2m <sup>2</sup>		公耕面積 13,213.3cf				

### 本発掘調査

%	調査名	所在地	面積	調査期間	発掘面積	種別	出土遺物
1	佐木 211019	佐木323 個人用住宅建築	H20.4.17~5.8	98m <sup>2</sup>	散布地	弥生溝・散在土坑 弥生墓丘	弥生土器
2	高島A 211027	殿宮15南区1 個人用住宅建築	H20.5.28~6.11	87m <sup>2</sup>	集落 散布地	弥生溝・散在土坑・中世鐵鋤 弥生土器・古代灰陶器・中世茶碗・中世青瓷・ 鉄石斧鋸片	弥生土器・古代灰陶器・中世茶碗・中世青瓷・ 鉄石斧鋸片
3	千代 211259	青井谷12-6 個人用住宅建築	H20.6.27~11.13	148m <sup>2</sup>	集落 散布地	弥生溝・弥生土坑・中世鐵鋤・近世土坑 弥生土器・古代灰陶器・中世茶碗・中世青瓷・ 鉄石斧鋸片	弥生土器・古代灰陶器・中世茶碗・中世青瓷・ 鉄石斧鋸片
計	3地跡3件		対象面積 331.1m <sup>2</sup>		公耕面積 13,213.3cf		

第7表 平成20年度埋蔵文化財発掘調査一覧表



第27図 試掘調査等位置図

①～⑯は第7表試掘調査の番号を示す。  
⑬五歩一古墳群 ⑭日富城址

## 第1節 平成20年度試掘調査概要

### 1. 鳥取遺跡（第28図、図版14）

所在地 射水市鳥取49-1番地外

調査期間 平成20年6月24日・25日

調査面積 対象面積：911m<sup>2</sup> 発掘面積：104m<sup>2</sup>

調査原因 店舗建設

調査担当者 尾野寺克実・田中 明・金三津英則

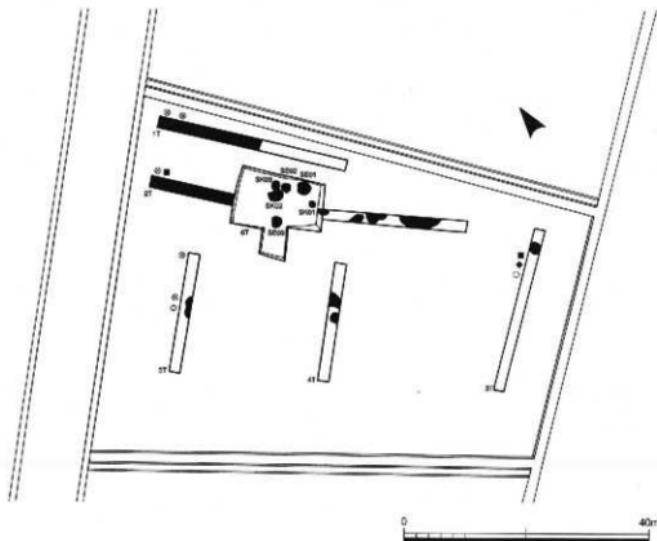
検出遺構 弥生時代：土坑1基

中世：井戸4基・土坑1基

近世：井戸1基・土坑6基

出土遺物 弥生土器・中世珠洲・中世陶器・中世水輪・近世越中瀬戸・近世伊万里・曲物底板

**調査概要** 対象地は標高3.3mに位置する。土層は上から1層が水田耕作土、2層が黒褐色(2.5Y3/2)粘質土の水田床土、3層がにぶい黄橙色シルト(10YR6/3)の地山である。6Tにおいて中世の遺構がまとまって検出されたため、店舗建設予定地を拡張して遺跡の広がりを確認した。その結果、素掘り井戸4基(中世3・近世1)・土坑3基(弥生1・中世1・近世1)を検出し、その記録保存を行った。井戸の数が際立っており、室町時代～江戸時代に近接して作られていることから、長期間に亘る生活が隣接で営まれていたことが考えられる。「大島町史」によると、隣接する菅原家の先祖は播磨国菅原の出身で、平安時代末頃に当地へ移り真言宗寺院を建立した。戦国時代に上杉謙信の兵火に遭い全焼したが、その後農家となり鳥取村肝煎役を務めたとされる。また、文明年間(1469～87)蓮如の越中布教の際に下賜された「御文書」・「六字名号」や寺院礎石とされる方形の石造物も残されている。これらのことから、現在の屋敷地が寺院敷地の一部であると考えられるため、今回の対象地は遺跡中心地から外れているものと考える。



## 2. 赤井西遺跡

所在 地 射水市赤井字馬塚617-1番地

調査期間 平成20年7月7日

調査面積 対象面積: 360m<sup>2</sup> 発掘面積: 30.9m<sup>2</sup>

調査原因 鉄塔移設工事

調査担当者 田中 明・金三津英則

検出遺構 時期不明: 溝1条

出土遺物 なし

**調査概要** 対象地の現況は水田で標高6mに位置する。土層は上から1層が耕作土、2層が水田床土、3層が黒褐色(2.5Y3/1)シルト、4層が黄褐色(2.5Y5/3)シルトの地山である。遺構確認は4層上面で行った。1T西端部で検出した溝からは、遺物が出土しなかったため時期不明とした。今回の対象地において保護措置を要する遺跡の広がりは見られなかった。



## 3. 鶯塚村中遺跡 (第28図、図版15)

所在 地 射水市鶯塚677-1番地

調査期間 平成20年7月28日

調査面積 対象面積: 708m<sup>2</sup> 発掘面積: 71m<sup>2</sup>

調査原因 個人専用住宅建築

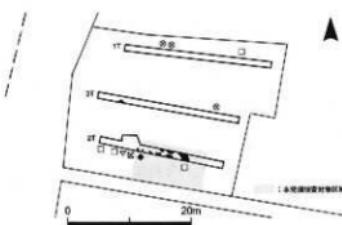
調査担当者 原田義範・尾野寺克実

検出遺構 弥生時代: 溝1条 時期不明: 土坑10基

出土遺物 弥生土器・古代土器・中世土器

近世陶磁器・鉄石英剥片

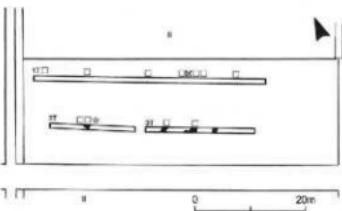
**調査概要** 対象地の現況は宅地で標高2.5mに位置する。土層は上から1層が造成盛土、2層が水田耕作土、3層が水田床土、4層がオリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土の地山である。2Tで検出した溝からは弥生土器が出土した。擾乱部分が大半で、保護が必要となる範囲(75m)は、地表面から深さ50cm以上の掘削を行う場合、記録保存が必要となる。



#### 4. 愛宕遺跡（第28図）

所 在 地 射水市三ヶ450番地  
調査期間 平成20年7月30日  
調査面積 対象面積: 991m<sup>2</sup> 発掘面積: 68m<sup>2</sup>  
調査原因 農機具格納庫建設  
調査担当者 尾野寺克実・金三津英則  
検出遺構 弥生時代: 潟3条・土坑1基  
出土遺物 弥生土器・中世土師器・近世煙管

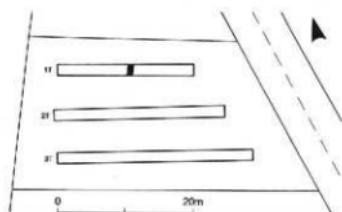
調査概要 対象地は標高3.2mに位置する。土層は上から1層が耕作土、2層が暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土の遺物包含層(弥生・中世)、3層が暗灰黄色砂質土の地山である。2Tで検出した土坑からは弥生土器と煙管(江戸時代以降)が出土した。耕地整理による削平や耕作時の搅乱のため、地山の標高が高い地点では遺構に影響が及び、残存する深度は極めて浅い。



#### 5. 本江畠田Ⅰ遺跡

所 在 地 射水市中村218番地  
調査期間 平成20年8月18日  
調査面積 対象面積: 851m<sup>2</sup> 発掘面積: 117m<sup>2</sup>  
調査原因 個人専用住宅建築  
調査担当者 田中 明・金三津英則  
検出遺構 時期不明: 潟1条  
出土遺物 なし

調査概要 対象地は標高7mに位置する。土層は6層に細分され、上層(奈良~室町時代)と下層(弥生・古墳時代)の旧地表面が遺存する。平成16~18年度に亘り、40m余り南側(あおば台地内)での本発掘調査では、弥生・古墳時代の集落跡が見つかっている。今対象地は、その地点より地形的に1m以上低い場所に位置しているため、居住域から外れるものと考えられる。

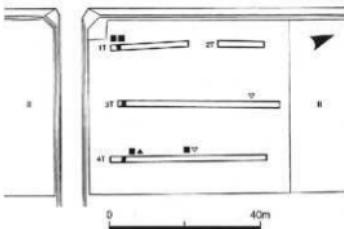


## 6. 本江宮田遺跡（第28図）

所在 地 射水市大門本江字宮田285-1番地外  
調査期間 平成20年8月18日・20日  
調査面積 対象面積：2,475.7m<sup>2</sup> 発掘面積：175m<sup>2</sup>  
調査原因 店舗及び集荷場建設  
調査担当者 田中 明・金三津英則  
検出遺構 時期不明：溝1条  
出土遺物 古代土師器・古代須恵器・中世珠洲



調査概要 対象地は標高9.4mに位置する。土層は8層に細分され、2層の旧地表面が遺存する。古代・中世の遺物包含層から、全城に渡り散発的に遺物が出土している。検出した溝は、掘り込み・規模・方向が同じであることから、東西方向に伸びる一連の遺構と考えられる。遺構・遺物とともに希薄であることから、遺跡の中心は西側集落部分に遺存するものと考える。

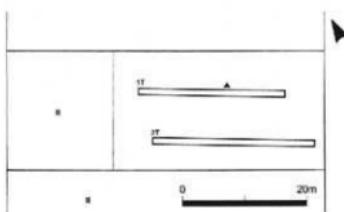


## 7. 愛宕遺跡

所在 地 射水市三ヶ637-3番地  
調査期間 平成20年9月24日  
調査面積 対象面積：675m<sup>2</sup> 発掘面積：50m<sup>2</sup>  
調査原因 個人専用住宅建築  
調査担当者 田中 明・金三津英則  
検出遺構 なし  
出土遺物 古代須恵器



調査概要 対象地は標高2.9mに位置する。上層は上から1層が水田耕作土、2層が水田床上、3層が黒色(25Y2/1)粘質の自然堆積土、4層が灰オリーブ色(5Y6/2)粘質土の地山である。遺構確認は4層上面で行った。遺物は1T3層より須恵器細片1点が出土している。遺物を伴う遺構が検出されなかっただため、遺跡の広がりは見られないものと判断した。

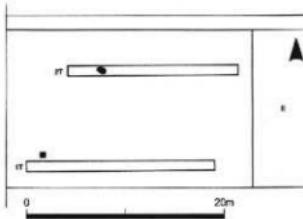


## 8. 本江畠田Ⅰ遺跡

所 在 地 射水市中村207番地  
調査期間 平成20年9月29日  
調査面積 対象面積：397m<sup>2</sup> 発掘面積：36m<sup>2</sup>  
調査原因 個人専用住宅建築  
調査担当者 田中 明・金三津英則  
検出遺構 近現代：土坑1基  
出土遺物 中世珠洲



調査概要 対象地の現況は水田で標高7.7mに位置する。上層は上から1層が耕作土、2層が暗灰黄色(2.5Y5/2)の床土、3層が黒褐色(2.5Y3/1)粘質の自然堆積土、4層が灰黄色(2.5Y7/2)粘質土の地山である。遺物は1T3層より珠洲1点が出土している。保護を必要とする埋蔵文化財の広がりは確認できず、当該地は遺跡範囲外と考えられる。

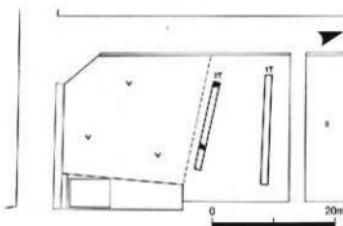


## 9. 本江畠田Ⅰ遺跡

所 在 地 射水市中村96番1外  
調査期間 平成20年11月25日  
調査面積 対象面積：792m<sup>2</sup> 発掘面積：31m<sup>2</sup>  
調査原因 個人専用住宅建築  
調査担当者 田中 明・金三津英則  
検出遺構 近世以降：溝2条  
出土遺物 なし



調査概要 対象地は標高7.5mに位置する。上層は5層に細分され、上下2層の旧地表面が遺存している。2Tで検出した遺構は、遺物の出土は無かったが、掘り込み状況より近世以降のものと判断した。本江畠田Ⅰ遺跡と本江大坪Ⅰ遺跡に挟まれた対象地は、地山を検出する標高が低く、周辺より地形的に低位置にもあり、両遺跡の縁辺部にあたるものと考えられる。



## 10. 小杉焼高烟窯跡（第29～31図、図版16・17）

所在 地 射水市戸破4144-2番地

調査期間 平成20年11月25日・26日

調査面積 対象面積：382m<sup>2</sup> 発掘面積：23.4m<sup>2</sup>

調査原因 店舗建設

調査担当者 原田義範・尾野寺克実・田中 明

金三津英則

検出遺構 中世：土坑1基

明治時代：溝状遺構（建物基礎安定構造物）

出土 遺物 弥生土器・古代須恵器・中世土師器

中世瀬戸美濃・近世銅錢・明治小杉焼・明治窯道具



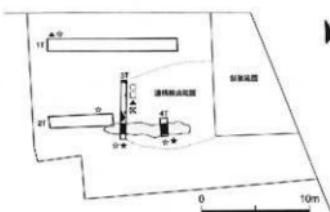
調査概要 対象地は宅地で標高4.8mに位置し、近年まで延命庵と称する寺院があった。土層は上から1層が現表土、2層が旧表土（盛土）、3層が暗褐色（10YR3/3）粘質の自然堆積土、4層が明黄褐色（10YR6/8）粘質土の地山である。トレチを設定した結果、小杉焼の窯跡が構築されたと考えられる旧地表面が現表土直下であったため約40m<sup>2</sup>の範囲で遺構検

出を行い、幅1m前後・長さ約8mに渡る溝状遺構を検出した。2層から垂直に掘り込まれ、主に窯壁の構成物で埋め戻されたものであり、大型の窯道具や小杉焼の破片も混入していた。土層断面観察からは、ただ不要なものを投げ込んだものではなく、隙間が空かないようにしっかりと突き固めながら埋められたと推測した。平面形は東西に細長く伸びる形状で、これは明治期の延命庵の桁方向と一致する。従って、溝状遺構は水路等として使用されたのではなく、窯壁の破片を再利用して創建時の庵の建物基礎を安定させる構造物としての役割があったのではないかと考えられる。

また、対象地の北側は、瓦・川原石・窯道具等の混入やブロック状の川砂層がみられた。旧地形は明瞭ではないが、庵を建立する際の整地が行われたものと推測され、確認できた遺構面は、延命庵創建時の整地面である可能性が高い。

調査対象地の人為的痕跡は、明治時代の窯場廃絶後の所作である。小杉焼の窯跡、又はその痕跡が遺存していれば、市内において特に重要な遺跡であることを考慮し、埋蔵文化財包蔵地として取り扱うところであり、また、その可能性があるため試掘調査を実施したものである。しかし、今回の調査では遺構内に遺物は含まれたが、それらは後の転用品であり、遺構として捉えた場合は、小杉焼とは直接の関係がないものと判断し、今後の調査は不要であると考える。

第29図は高烟窯出土の小杉焼であり、碗・皿・角小皿・急須・徳利・片口・すり鉢・壺・植木鉢・陶製椅子・甕等が出土。釉薬は緑釉・鉄釉・蛤釉・灰釉がみられ、素焼きのものは墨書きもみられた。第30図は高烟窯出土の窯道具であり、陶柱・ハマ・輪ハマ・四つ羽根・煉瓦が出土。第31図は昭和53年調査で箕輪窯からの出土遺物である。



## 11. 黒河尺目遺跡

所 在 地 射水市中老田新字星丸596-1番地外

調査期間 平成20年11月26日

調査面積 対象面積: 892m<sup>2</sup> 発掘面積: 20m<sup>2</sup>

調査原因 個人専用住宅建築

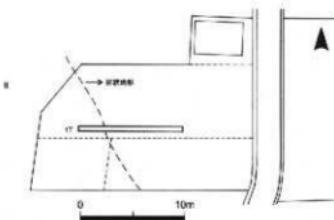
調査担当者 田中 明・金三津英則

検出遺構 なし

出土遺物 なし



**調査概要** 対象地は標高12mに位置する。上層は上から1層が造成盛土、2・3層が自然堆積土、4層が灰白色（5Y7/1）シルトの地山である。トレンチ中央から東側において谷状地形を確認したが、遺物の出土は無かった。西方200m地点で行われた調査では、縄文時代・奈良時代の集落跡が見つかっているが、今回は遺跡の広がりがなく空白地帯となっている。



## 12. 爰宕遺跡

所 在 地 射水市三ヶ478-1番地外

調査期間 平成20年12月1日

調査面積 対象面積: 1,494m<sup>2</sup> 発掘面積: 108m<sup>2</sup>

調査原因 個人専用住宅建築

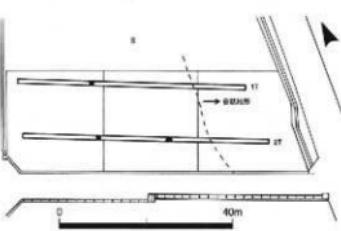
調査担当者 田中 明・金三津英則

検出遺構 時期不明:溝 2条

出土遺物 なし



**調査概要** 対象地は標高3mに位置する。土層は6層に細分され、地山はぶい黄色シルト（2.5Y6/4）である。各トレンチの東部では地山が東側へ落ち込んでおり、南北方向に伸びる谷状地形が遺存すると考えられる。付近を流れる下条川を中心とした南北方向の小河川が幾筋も存在し、地形的に不安定な環境下にあったために、集落等が形成されなかつたのであろう。



### 13. 本江畠田Ⅰ遺跡

所在 地 射水市中村173番地

調査期間 平成20年12月2日

調査面積 対象面積: 999m<sup>2</sup> 発掘面積: 81m<sup>2</sup>

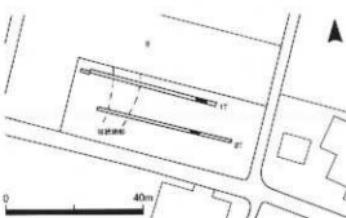
調査原因 個人専用住宅建築

調査担当者 尾野寺克実・金三津英則

検出遺構 近世以降: 溝 1条

出土 遺物 なし

調査概要 対象地は標高7.7mに位置する。土層は6層に細分され、上下2層の旧地表面が遺存している。検出した溝は、位置・埋土が共通する点から、南北方向に伸びる同一の遺構と考えられる。遺物は出土していないが、土層の掘り込みから近世以降の溝と考える。今回の対象地において保護を必要とする埋蔵文化財の広がりは見られなかった。



### 14. 円池遺跡

所在 地 射水市荒町121番1

調査期間 平成20年12月2日

調査面積 対象面積: 498m<sup>2</sup> 発掘面積: 26m<sup>2</sup>

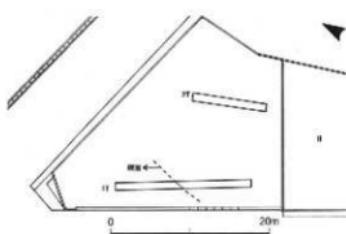
調査原因 個人専用住宅建築

調査担当者 尾野寺克実・金三津英則

検出遺構 なし

出土 遺物 なし

調査概要 対象地は円池遺跡の南方約70mで標高9.2mに位置する。土層は上から1層が耕作土、2層が水田底土、3層が明黄褐色(10YR6/6)シルトの地山である。この遺跡は調査が行われていないため、詳細不明なままである。今回は、埋蔵文化財の遺存を確認できず、2Tで和田川の影響とみられる疊層があることから、集落形成に不向きな場所であったと考えられる。

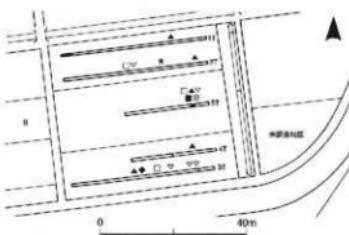


## 15. 針原西遺跡（第28図、図版18）

所 在 地 射水市黒河21-1番地外  
調 査 期 間 平成20年12月10日・11日  
調 査 面 積 対象面積: 5.846m<sup>2</sup> 発掘面積: 353m<sup>2</sup>  
調 査 原 因 仓库及び駐車場建設  
調 査 担 当 者 田中 明・金三津英則  
検 出 遺 構 近世以降: 溝1条 時期不明: 土坑1基  
出 土 遺 物 弥生土器・古代須恵器・古代土師器  
中世珠洲・近世宋銭・近世越中瀬戸  
鉄石英剥片



調 査 概 要 対象地は標高3.5mに位置する。土層は7層に細分され、上下2層の旧地表面が遺存。遺構は近世以降の溝しか確認できず、遺物の出土も散発的であることから、遺跡の縁辺部にあたり集落等が形成されなかった場所と考えられる。対象地東側(648m<sup>2</sup>)は未調査であり、掘削工事の際は工事立会が必要となる。

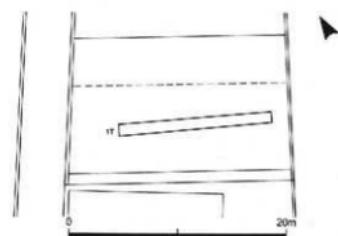


## 16. 小林遺跡

所 在 地 射水市小林232番4  
調 査 期 間 平成21年3月3日  
調 査 面 積 対象面積: 250m<sup>2</sup> 発掘面積: 14m<sup>2</sup>  
調 査 原 因 既存宅地の分筆販売  
調 査 担 当 者 田中 明・金三津英則  
検 出 遺 構 なし  
出 土 遺 物 なし



調 査 概 要 対象地は小林遺跡の南西端部で標高5mに位置する。土層は6層に細分され、上下2層の旧地表面が遺存している。遺構・遺物は確認できなかったが、平成11年度に東方約170m地点で行われた調査では、弥生時代中期から室町時代にかけての遺構・遺物が確認されている。遺跡の中心は対象地の北東側に広がるものと考えられる。



## 17. 古宮遺跡

所 在 地 射水市川口宮袋入会地字古村

3139-1番地外

調査期間 平成21年3月12日

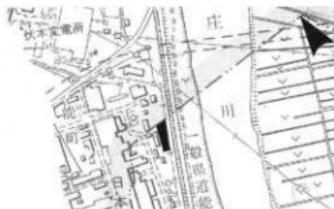
調査面積 対象面積：290m<sup>2</sup> 発掘面積：13m<sup>2</sup>

調査原因 県道付替工事

調査担当者 田中 明・金三津英則

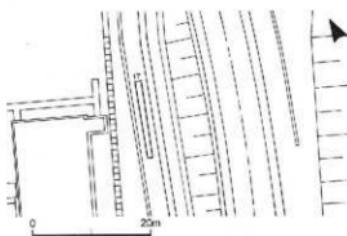
検出遺構 なし

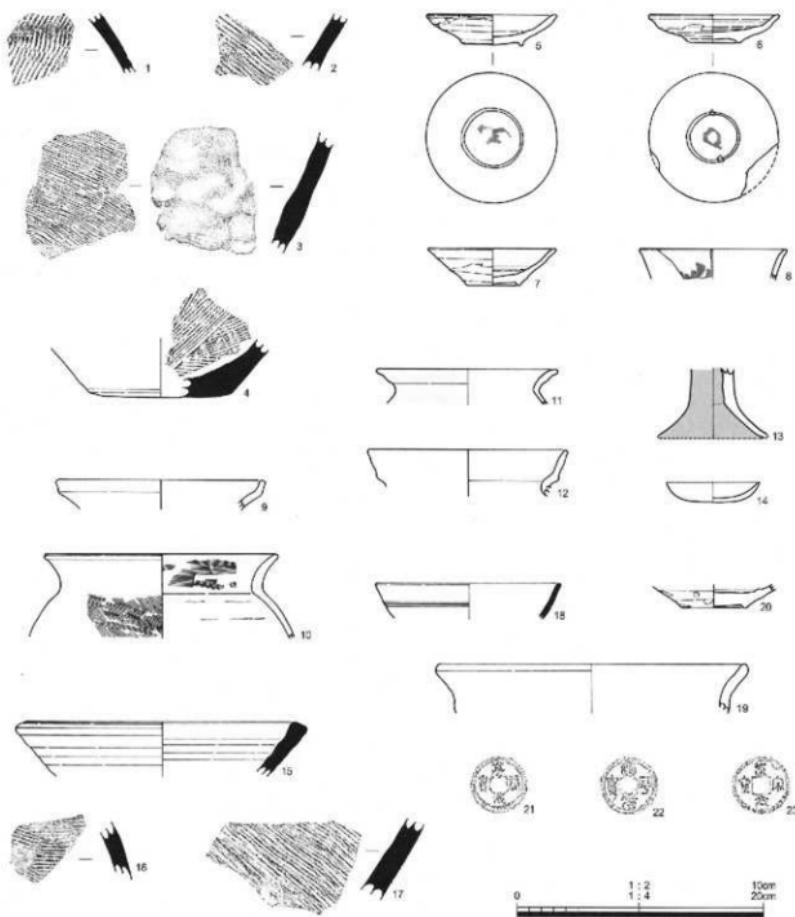
出土遺物 なし



調査概要 対象地は荒蕪地で標高3.1mに位置する。

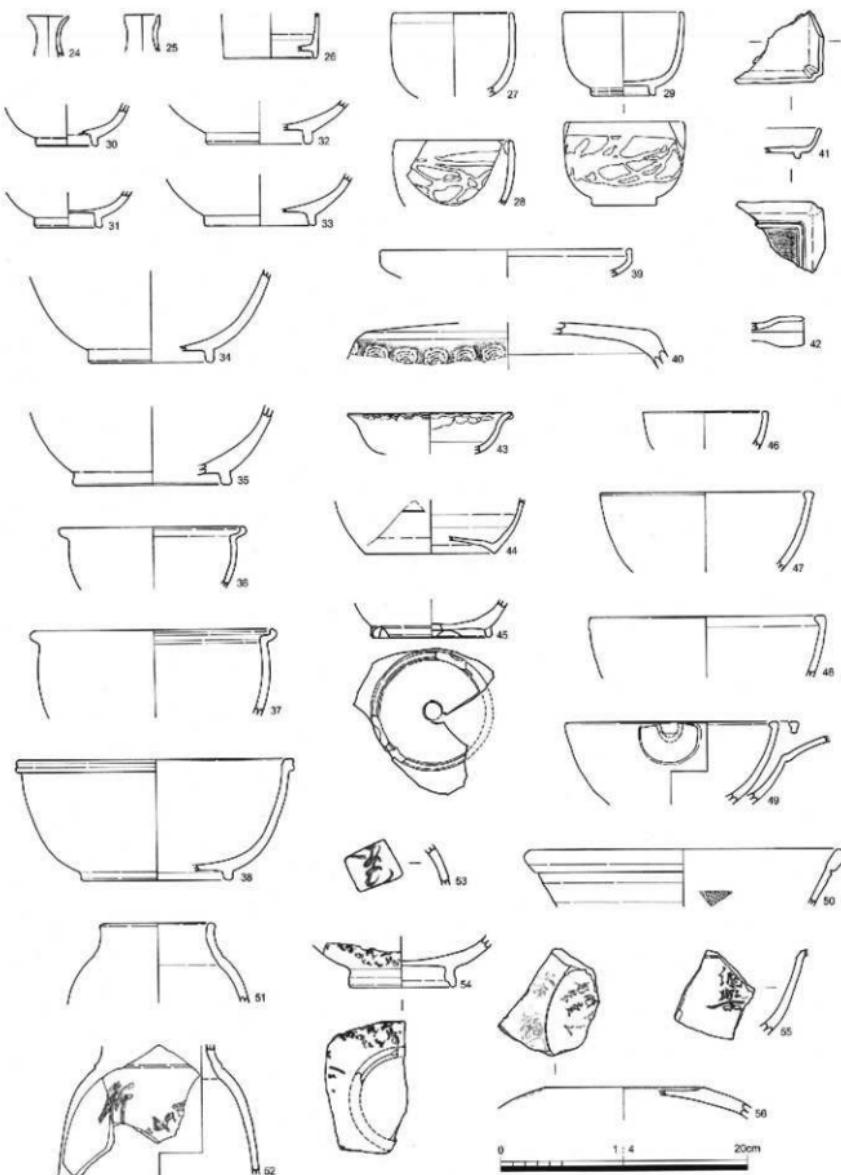
地表から深さ1.1mの掘削を行い、8層に土層を細分したが、明確な地山を確認することはできなかった。遺跡中心地は古くから工場敷地となっていたため、遺跡の情報は少ない。対象地は中世以前の庄川流路推定地に近接し、周囲より低い地形であることから、河川の影響を受けやすい土地であったと考えられる。



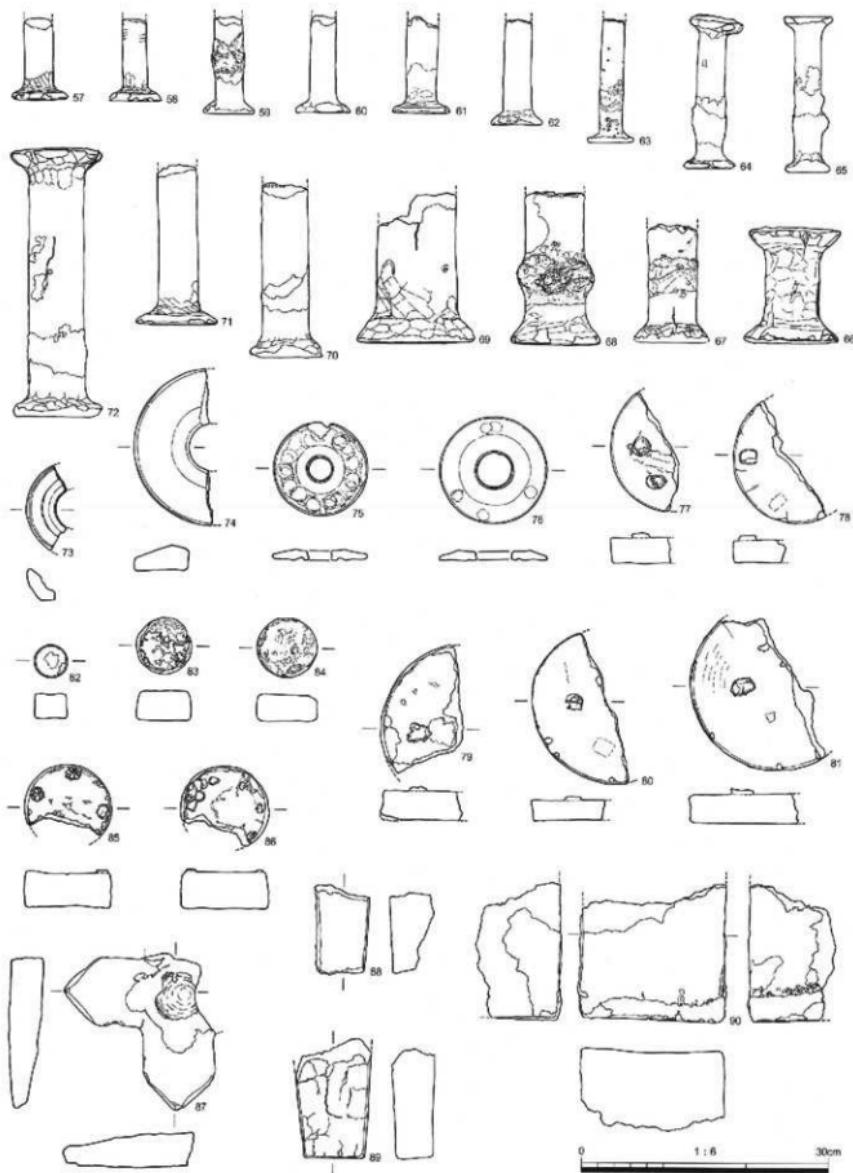


第28図 遺物実測図〔試掘調査〕 (1/4、21~23: 1/2)

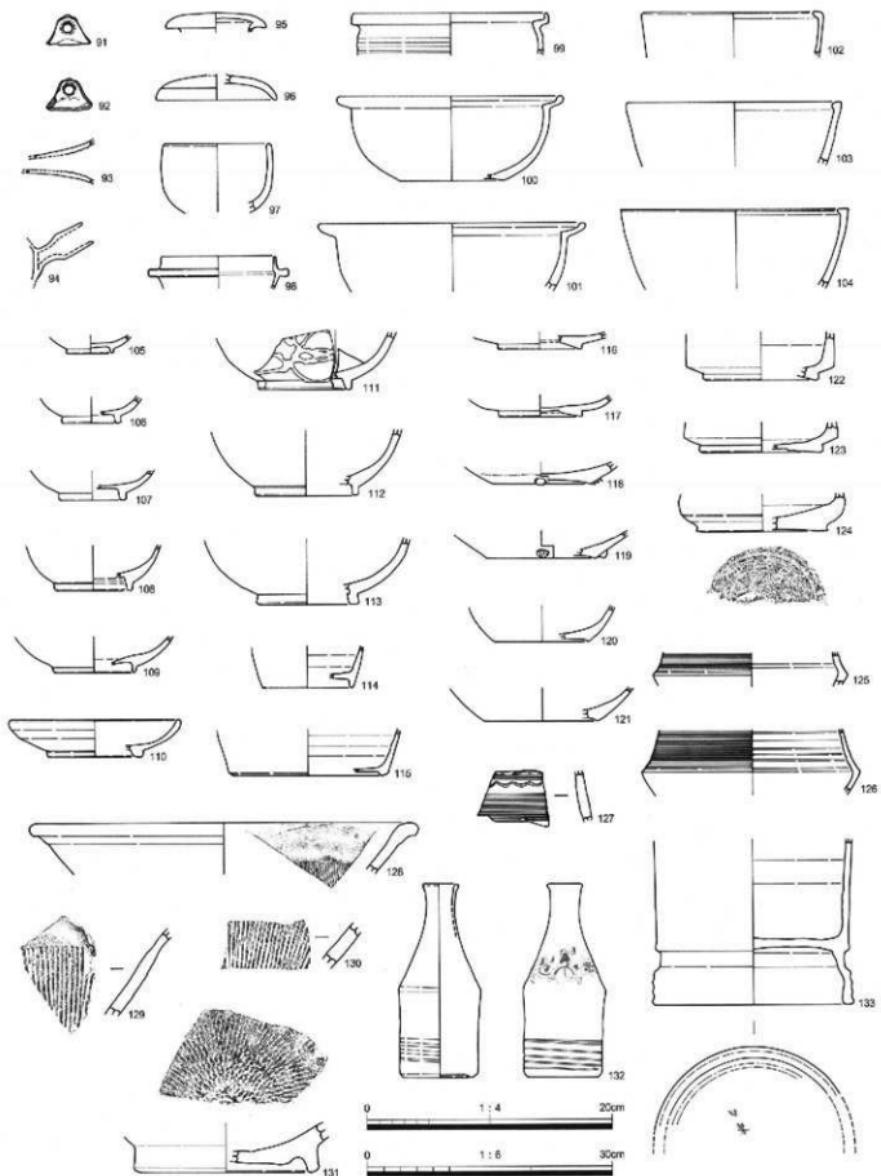
鳥取道跡 (1~8) 鶴塚村中道跡 (9~10) 姬宮道跡 (11~14) 本江宮田道跡 (15~17) 封原西道跡 (18~23)



第29図 遺物実測図【試掘調査】(1/4)  
小糸城高塚古跡 (24~56)



第30図 遺物実測図【試掘調査】(1/6)  
小杉成高相談課 (57~90)



第31図 遺物実測図 (1/4, 133:1/6)  
小杉枕箕輪塚跡 (91~133)

第8表 出土遺物觀察表（試掘調査）

回	版	No.	遺構	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考	残存量
第28回	1	3 T	珠淵	甕(壺)					鳥取遺跡	破片
	2	S K 0 3	珠淵	甕(壺)					鳥取遺跡	破片
	3	S E 0 2	珠淵	甕(壺)					鳥取遺跡	破片
	4	2 T	珠淵	片口鉢				11.3	鳥取遺跡	底1/8
	5	S E 0 3	越中瀬戸	皿	10.2	2.5	4.6		鳥取遺跡 灰釉 底部外面墨痕	完形
	6	S E 0 3	越中瀬戸	皿	10.1	2.3	3.7		鳥取遺跡 灰釉 底部外面墨痕	L15/6 底完存
	7	S E 0 3	越中瀬戸	皿	10.1	3.0	4.1		鳥取遺跡 灰釉	口3/4 底完存
	8	5 T	伊万里	碗	11.6				鳥取遺跡	口1/8
	9	2 T	秀生土器	甕	16.4				鷺塚村中遺跡	口1/12
	10	2 T	秀生土器	甕	18.7				鷺塚村中遺跡	口1/6
	11	1 T	秀生土器	甕	14.0				愛宕遺跡 外面煤付着	口1/5
	12	2 T	秀生土器	甕	15.8				愛宕遺跡	口1/7
	13	2 T	秀生土器	器台					愛宕遺跡 内外面赤彩	脚附L/5
	14	1 T	中世土器	皿	7.3	1.6			愛宕遺跡 外面煤付着	口1/2
	15	4 T	珠淵	片口鉢	21.3				本江宮田遺跡	口1/10
	16	4 T	珠淵	甕(壺)					本江宮田遺跡	破片
	17	1 T	珠淵	甕(壺)					本江宮田遺跡	破片
	18	2 T	須恵器	壺	14.8				針原西遺跡	口1/14
	19	3 T	土器	甕	24.6				針原西遺跡	口1/10
	20	5 T	越中瀬戸	皿			5.0		針原西遺跡 鉄軸	底3/4
	21	2 T	金瓦製品	銅鏡					針原西遺跡 嘉祐元寶	
	22	2 T	金瓦製品	銅鏡					針原西遺跡 治平元寶	
	23	2 T	金瓦製品	銅鏡					針原西遺跡 圣宋元寶	
第29回	24	3 T	小杉焼	徳利	3.2				高畠窯跡 銀輪	口1/4
	25	表土	小杉焼	徳利	1.7				高畠窯跡 銀輪	口1/4
	26	1 T	小杉焼				7.2		高畠窯跡 素焼き	底1/3
	27	1 T	小杉焼	碗	9.6				高畠窯跡 素焼き	口1/8
	28	4 T	小杉焼	碗	9.2				高畠窯跡 緑釉筒書茶碗	口1/5
	29	1 T	小杉焼	碗	9.4	6.9	4.9		高畠窯跡 銀輪筒書茶碗	口1/3 底完存
	30	3 T	小杉焼	碗			4.8		高畠窯跡 素焼き	底3/8
	31	1 T	小杉焼	碗			5.2		高畠窯跡 素焼き	底はまだ完存
	32	3 T	小杉焼	碗			8.3		高畠窯跡 素焼き	底1/5
	33	表土	小杉焼	碗			8.7		高畠窯跡 素焼き	底3/16
	34	表土	小杉焼	鉢			9.7		高畠窯跡 素焼き	底1/4
	35	3 T	小杉焼	鉢			12.4		高畠窯跡 素焼き	底1/6
	36	表土	小杉焼	鉢	14.5				高畠窯跡 鉄輪	口1/4
	37	表土	小杉焼	鉢	19.1				高畠窯跡 鉄輪	口1/8
	38	表土	小杉焼	鉢	22.0	9.9	11.8		高畠窯跡 鉄輪	口1/8
	39	表土	小杉焼		19.9				高畠窯跡 緑釉	
	40	1 T	小杉焼	椅子	30.0				高畠窯跡 緑釉	破片
	41	4 T	小杉焼	角小皿		2.4			高畠窯跡 鉄輪型押し	口1/5
	42	1 T	小杉焼	急須					高畠窯跡 急須の柄	破片
	43	表土	小杉焼	皿	12.9				高畠窯跡 緑釉	口1/6
	44	1 T	小杉焼	蓋			10.4		高畠窯跡 緑釉	底2/5
	45	3 T	小杉焼	植木鉢			9.5		高畠窯跡 鉄輪	底3/4
	46	表土	小杉焼	鉢	9.9				高畠窯跡 素焼き	口1/8
	47	1 T	小杉焼	鉢	16.5				高畠窯跡 鉄輪	口1/3
	48	4 T	小杉焼	鉢	18.8				高畠窯跡 素焼き	口1/10
	49	表土	小杉焼	片口	16.6				高畠窯跡 銀輪片口	口1/5
	50	表土	小杉焼	すり鉢	24.9				高畠窯跡 鉄輪	口1/12
	51	1 T	小杉焼		8.4				高畠窯跡 素焼き	口1/6 体2/7
	52	1 T	小杉焼				8.0		高畠窯跡 素焼き 外面墨書	体上部1/6
	53	4 T	小杉焼						高畠窯跡 素焼き 外面墨書	破片
	54	4 T	小杉焼				8.0		高畠窯跡 素焼き 外面墨書	底7/16

口：口縁部 底：底部 体：体部 壺：壺部 脚：脚部

第9表 出土遺物觀察表(試掘調査)

図版	No.	遺構	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考	残存量
第29図	55	1 T	小杉焼					高煙窯跡 素焼き 外面墨書き	破片
	56	3 T	小杉焼					高煙窯跡 素焼き 墨書き「酒某」	破片
	57	3 T	小杉焼	陶柱				6.7 高煙窯跡 自然釉付着	
	58	表土	小杉焼	陶柱				6.1 高煙窯跡	
	59	1 T	小杉焼	陶柱				5.6 高煙窯跡 自然釉付着	
	60	表土	小杉焼	陶柱				6.0 高煙窯跡 自然釉付着	
	61	表土	小杉焼	陶柱				6.6 高煙窯跡 自然釉付着	
	62	3 T	小杉焼	陶柱				5.8 高煙窯跡 自然釉付着	
	63	4 T	小杉焼	陶柱				5.2 高煙窯跡 自然釉付着	
	64	4 T	小杉焼	陶柱		18.5		5.3 高煙窯跡 自然釉付着	完形
	65	表土	小杉焼	陶柱				4.5 高煙窯跡 自然釉付着	完形
	66	3 T	小杉焼	陶柱		14.0		11.3 高煙窯跡 上下に孔各2箇所	完形
	67	3 T	小杉焼	陶柱				8.8 高煙窯跡 底部・側面に孔1箇所	
	68	1 T	小杉焼	陶柱				10.1 高煙窯跡 上下・側面に孔	
	69	4 T	小杉焼	陶柱				13.8 高煙窯跡 底部・側面に孔	
	70	4 T	小杉焼	陶柱				7.3 高煙窯跡 自然釉付着	
	71	1 T	小杉焼	陶柱				9.6 高煙窯跡	
第30図	72	4 T	小杉焼	陶柱		32.3		9.0 高煙窯跡 底部・側面に孔	完形
	73	1 T	小杉焼	輪ハマ	11.8	3.8		高煙窯跡	1/3
	74	4 T	小杉焼	輪ハマ	18.7	3.1		高煙窯跡	4/9
	75	4 T	小杉焼	輪ハマ	11.2	1.3		高煙窯跡 上面トチン痕	ほぼ完形
	76	4 T	小杉焼	輪ハマ	12.9	1.3		高煙窯跡 上面トチン痕	完形
	77	4 T	小杉焼	ハマ	16.0	3.0		高煙窯跡 トチン2箇所	1/3
	78	3 T	小杉焼	ハマ	16.0	2.8		高煙窯跡 トチン1・痕跡1箇所	
	79	表土	小杉焼	ハマ	20.0	3.5		高煙窯跡 トチン1箇所	1/4
	80	4 T	小杉焼	ハマ	19.0	2.4		高煙窯跡 トチン1・痕跡1箇所	1/2
	81	1 T	小杉焼	ハマ	20.5	3.5		高煙窯跡 トチン1箇所	1/2
	82	表土	小杉焼	ハマ		3.8		高煙窯跡	完形
	83	表土	小杉焼	ハマ		6.6		高煙窯跡 自然釉付着	ほぼ完形
	84	4 T	小杉焼	ハマ		7.1		高煙窯跡 自然釉付着	完形
	85	1 T	小杉焼	ハマ		10.3		高煙窯跡 トチン3箇所	5/8
	86	1 T	小杉焼	ハマ		10.6		高煙窯跡 トチン5箇所	3/4
	87	表土	小杉焼	四ツ羽根				高煙窯跡 自然釉付着	1/2
	88	1 T	小杉焼	焼瓦				高煙窯跡	
	89	表土	小杉焼	焼瓦				高煙窯跡 自然釉付着	
	90	表土	小杉焼	焼瓦				高煙窯跡 自然釉付着	
第31図	91		小杉焼					箕輪窯跡 両耳付壺の耳 素焼き	
	92		小杉焼					箕輪窯跡 両耳付壺の耳 素焼き	
	93		小杉焼	急須				箕輪窯跡 急須の口 素焼き	
	94		小杉焼	急須蓋				箕輪窯跡 急須の持ち手 緑釉	
	95		小杉焼	蓋蓋				箕輪窯跡 茶壺の蓋 素焼き	口1/4
	96		小杉焼	蓋蓋	9.6			箕輪窯跡 茶壺の蓋 素焼き	口1/8
	97		小杉焼	碗	8.4			箕輪窯跡 素焼き	口1/16
	98		小杉焼		9.1			箕輪窯跡 素焼き	口1/6
	99		小杉焼	鉢	15.5			箕輪窯跡 鉄粒	口1/11
	100		小杉焼	鉢	17.7			箕輪窯跡 鉄粒	口1/4 底1/6
	101		小杉焼	鉢	21.1			箕輪窯跡 素焼き	口1/10
	102		小杉焼	鉢	13.2			箕輪窯跡 素焼き	口1/8
	103		小杉焼	鉢	17.1			箕輪窯跡 鮎釉	LJ1/11
	104		小杉焼	鉢	18.4			箕輪窯跡 素焼き	口1/6
	105		小杉焼	碗			3.6	箕輪窯跡 素焼き	底完存
	106		小杉焼	碗			4.5	箕輪窯跡 素焼き	底1/2
	107		小杉焼	碗			5.1	箕輪窯跡 素焼き	底7/16
	108		小杉焼	碗			6.1	箕輪窯跡 素焼き	底1/4

口：口縁部 底：底部 体：体部 环：环部 腿：脚部

第10表 出土遺物観察表

図版	No.	遺物	種類	断面	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考	残存率
	109	小杉焼		碗			6.4	瓦輪窓跡 鉢袖	底1/5
	110	小杉焼		皿			7.8	瓦輪窓跡 鉢袖	1/5
	111	小杉焼		碗			7.3	瓦輪窓跡 鉢袖簡青茶碗 トチン付着	底1/4
	112	小杉焼		碗			8.1	瓦輪窓跡 素焼き	底3/16
	113	小杉焼		碗			8.3	瓦輪窓跡 素焼き	底3/8 体1/10
	114	小杉焼	徳利				7.2	瓦輪窓跡 素焼き	底1/4
	115	小杉焼	瓶				11.9	瓦輪窓跡 素焼き	底3/16
	116	小杉焼	皿				6.8	瓦輪窓跡 素焼き	底1/3
	117	小杉焼	皿				6.8	瓦輪窓跡 素焼き	底3/8
	118	小杉焼	皿				7.8	瓦輪窓跡	底1/2
	119	小杉焼	皿				8.8	瓦輪窓跡 素焼き	底1/6
	120	小杉焼	皿				7.6	瓦輪窓跡 素焼き	底5/16
第31図	121	小杉焼	皿				9.2	瓦輪窓跡 素焼き	底3/16
	122	小杉焼	皿				8.7	瓦輪窓跡 素焼き	底1/4
	123	小杉焼	皿				9.5	瓦輪窓跡 素焼き	底1/4
	124	小杉焼					10.6	瓦輪窓跡 鉢袖 系切り痕	底1/3
	125	小杉焼	徳利					瓦輪窓跡 千段巻大徳利 素焼き	破片
	126	小杉焼	徳利					瓦輪窓跡 千段巻大徳利 素焼き	1/8
	127	小杉焼						瓦輪窓跡 沈線文 素焼き	破片
	128	小杉焼	すり鉢		30.1			瓦輪窓跡 鉢袖 卸目	口1/8
	129	小杉焼	すり鉢					瓦輪窓跡 鉢袖 卸目	破片
	130	小杉焼	すり鉢					瓦輪窓跡 鉢袖 卸目	破片
	131	小杉焼	すり鉢				13.7	瓦輪窓跡 鉢袖 卸目	底1/4
	132	小杉焼	徳利		2.6	15.8	5.6	瓦輪窓跡 斧袖 鉢袖 梅鹿絵	ほぼ完形
	133	小杉焼	火鉢				22.9	瓦輪窓跡 鉢袖 底部外面墨書き	底1/2

口：口縁部 底：底部 体：体部 壁：坏部 脚：脚部

## 第2節 五歩一古墳群現況測量調査

### 第1項 調査に至る経緯

五歩一古墳群は、下条川の左岸、標高約41mの丘陵上に位置する。この古墳群は、富山県教育委員会の遺跡分布調査によって昭和51年に発見され、前方後方墳（1号墳）及び2基の円墳で構成される、県内でも最古の一組となる可能性が指摘された。当時、古墳群が位置する丘陵は、地権者による開発計画が進行していたが実施には至らず、詳細な範囲確認調査等も行われることなく今日に至っていた。

平成19年8月、地権者から、丘陵東裾部での開発事業計画の照会があり、射水市教育委員会において事前の試掘確認調査を実施したが、遺構の存在は確認できなかった。この事業も開発実施に至らなかったが、同時に、近い将来に丘陵全体を何らかの形で利活用したいこと、古墳の保護を前提として考えたいため、当該地の保存をする正確な範囲を知りたいことなどの要望があった。

具体的な開発計画はなかったが、古墳の保存と今後の開発計画との調整を図るために、保護を要する範囲を明示できる資料が早急に必要となり、同20年度に現況測量調査を実施することとなった。



第32図 五歩一古墳群及び周辺古墳分布図

### 第2項 調査の方法

測量調査は、専門業者に測量図化を委託して実施した。測量範囲は、未確認の古墳や遺構が存在する可能性があったため、丘陵頂部の全域及び丘陵中央に位置する谷部までを対象に含めた。また、古墳の付属施設が遺存する可能性もあることから、現況測量図と遺構図の2種類を作成することとした。

測量は、トータルステーションを用いた三次元水準測量によって、等高線25cm間隔の地形測量を行い、遺構については全ての変化点を測定し、地形測量点とは別に整理した。

現地測量は、2月18日から3月10日まで実施した。現地測量に先立つ平成21年2月17日には、富山県考古学会西井龍儀氏の協力を得て、受託業者と射水市教育委員会の三者による現地踏査を実施。古墳及び周辺施設の有無の可能性について調査し、測定点の確認及び測点密度について現地にて協議を

行った。3月16日には、再度同氏の協力を得て、測定点及び測量素図を現地において地形と照合し、不足部分の再測定を経て3月25日、縮尺200分の1の測量図及び遺構図が完成した。

### 第3項 調査の結果

測量調査により、これまで知られていた3基の古墳に加え、新たに1基の円墳を確認した。

1号墳は、丘陵北端部に位置する前方後円墳である。前方部を北へ向け、南北方向に主軸をとる。全長は約43.3mで、前方部幅約14.5m、くびれ部幅約12m、後円部直径約28.5m、前方部は不整形ながらバチ状に広がる。墳丘裾からの高さは、前方部が1.8~2.0m、後円部が3.7~4.4mとなり、標高値で2.6mの比高差をもつ。墳丘西側のくびれ部付近には、幅約3.5m、長さ約3.5mの張り出しが認められる。後円部頂部では、墳丘上的一部が南西へ流出するが、全体的に遺存状態は良好である。1号墳は、これまで前方後方墳と考えられていたが、後円部を廻る等高線がほぼ正円形に展開していることから、前方後円墳であることが明らかとなった。

墳丘周囲の標高約40.0~41.0mラインには、テラス状の平坦面が存在する。平坦面は、北側では東部が突出した形となり、後円部側が前方部側より約1m高くなる。後円部南側にある、土地境界線と考えられる東西溝の北側では、南東から延びる丘陵尾根の切断が認められ、後円部と平坦面の造成を兼ねた地形の変化が行われたと考えられる。また、この平坦面の北~東部にも、標高約36.2~40.0mラインにおいて、幅約3~5mの平坦面が廻っており、上下二段の平坦面を構成する。双方共に近年まで畠地として利用されており、耕作に伴う地形の変化が認められる。しかし、上段の平坦面については1号墳の墳丘と一緒に存在しており、古墳築造時の造成と考えられる。

2・3号墳は、1号墳の約40m南東の丘陵東斜面付近で南北に隣接して存在する、共に直径約14mの円墳であり、2・3号墳間及び3号墳の南には、両古墳の区画と考えられる丘陵東斜面を切り込む溝状の跡みが確認できる。2号墳は、高さ約0.7mで、墳丘上面が削平を受けており、主体部は失われている可能性が高い。南側に隣接する3号墳は、高さ約1.5mを測り、墳丘上面は、直径約2.0m、深さ約0.4mにわたって陥没している。過去に、この陥没部の堆土から二重口縁の土器片が採取されたと伝えられており、主体部を損傷している可能性がある。2・3号墳共に丘陵東斜面への墳丘土の流出が認められる。

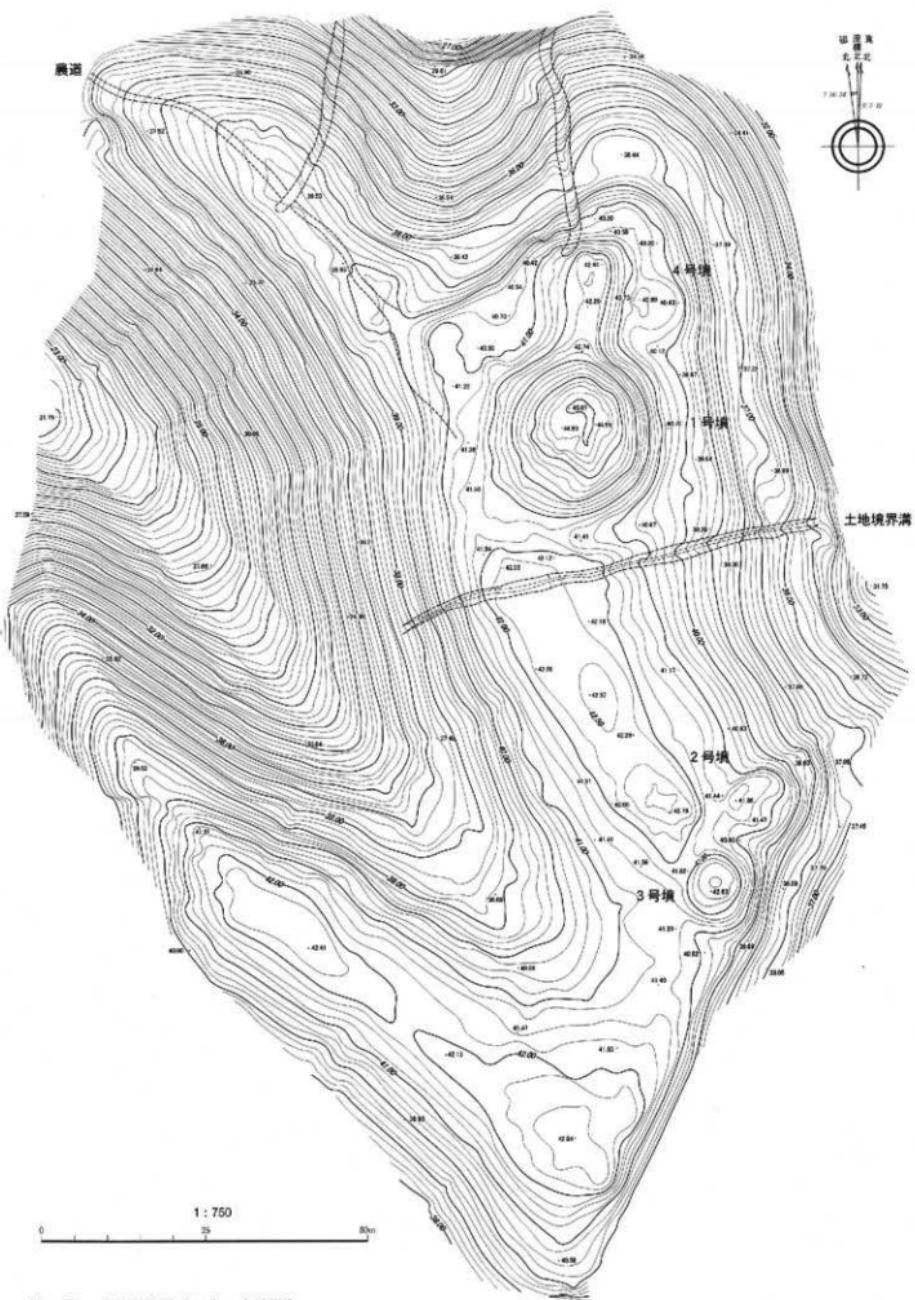
4号墳は、1号墳の前方部東側において今回新たに確認した古墳である。微細な傾斜変化があり、現地視認も困難であったが、円形に廻る等高線が明瞭に現れ、現地形と測量図との整合が確認できた。また1号墳に付随する平坦面上での地形変化であることから、自然地形の可能性は低く、墳丘の大部分を失い、僅かに基部のみが残る状態ではあるが、2・3号墳と同等規模の円墳と判断した。

五歩一古墳群が立地する丘陵尾根は、丘陵南端で分岐し間に谷を形成する。古墳は全て北側に延びる丘陵尾根上に築かれており、西側の丘陵尾根上では古墳等の人の為の痕跡は確認できなかった。

今回の測量調査によって、五歩一古墳群の範囲及び構成が明らかとなり、県内有数の規模をもつ五歩一古墳（1号墳）が前方後円墳と確定した点など、特筆すべき成果が得られた。古墳の年代等については、今後の調査を待たねばならないが、下条川流域古墳群の形成と首長墓の消長について、新たな視点での検討が必要となるだろう。

### 参考文献

- 西井龍儀他 1999『富山平野の出現期古墳』《発表要旨・資料集》富山考古学会  
西井龍儀他 1993『射水丘陵地域研究報告（3）』『大境』第15号 富山考古学会



第33図 現況測量図【五歩一古墳群】

## 第3節 日宮城址現況測量調査

### 第1項 調査に至る経緯

日宮城址は、射水市日宮地内の丘陵端部に築かれた中世の山城である。城が位置する、現在の丘陵北側縁辺部は急傾斜地となっており、長年の風雨の影響によって、オーバーハング状を呈する崩落危険箇所が生じている。土砂災害の危険性が年々高まる中で、射水市及び近隣住民によって、災害未然防止工事についての検討が進められてきた。

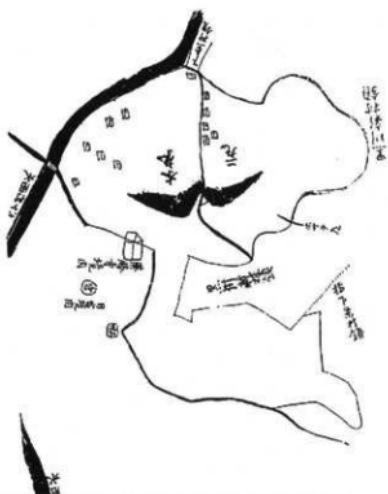
工事の実施に際しては、城址の保護措置が必要となるが、詳細な測量が未実施のため保護を要する範囲が明確でない現状にあり、具体的な工事計画の策定が困難となっている。

このような経緯から、射水市教育委員会では、緊急に現況測量調査を実施して、城址の正確な範囲を確認し保存を図る資料を備えることとした。

### 第2項 調査の方法

現況測量調査は、専門業者に測量図化を委託して実施した。災害未然防止工事実施時の機材その他の搬入経路等によって、丘陵全体に影響を及ぼす可能性があるため、測量調査対象範囲は本丸が所存する丘陵全域とし、工事計画との照合のため、隣接道路まで含めた。ただし、丘陵南方の一部については、過去に現況測量が実施済のため測量対象外とした。成果図は、全体の現況測量図に加え、既存縄張図との照合のための遺構図を作成した。

測量は、トータルステーションを用いた三次元水準測量によって、等高線25cm間隔の地形測量を行い、遺構については全ての変化点を測定し、地形測量点とは別に整理した。現地測量は、平成21年3月9日から3月21日まで実施した。これに先立つ同年3月2日、中世城館研究者高岡徹氏の協力を得て現地踏査を実施し、各遺構の位置確認と測定点の確認及びその密度について現地にて協議した。19日には、再度の現地踏査を実施、測定点及び測量素図を現地において遺構・地形と照合した。



第34図 「日宮新村見取絵図」及び周辺旧地形図



左：「日宮新村見取絵図」（財團法人高樹会蔵）  
右：昭和30年代の旧地形図（1:5,000）

### 第3項 調査の結果

測量調査により、諸説あった城郭関連遺構の範囲及び地形の全容を確認することができた。特に、本丸推定地への3箇所の出入り口や、本丸推定地北側の狭小な平坦面の存在、丘陵南端に残る土壘状の地形の形状などの遺構の細部形状が明確となった。また、丘陵北西斜面部での崖面崩落や開発等による遺構の消滅及び遺存範囲を把握することができた。

なお、測量調査の過程で、平成14年度の発掘調査時に検出された、日宮城築城前に存在した弥生時代の大溝の痕跡を3箇所で確認した。

### 第4項 神保氏と日宮城

高岡 徹

#### 1 日宮城の位置と性格

日宮城は越中中央部の射水平野に臨む、標高約21~27mの丘陵端部に築かれた中世の城郭であり、戦国期の史料には「火宮城」と表記される。城跡の約250m北方には越中の主要交通路であった北陸街道が東西に走る他、近くの黒河から越後郡の長沢を経て飛驒に至る街道も存在した。一方、城下集落である二ノ井を流れる下条川によって、日本海に面した港町放生津とも結ばれていた。すなわち、日宮は越中中央部にあって、東西・南北の交通路が交差する要衝に位置していた。江戸時代の書上などには、神保長職や同源七郎、同孫七郎、同孫太郎などの城主名があげられている。

神保氏は室町・戦国期に射水・越後二郡の守護代を務めた有力国人である。その最盛期は16世紀半ばの長職の頃で、当初は富山城を本城とし、東の芦原寺から西の氷見にかけての地域を支配下に置いた。その支配領域内の要衝である放生津、守山、増山、滝山などには一族や重臣の拠る支城があり、それぞれ郡支配の拠点を形成した。

城郭としての日宮城は郡支配の拠点としては小さいが、有力家臣（寺嶋・小島氏）の居館がそばに置かれ、付近の橋下条に出城とも言うべき館が存在したことから、拠点城郭としての性格を十分に備えている。神保氏の支配領域内にあっては、本城の富山と西の支城群（放生津、守山、増山）をつなぐ中継拠点としての役割を果たしていたとみられる。橋下条の館は北陸街道沿いの平地にあって、周囲に堀をめぐらした単郭の居館であり、江戸時代の書上などには館主として神保孫右衛門の名が伝えられている。現在、その正確な位置は不明である。

#### 2 日宮城の構造

真言宗薬勝寺の北側に連なる丘陵を「城山」と呼んでいるが、ここに主郭（本丸に相当）が存在した。江戸時代の書上類には、日宮城を構成する郭として本丸・南ノ丸（越中古城記）あるいは本丸・二ノ丸・三ノ丸（越中古城館跡記）といった名称をあげている。これらの郭の呼称は江戸時代のものであり、城の存在した戦国期の呼称は不明であるが、前記の記事から丘陵上に複数の郭が存在したことが知られる。また、城の背後にあたる東側から南側にかけては深い沼田によって守られていたが、現在では埋め立てにより住宅団地や道路に変わっている。

「越中古城記」は本丸の規模を東西21間・南北7間とし、ほぼ城山丘陵最上段の規模（40m×17m）に近いことから、この最上段一帯を本丸とみなしてよい。これに対し、二ノ丸以下の郭の所在地は明白ではないが、一つの手がかりとして、城跡付近を描いた江戸時代の「日宮新村見取絵図」に「本丸」と「二丸」が見出される。まず、本丸は前記の丘陵最上段一帯とみてよいが、二ノ丸はどうか。

筆者は以前、同絵図中の本丸・二ノ丸間の道を現在の丘陵北側を通る道とみなし、二ノ丸は城山の東側に隣接していた小丘陵（過去に消滅）と推測した（『小杉町史』、1997年）。しかし、最近に

なって前記の絵図が比較的正確に当時の状況を示すことに気づいた。そのように見れば、本丸・二ノ丸間の道は本丸推定地の東側を通り、城山丘陵の南端に降りていたと考えられ、絵図に記す二ノ丸は本丸推定地東側の平坦面とみなすことができる。ここで以前の考えを訂正しておきたい。

さて、近年の発掘調査により新たな成果が得られた。調査の結果、本丸推定地を中心に展開する切岸や平坦面の原形が弥生時代から存在したこと、さらに本丸推定地東側の切岸直下にも防御のための空堀（大溝）が設けられていたことが明らかとなった。今回の測量調査では、この人溝の痕跡が、本丸推定地の下をめぐる平坦面外縁部でも3箇所で確認できた。このことは弥生時代に当丘陵の中腹が切岸と空堀による防衛施設によって守られていたことを示すと考えられる。

空堀などの防衛施設を備えた弥生時代の遺跡を高地性集落と呼ぶが、当地の構造もその一種と考えられる。本県の場合、これまで呉羽山丘陵の白鳥城（現富山市）や天神山城（現魚津市）などに報告例があり、いずれも中世の山城跡と重なる点が興味深い。とりわけ中世において基本的な防衛施設である堀や切岸などが、すでに弥生時代より同様の施設として認識されていた点が留意される。日宮についても、中世の城郭以前に弥生時代の高地性集落が存在したわけであり、長い年月を経ても同じ場所が軍事的な要地として選ばれたことに注目したい。そして中世の築城にあたり、弥生時代の造成地形（切岸・平坦面）を城郭の拠点に利用する形で、それをベースに築城されたとみられる。同様の例は白鳥城にも見られ、本丸をめぐる空堀が弥生時代の溝を改修する形で再利用されている。

なお、残る三ノ丸や南ノ丸とはどことか。今のところ明白ではないが、本丸と二ノ丸の推定した位置からすれば、同じ丘陵上で本丸の南に続く平坦面などがその跡とみられよう。以前は薬勝寺境内の奥の高台を想定したが、薬勝寺の境内はむしろ家臣の寺鷲・小鳩氏の屋敷跡と考えたい。

### 3 日宮城をめぐる戦い

ところで、肝心の日宮城が築城されたのはいつなのか。今のところ、そのことを物語る史料は存在しない。しかし、戦国期に神保氏の最盛期を現出した長職が天文12年（1543）に富山へ進出・築城していることから、遅くとも天文年間には築かれていたとみられる。神保氏の当主長職と日宮城との関連を示すものとして、弘治2年（1556）9月、長職が近くの黒河村専福寺に下した禁制がある。長職は永禄5年（1562）上杉謙信に降り、その旗下となつた。その後は増山城（現砺波市）を本拠とし、一向一揆を攻めている。こうした動きは上杉への対応をめぐる家の分裂と長職・長住父子の対立を招いた。

元亀3年（1572）武田信玄は西上作戦にあたり、上杉謙信を越中戦線に釘付けにする目的で本願寺に上杉攻撃を依頼した。同年5月、頼如は金沢御堂の坊官杉浦玄任率いる加賀一揆勢を越中へ進攻させた。当時、日宮城は上杉方の最前線拠点に位置し、神保長職の旧臣、小鳩職鎮・水越職勝・安藤職張・神保覺広が守っていた。長職はこの年の初めに没したとみられ、親上杉・反上杉の二派に分裂していた家臣団はそれぞれの道を歩み始める。小鳩らを中心とする前者は日宮城に入って上杉勢力圏の西端を固め、寺鷲らを中心とする後者は、守山城の神保氏張と結んで増山城などに拠り、一向一揆との連携を図ったとみられる。こうした情勢下で一揆勢が上杉攻撃に向けて動き出したのである。

この年の5月から6月にかけては一向一揆の東進を迎える、日宮城が極めて緊迫した状況に追い込まれた時期であり、当城が一次史料に登場する唯一の時期でもある。5月23日、小鳩職鎮らの城将は急を告げる知らせを新庄城（現富山市）に駐留する鰐坂長良に送っている。鰐坂は河田長親と共に越中に在番する上杉勢の統括者である。それによると、「加賀の…一揆勢が河上五位庄に着陣するのは確実であり、すぐに越後からの援軍が遅れぬよう注進していただきたい。（こちらからも）明日には春日山へ飛脚を走らせ、報告するつもりである」としている。

日宮城からの知らせを受け、翌24日、新庄城の鶴坂からの注進が越後春日山へなされている。一揆勢の東進開始は6月半ばのことである。この間、日宮城からは飛脚が度々新庄城へ走り、情勢を刻々と報せたはずである。さらに「後詰が遅れるようならば、せめて五福山へ人数を上げて支援してもらいたい」との要請が新庄城へもたらされた。五福山とは呉羽丘陵の最高峰（標高145m）を指し、後世に白鳥城と呼ばれた山城があった。古くから越中中央部の軍事拠点として利用された所である。

要請を受け、上杉勢を統括する鶴坂長戦と河田長親が協議し、五福山へ支援の人数を上げたのは6月15日であった。ところが、五福山へ思いがけず一揆の大軍が攻めかかってきた。上杉方は懸命に防戦したものの退却のやむなきに至り、神通川の渡し場で一揆勢の追撃を受け、ついに敗北を喫した。上杉勢の中にあった三本寺定長の部隊では、追いすがる一揆勢のため野本玄蕃允・四月一日新右衛門尉・木村善介を始めとして二十人余りが討死したという。上杉方としては思わず敗北であった。

一揆勢の五福山急襲による上杉方の敗北は、日宮城の守将が一揆方と和談の上、すでに城を明け渡して退去していた事実を、上杉方に連絡しなかったことによる。6月17日付けで鶴坂が直江景綱へ送った書状によれば、日宮城将が和談の上、15日から石動山へ退去しておりながら、そのことを上杉方に隠していたこと、そのため一揆方は後の心配もなく一気に攻めかかってきたことを述べている。

一方、退去した守将の人、小島職鎮は16日付けで鶴坂に城明け渡しの事態について謙信への取り成しを頼んでいる。そして自らの身上についても、何分にも謙信の仰せ次第であると長まっている。詳しい状況は不明であるが、小島らが上杉への急使を仕立てたものの、一揆方の封鎖線に阻まれ果たせぬ内に五福山への攻撃が開始されたとも考えられる。

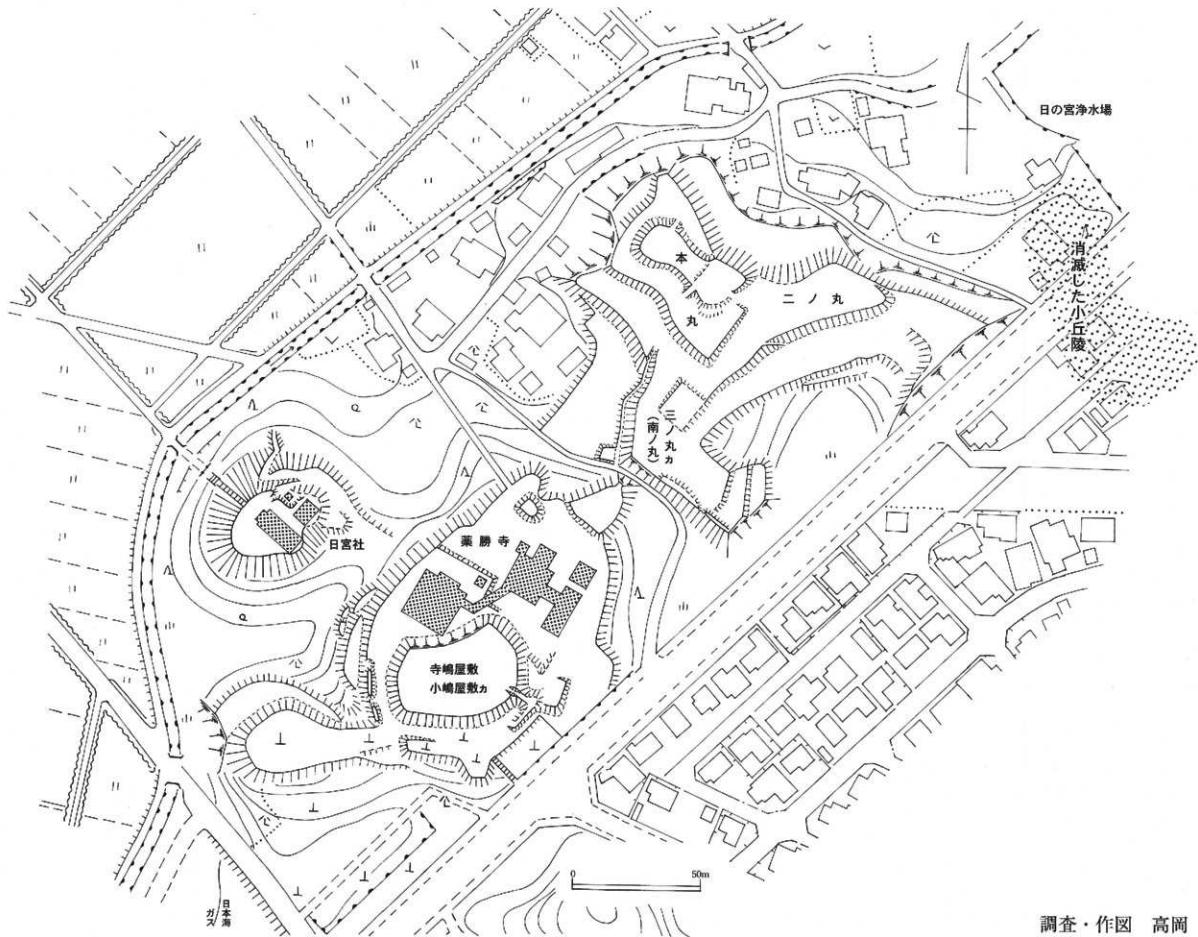
いずれにせよ、五福山と神通川渡し場での勝利に乘じ、一揆方はそのまま富山城を占拠する。これに対し謙信は自ら越中へ出陣し、以後、一揆方との長期の対陣が続くのである。それはまた信玄が望んだ事態でもあったと言える。このように元亀3年から翌年にかけて富山城をめぐる戦いは、日宮城がその発端となつたのであり、越中戦国史の中での大きな舞台の一つとして位置づけられる。

#### 4 神保長住と日宮城

ところで、日宮落城後に注目すべき史料がある。元亀3年10月28日付けで神保總三郎長国が日宮東方の黒河専福寺の百姓源右衛門を専福寺被官人の扱いとし、公用等諸役の免除を認めたものである（専福寺文書）。元亀3年の10月と言えば、夏以来一向一揆勢が富山城を占拠し、謙信と対陣を続けていた時期にあたる。日宮城にはすでに述べたように、6月半ばまで上杉方に属する小島職鎮らが在城していたが、一向一揆の来攻に際し、和談のうえ退去している。その後、神保長国が日宮城にあって前記の下知状を発しているとすれば、長国はこの時反上杉方の立場に立っていたとみなせる。興味深いことに、この長国はのちの天正5年2月に倉垣庄内の打出西町の地を京都の成就院に寄進している。しかも、その寄進は長國の越中還住を祈念したものなのである。

つまり、長国は越中が謙信によって制圧されるそれ以前に国外に出て京都に上っていたと考えられる。神保氏の中でこのような境遇を送った者と言えば、長戰の子で父と不和になり、越中から京都に出た長住がいる。そうであれば、この長国こそ謙信没後の天正6年4月、織田信長の後援を受けて越中への帰国を果たした神保越中守長住にあたると考えられる。この点は最近の久保尚文氏の研究成果を受け（久保尚文2008『山野川渓の中世史』）、以前『小杉町史』に書いた内容を若干改めたわけであるが、そのように見ていくなら、前記の専福寺の史料は、反上杉の立場に立つ長住（長國）が一揆方の落とした日宮城に一時拠り、黒河など周辺地域を支配していた状況を示すものとして注目できそうである。とはいえ、その状況は長続きせず、やがて一揆方の弱体化に伴い、長住は京都へ逃れることになったのであろう。





調査・作図 高岡 徹



第36図 現況測量図【日宮城址】(1:1,000)  
この現況図は、平成13年度測量図と平成20年度測量図を合成したものである

高島 A 遺跡〔1 地区〕 図版 1

1. 造構全景(西から)



2. 溝SD02E-E'  
(北から)

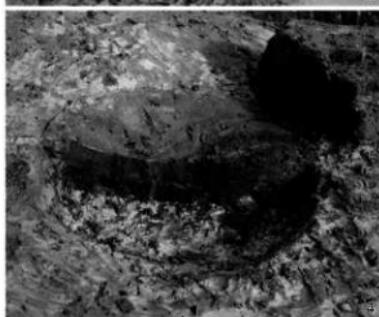


3. 土坑SK01  
(西から)



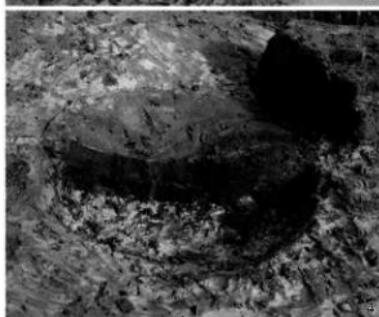
4. 土坑SK03

(西から)



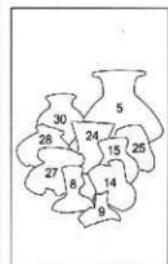
5. 溝SD02(北から)

遺物出土状況

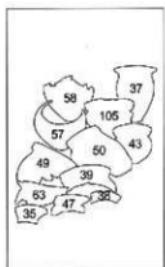


図版2 高島A遺跡〔1地区〕

出土遺物  
土器(1地区)  
溝SD02

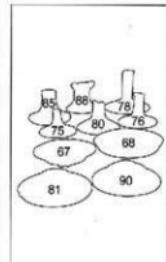


出土遺物  
土器(1地区)  
溝SD02



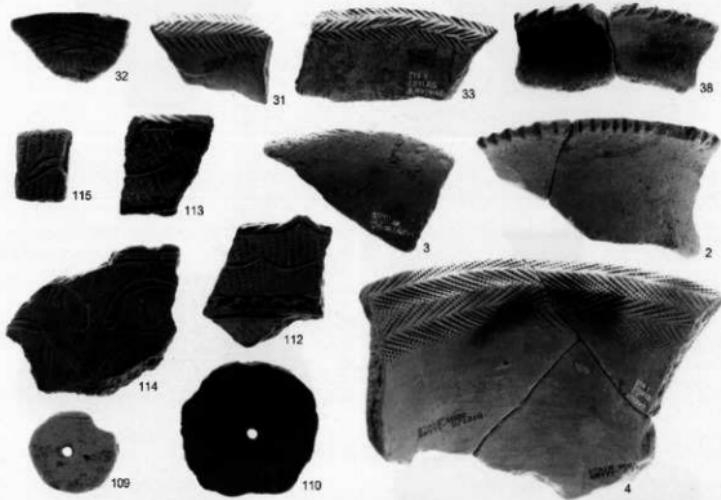
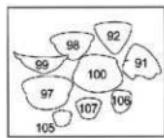
図版4 高島A遺跡〔1地区〕

出土遺物  
土器(1地区)  
溝SD02



高島 A 遺跡〔1 地区〕 図版 5

出土遺物  
土器(1 地区)  
満 SD02



図版6 高島A遺跡〔1地区〕

出土  
物  
土器(1地区)  
溝SD02



5



43



30



37



78



100

高島 A 遺跡〔2 地区〕 図版 7

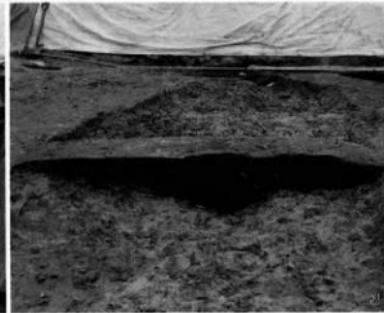
1. 遺構全景(北から)



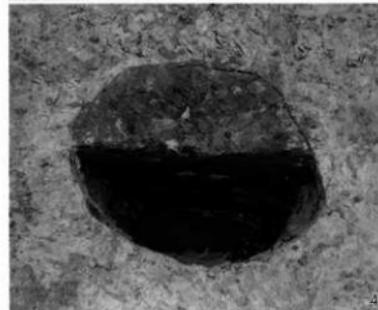
2. 溝SD01F-F'  
(南から)



3. 溝SD02H-H'  
(南から)



4. 土坑SK05  
(南から)

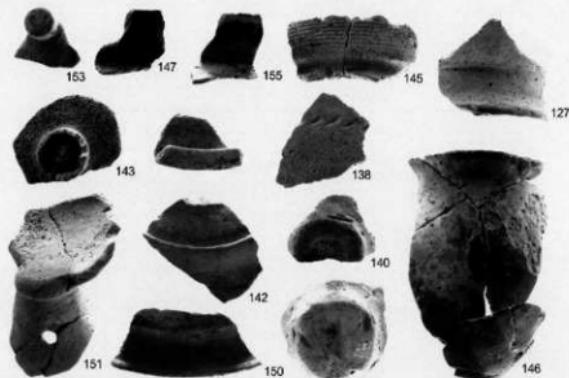


5. 谷SR04(南から)  
遺物出土状況

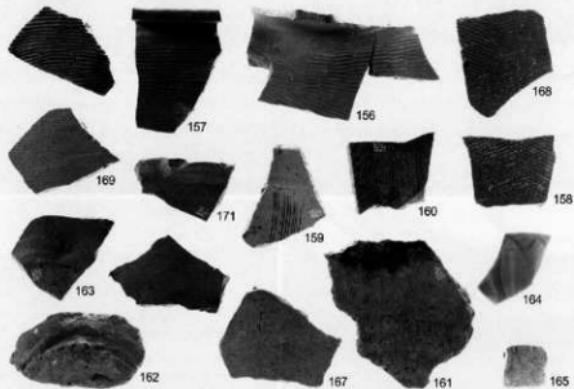


図版8 高島A遺跡〔2地区〕

出土物  
土器



土器・石製品



土器  
谷SR04



164



149

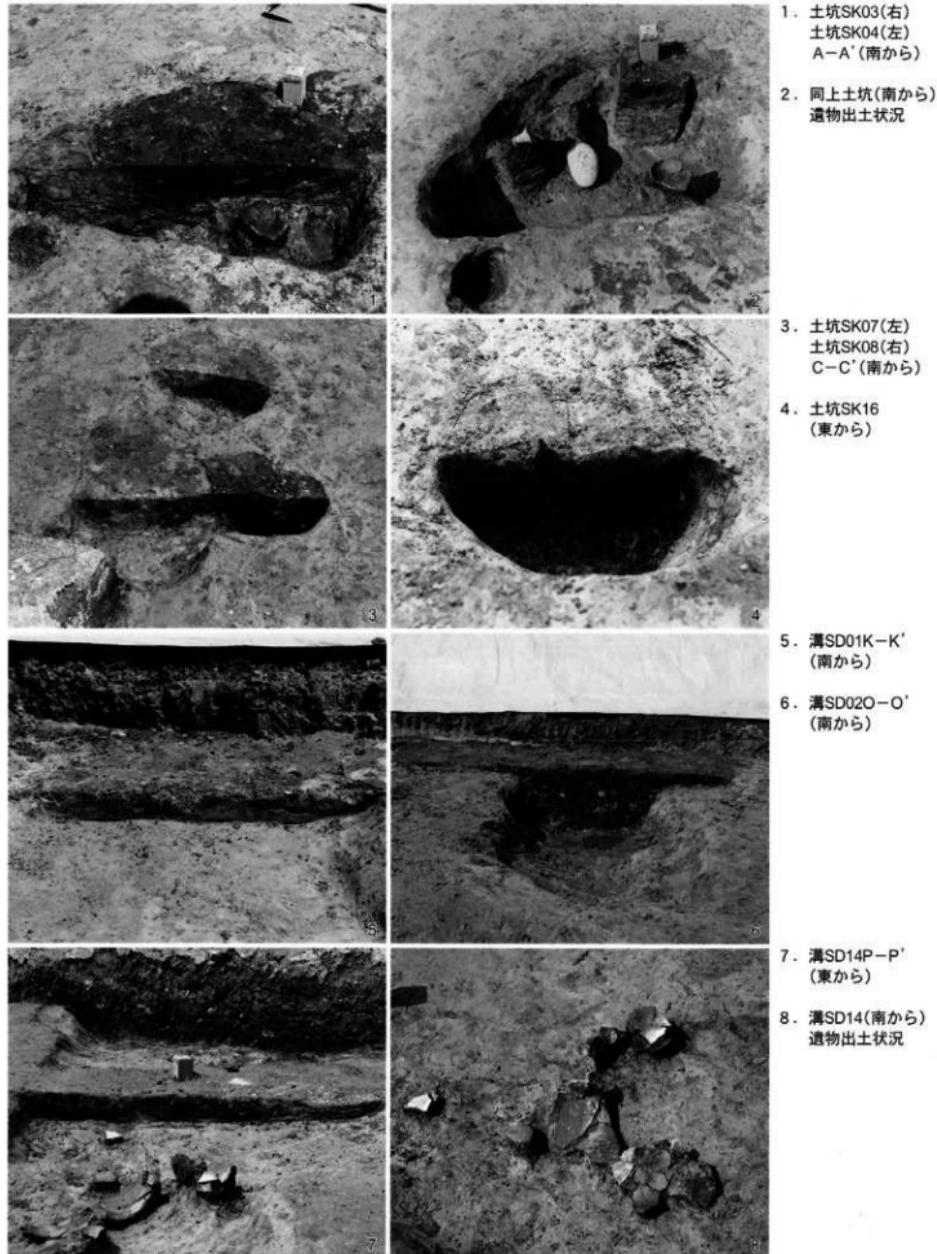
1. 造構全景(南から)



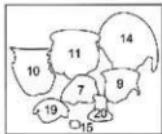
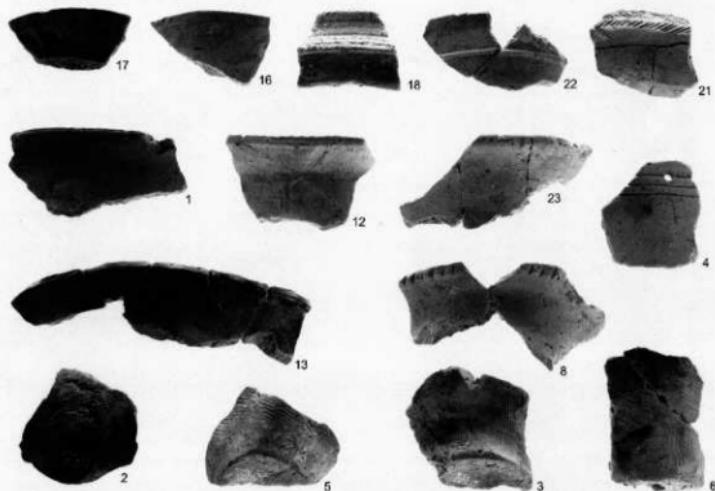
2. 造構全景(北から)



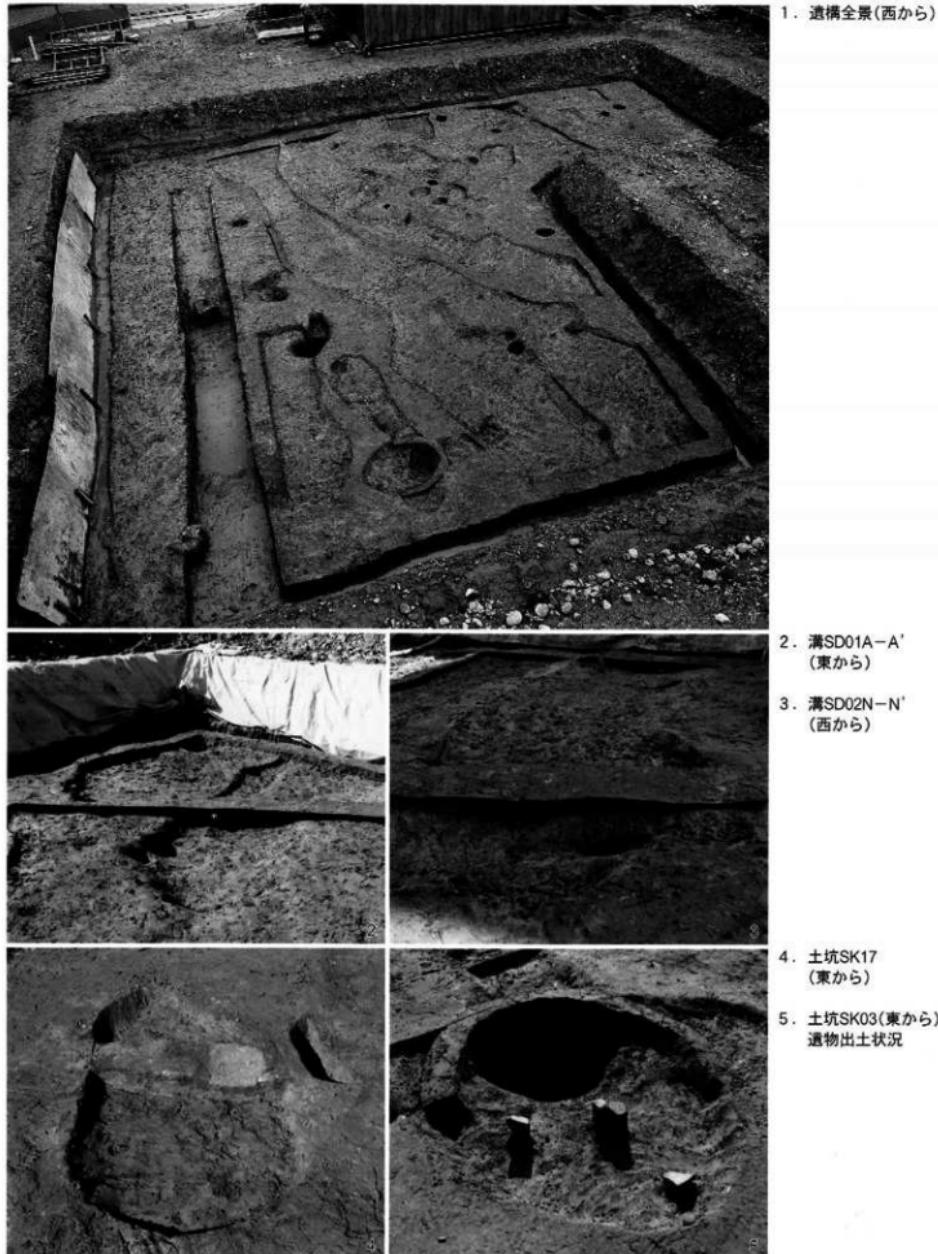
図版10 松木遺跡



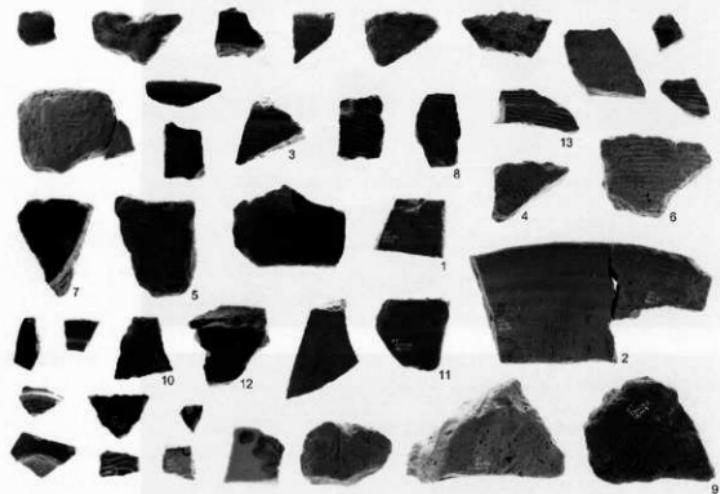
出土遺物  
土器



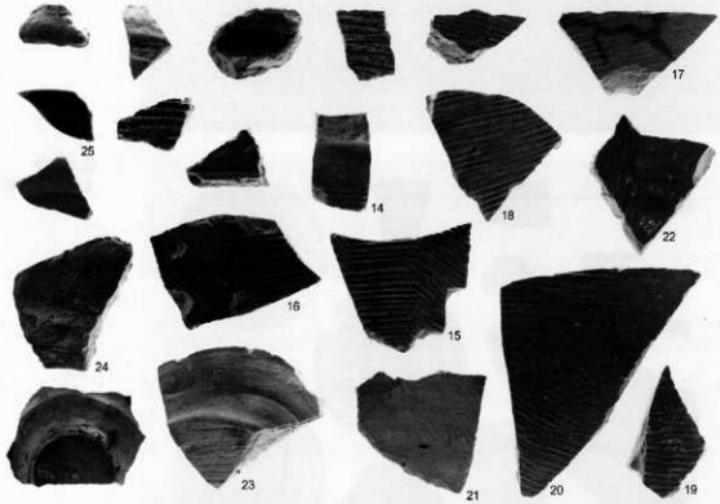
図版12 千田遺跡



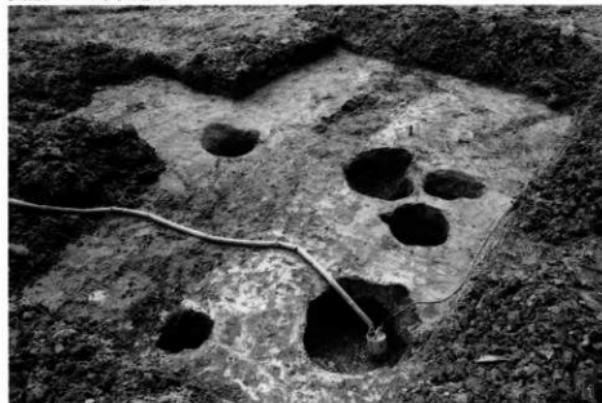
出土遺物  
土器  
(本発掘調査)



土器  
(試掘調査)



図版14 鳥取遺跡



1. 6トレンチ拡張区全景  
(東から)



2. 井戸SE01(南から)



3. 出土遺物  
土器・陶磁器

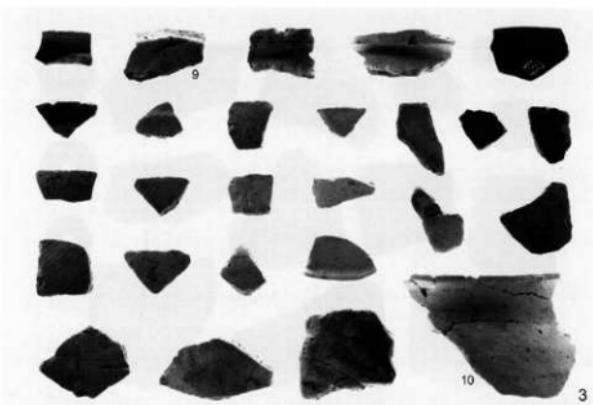
1. 2トレンチ掘削状況  
(東から)



2. 2トレンチ遺構内  
遺物出土状況  
(南から)



3. 出土遺物  
土器



図版16 小杉焼高烟窯跡



1. 溝状遺構検出状況  
(東から)



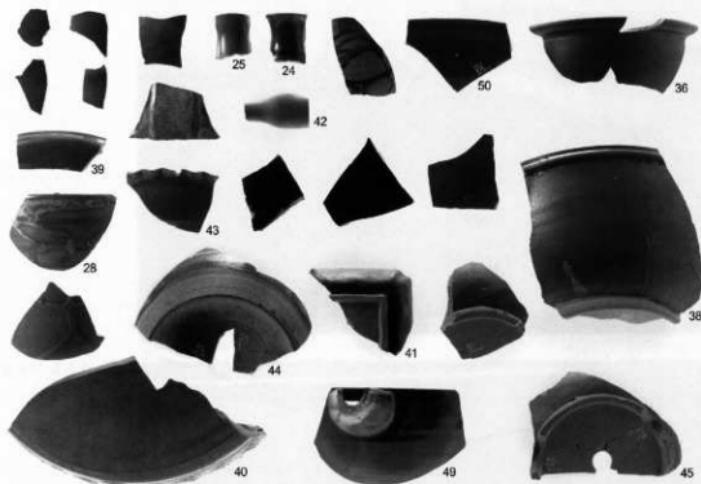
2. 溝状遺構断面状況  
(西から)

3. 出土遺物  
土器・石製品・銅鏡

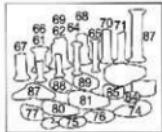


小杉燒高烟窯跡 図版17

出土遺物  
施釉陶器



窯道具



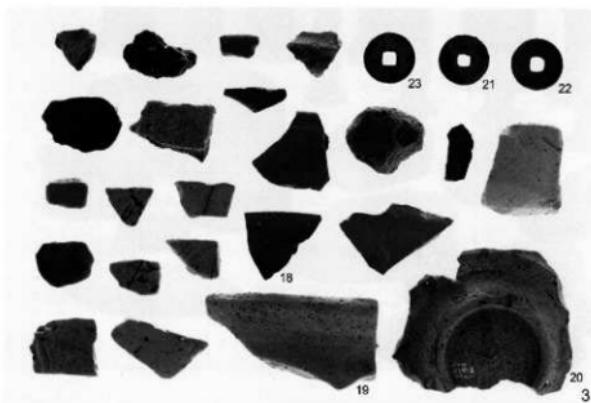
図版18 針原西遺跡



1. 1トレンチ掘削状況  
(西から)



2. 3トレンチ土層断面  
(北から)



3. 出土遺物  
土器・石製品・銅錢

1. 五歩一古墳群遠景  
(南から)



2. 1号墳(北東から)  
3. 2号墳(西から)



4. 3号墳(北から)  
5. 4号墳(西から)



図版20 日宮城址



1. 日宮城址遠景  
(西から)



2. 日宮城址近景  
(南から)



3. 日宮城址近景  
(東から)

# 報告書抄録

ふりがな	いみずしないいせきはくつちょうさほうこくに							
書名	射水市内遺跡発掘調査報告Ⅱ							
副書名	高島A遺跡・松木遺跡・干田遺跡本発掘調査他							
編著者名	田中 明 金三津 美則							
編集機関	射水市教育委員会							
所在地	〒933-0292 富山県射水市加茂中部893番地 TEL0766-59-8093							
発行年月日	西暦2010年 3月12日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
たかしまえい いせき 高島A遺跡	とやまけん いみずし 富山県射水市 かがのみやのよしこ 鏡宮弥生	16211 (16203)	027 (028)	36° 45' 14"	137° 05' 15"	平成19年度 20071127～ 20071217	89m <sup>2</sup>	個人専用 住宅建築
まつのき いせき 松木遺跡	とやまけん いみずし 富山県射水市 まつのき 松木	16211 (16203)	019 (019)	36° 45' 40"	137° 04' 20"	平成20年度 20080718～ 20080811	87m <sup>2</sup>	個人専用 住宅建築
はしてん いせき 干田遺跡	とやまけん いみずし 富山県射水市 あおひだに 青井谷	16211 (16381)	259 (199)	36° 41' 02"	137° 04' 45"	平成20年度 20081027～ 20081113	98m <sup>2</sup>	個人専用 住宅建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
高島A遺跡	集落 散布地	弥生(後期) 鎌倉・室町時代	溝・自然流路 谷・土坑 掘立柱建物	弥生土器・珠洲 青磁・鳥形木製品 砥石・石製品				
要約	弥生時代の自然流路から大量の弥生土器(後期)や祭祀用と考えられる鳥形木製品が出土した。また、鎌倉・室町時代の屋敷地等を区画する溝を確認し、珠洲や龍泉窯の青磁碗が出上した。この区画溝が自然流路を掘り込んだ人为的な遺構であることが判明した。							
松木遺跡	集落 散布地	弥生(中期)	溝・土坑 平地式建物	弥生土器				
要約	松木遺跡としては初の建物跡2棟を確認した。周溝を持ち、壁周溝を持たない平地式建物と考えられる。2棟同時ではなく、1棟廃絶後に移転して建てられたものと考えられる。							
干田遺跡	集落 散布地	弥生(後期) 鎌倉・室町時代	溝・土坑	弥生土器・須恵器 珠洲・八尾・瀬戸美濃 近世陶磁器				
要約	干田遺跡を含む「金山」の地名は、貞治5年(1366)「足利義詮御判下文」が初見と考えられ、それ以前の史料がなく実態不明であった。今回の調査で、13世紀中葉以降の出土遺物により、鎌倉時代中期から周辺域に集落を営んでいたことが判明した。							

\* コード欄の( )内の数字は合併前の富山県埋蔵文化財包蔵地図の遺跡番号を示す。

\* 試掘調査の抄録は第7表を参照する。

## 射水市内遺跡発掘調査報告Ⅱ

—高島A遺跡・松木遺跡・干田遺跡本発掘調査他—

---

2010(平成22)年3月12日 発行

編集・発行 射水市教育委員会

〒933-0292

富山県射水市加茂中部893番地

TEL0766-59-8093

印 刷 株式会社タニグチ印刷

---

